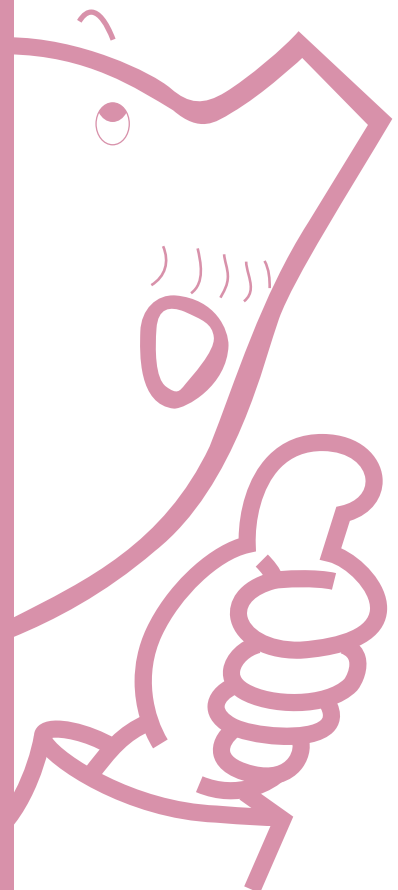


実践的大学教授法の開発を目指して

『成長するティップス先生』の記録 2004.08 ▶ 2005.03

2005・05

名古屋大学高等教育研究センター



特色GPシリーズ1

実践的¹大学教授法の開発を目指して

「成長するティップス先生」の記録 2004.08 - 2005.03

2005.05

名古屋大学高等教育研究センター

特色GPシリーズの刊行にあたって

名古屋大学高等教育研究センターは、1998年4月の創設以来、高等教育の質的向上を目指した研究・開発を行うとともに、その成果を、名古屋大学内にとどまらず、他大学・他センターをはじめとする学外諸機関に対しても積極的に公表してきました。幸い、その多くは、みなさまから広範な支持をいただくことができました。

こうした活動が評価され、2004年度には、文部科学省が推進する「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP)に、当センターが中心となって名古屋大学全体で取り組みを進めてきた「教員の自発的な授業改善の促進・支援 - 授業支援ツールを活用した授業デザイン力の形成」が採択されました。この取り組みは、教員が自ら進んで授業を改善する活動を促進することを目的としたものであり、授業改善の方法論の開発、そして具体的な実践手段の提供を通じて、授業改善に必要な不可欠のスキルである「授業デザイン力」を、個々の教員が自分に適したやり方で身につけることを支援しようとするものです。特色GPでは、これまでの取り組みの内容をさらに充実させるとともに、その成果を学内外に広く普及させることが課題です。当センターは、こうした課題を遂行するために、新たなプロジェクトを立ち上げました。これは、オンライン・ティーチングティップスである『成長するティップス先生』と、ウェブ上でシラバス作成を支援するツールである『ゴーイングシラバス』のさらなる充実・展開を中心に据え、さらに、これらに関連する試みとして、学生の学習支援のための「スタディティップス」の研究・開発、またこれらのツールを生かした新たなFDプログラムの研究・開発までも射程に含めるプロジェクトです。

当センターは、高等教育の現場で生じる諸課題に即応しうる研究・開発を目指してきました。したがって、本プロジェクトの最終的な成果の多くもまた、研修プログラム・サービス・ツールといった形で提供されることとなります。しかしながら、こうした最終成果に至る過程で積み上げられた研究や作業それ自体にも、他の研究活動やプロジェクトへとつながる知見・示唆が少なからず含まれるものと考えられます。こうした点を踏まえて、われわれは、開発の最終成果のみならずそのプロセスをもこれまで以上に積極的に学内外に公表すべく、ここに「特色GPシリーズ」を新たに刊行することにいたしました。

本シリーズを通じて、高等教育研究者をはじめ、授業改善に日々取り組んでおられる教育関係者、さらには高等教育に関心をお持ちの方など、広範な方々に当センターの情報を提供していく予定です。みなさまからのご意見・ご批判を頂戴し、今後の研究開発活動やその成果のいっそうの改善に役立てていきたいと考えております。どうかご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

2005年4月

高等教育研究センター長
戸田山 和久

はじめに

『成長するティップス先生』という名称には、成長し続けるティーチングティップスであってほしいという開発スタッフの願いが込められています。昨年、『成長するティップス先生』に代表される授業支援ツールを活用した名古屋大学の取り組みが、2004年度「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されました。これを契機に、『成長するティップス先生』のさらなる成長を目指すことになり、2004年8月に改訂プロジェクトが立ち上げられました。そのプロジェクトには、“TIps, GEar up, Research”というキーワードからTIGERという勇ましい名前をつけました。本報告書は、2004年8月から2005年3月までのTIGERプロジェクトの活動の記録です。

2004年12月20日に『成長するティップス先生 Ver1.2』をホームページ上に公開することができましたが、それはTIGERプロジェクトの成果の一部です。TIGERプロジェクトは2005年4月現在においても継続しており、虎視眈々とさらなる成長を狙っています。そのため、本報告書では、Ver1.2への開発プロセスのみならず、Ver1.2以降の改訂に向けた資料も中間的成果として公開しています。

今回のTIGERプロジェクトは、特色ある大学教育支援プログラム「教員の自発的な授業改善の促進・支援 - 授業支援ツールを活用した授業デザイン力の形成」の下で実施されたものです。アンケートに回答していただいた全国の大学の先生方や、授業見学の機会をいただいた学内の先生方などのご協力によって、幸いにも新設した特色GPシリーズの第1号として本報告書を刊行することができました。紙面を借りて深く感謝する次第です。

プロジェクトチーフ
中井 俊樹

研究組織

(2005年3月31日現在)

企画会議

黒田 光太郎 名古屋大学 高等教育研究センター センター長(2004年12月まで)
戸田山 和久 名古屋大学 高等教育研究センター センター長(2005年1月から)
夏目 達也 名古屋大学 高等教育研究センター 教授
栗本 英和 名古屋大学 高等教育研究センター 助教授
近田 政博 名古屋大学 高等教育研究センター 助教授
中井 俊樹 名古屋大学 高等教育研究センター 助教授
鳥居 朋子 名古屋大学 高等教育研究センター 講師
中島 英博 名古屋大学 高等教育研究センター 助手
青山 佳代 名古屋大学 高等教育研究センター 助手
小湊 卓夫 名古屋大学 高等教育研究センター 助手
井上 和美 名古屋大学 高等教育研究センター 専門職員

プロジェクトメンバー

夏目 達也
中井 俊樹(プロジェクトチーフ)
中島 英博
青山 佳代
戸田山 和久(2005年2月から)
近田 政博(2005年2月から)

プロジェクトアシスタント

青柳 裕子 名古屋大学 高等教育研究センター アシスタントスタッフ
岡田 久樹子 名古屋大学 高等教育研究センター アシスタントスタッフ
森下 晴美 名古屋大学 高等教育研究センター アシスタントスタッフ
久保田 祐歌 名古屋大学 大学院文学研究科 大学院生
小林 克希 名古屋大学 大学院情報科学研究科 大学院生
東 良介 名古屋大学 大学院教育発達科学研究科 大学院生

報告書執筆者

夏目 達也
中井 俊樹(編集担当)
鳥居 朋子
中島 英博
青山 佳代

目 次

1	『成長するティップス先生 Ver1.2』の開発	中井 俊樹	1
2	『成長するティップス先生』に関するアンケート集計分析	中島 英博	7
3	『成長するティップス先生』に関するアンケート自由記述分析	青山 佳代	17
4	実践的教授法の抽出を目指した授業分析	夏目 達也	27
5	ハーバード大学におけるティーチングティップス	鳥居 朋子	35

【資料】

資料 1	Ver1.2 において改訂した内容	51
資料 2	ミーティング議事録	81
資料 3	授業見学記録	95
資料 4	『成長するティップス先生』に関するアンケート	117
資料 5	アンケート自由記述の一覧	123

1 『成長するティップス先生 Ver1.2』の開発

中井 俊樹

1. はじめに

「成長するティップス先生」は2000年3月に名古屋大学高等教育研究センターが開発した授業支援ツールである。「成長する」というコンセプトで開発されたこのツールは、2001年12月にVer1.1に、そして2004年12月にVer1.2に成長してきた。初期のVer1.0の開発プロセスに関しては戸田山(2001)に、Ver1.1への開発プロセスに関しては名古屋大学高等教育研究センター(2002)に報告書としてまとめられている。また、それぞれのバージョンの中身は、表1のURLで現在においても閲覧可能である。本稿では、Ver1.2への開発プロセスを記録としてまとめ、今後のバージョンアップに向けた資料とすることを目的とする。

表1 成長するティップス先生の各バージョン

『成長するティップス先生 Ver1.2』
2004年12月20日完成
http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/
『成長するティップス先生 Ver1.1』
2001年12月1日完成
http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/tips011/
『成長するティップス先生 Ver1.0』
2000年3月31日完成
http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/tips010/

2. TIGER プロジェクトの発足

文部科学省が推進する2004年度の「特色ある大学教育支援プログラム」に、高等教育研究センターを中心に進めてきた名古屋大学の取り組みである「教員の自発的な授業改善の促進・支援 - 授業支援ツールを活用した授業デザイン力の形成」が採択された。この取り組みの一つの柱が、「成長するティップス先生」を通じた授業改善のためのノウハウの公開と共有である。

高等教育研究センターでは、「成長するティップス先生」のさらなる改善を目指して、2004年8月に開発グループを立ち上げた。その開発プロジェクトのチーフとして任された筆者により、8月23日のセンター企画会議においてプロジェクト案が出され、同時に開発メンバーの募集が行われた。そして、夏目教授、中島助手、青山助手が開発スタッフとして加

わり、4人のスタッフで改訂に臨むこととなった。本プロジェクトは、Tips, GEar up, Research というキーワードから TIGER と名づけられた。

3 . 設定された目標

2004年9月9日の企画会議において、TIGER プロジェクトの目標が提示され、センターのスタッフの了承をえた。了承された目標は表2の通りである。

表2 TIGER プロジェクトの目標設定：3つのマイルストーン

1. Ver1.2 完成	2004.12.01 まで
最終更新以降のセンターの成果（例：成人・IT）等を中心に取り込む 例：本文の修正、節の追加、コラムなどの追加、センター長のあいさつ	
2. 改訂プロジェクト報告書	2004.03.31 まで
アンケート、授業見学・インタビューなどの記録の保存 GP全体の進捗報告書の中でも可	
3. Ver2.0 1st Draft	2005.08.31 まで
新たなティップスの制作 実践ノウハウの収集、教授法の原理と実践ノウハウの構造化	

改訂の目標として3つのマイルストーンが設定された。Ver1.2への改訂とVer2.0への改訂の2段階にしたのは、主に2つの理由がある。

第一に、高等教育研究センターが蓄積してきた研究成果やノウハウをVer1.1のフレームワークの中に反映させたかったためである。2001年12月にVer1.1に改訂してから3年近く改訂がされなかったが、その間高等教育研究センターではさまざまな教授法研究および学内外のFDの実践を経験していた。これらの経験をまず反映させてから、その次のステップとしてフレームワーク自体の見直しを含めた改訂に進みたかったからである。

第二に、これは高等教育研究センター内の事情に関わることであるが、2003年1月からセンター長に就任し、精力的に高等教育研究センターに貢献してきた黒田センター長の任期中に改訂したかったためである。したがって、任期の満了する2004年12月末までに改訂作業を一区切りすることを目標とした。

こうして、TIGER プロジェクトとしては、センターの近年の研究成果を中心に取り込む比較的マイナーチェンジとなるVer1.2への改訂と、大きくコンセプトレベルから考え直すことから始めるVer2.0への改訂が目標として設定された。

4 . 目標に向けた活動

設定された目標に向けて、具体的には以下のような活動が行われた。第一に、改訂のための示唆を得るために、Ver1.1までの内容に対するフィードバックをアンケートにより収

集した。第二に、名古屋大学の優れた授業実践を見学することで、現場の知見を収集する活動を開始した。第三に、センタースタッフのこれまでの活動の成果を中心に取り込み、Ver1.2 への改訂内容を開発した。第一と第二の活動成果の大部分は、Ver1.2 に取り込むことはせず、本報告書にまとめられ次回以降の改訂のための資料とした。

5 . 改訂した部分と役割分担

Ver1.2 への改訂した部分は、主に「授業の基本」,「コラム」,「学内教職員のサポート」,その他である。その改訂のプロセスは、プロジェクトミーティングにおいてプロジェクトメンバーもしくはその他の協力者に執筆担当部分を依頼し、執筆されたものをプロジェクトミーティングにおいてメンバーが確認・修正した上で、ホームページ上にアップロードするというものである。アップロードについては、大学院情報科学研究科大学院生小林さんに協力を得た。以下では、「授業の基本」,「コラム」,「学内教職員のサポート」,その他における開発内容と役割分担を示す。

5.1 授業の基本

高等教育研究センターでは、『成長するティップス先生』の内容に関連するさまざまなプロジェクトを別途行ってきた。新しい学生、新しい教育環境に対応するための教授法の研究にも着手してきた。新しい学生としては、プロフェッショナルスクールを背景に増加する社会人学生があり、こうした社会経験を持った成人学生に対する教授法について研究を進め、名古屋大学高等教育研究センター(2004)にその成果の一部をまとめてきた。また、新しい教育環境としては、eラーニングの普及があり、情報通信技術を活用した教授法についての研究を学内の情報メディア教育センターと共同で進め、中井他(2003)にその成果の一部をまとめてきた。このような高等教育研究センターで蓄積してきた内容を「授業の基本」部分に反映させることにした。

情報通信技術を活用した授業のティップスについては、「5章 魅力ある授業を演出する」の「5.3 授業の大道具・小道具」に、新たに「5.3.3 新しい道具がもたらすメリット」を加えた。この原稿のドラフトは中島助手が担当した。一方、社会経験を持った成人学生に対する授業のティップスについては、「10章 学生の多様性に配慮する」に、新たに「10.3 成人学生の学習を支援するためのティップス」を加えた。この原稿のドラフトは筆者が担当した。

5.2 コラム

コラムの執筆については、広くセンタースタッフや学外の教員に執筆を依頼した。開発メンバー以外には、黒田センター長、近田助教授、鳥居講師、池田名城大学教授が執筆した。合計16個のコラムを集めることができた。表3がコラムのタイトルと担当者である。また、Ver1.1 まであった「カリキュラムのグランドデザインがなきゃ始まらない」および

「私の名大デビュー」の2つのコラムは内容が古くなったため新作コラムに置き換えた。

表3 新しいコラム一覧

コラムのタイトル	担当者
コースデザインは手順が命	中島
フィクション「みればわかる?!カリキュラムのグランドデザイン」	鳥居
ルンバをスマートに踊れますか?	中島
社会が学生に求めるもの	夏目
はじめてのシラバス作成	青山
学生は4年間の大学生活でどのように発達するの?	中井
私の名大デビュー	中島
学生はますます多様に	夏目
大規模クラスで教えるコツは	池田
新しい道具で思わぬ苦労	中島
学生をほめてのばそう	中井
まずは、いっしょに歩こう	中島
シラバスどおりの授業	黒田
学生による授業評価からわかる教授法ランキング	中井
アメリカで最も有名な大学教授法	中井
社会人大学院でどう教えるか	近田

5.3 学内教職員のサポート

Ver1.2の開発に向けて開発スタッフの中で議論したのは、名古屋大学の教職員へのサポートをどのように進めるのかであった。ウェブ版の『成長するティップス先生』のサブタイトルは「名古屋大学版ティーチングティップス」であったが、サイトへのアクセスなどから学外の教員を中心に利用されていることがわかっていった。そのような現状の下で、学内教職員へのサポートを充実させることをプロジェクトミーティングにおいて決定した。

学内教職員へのサポートを充実させるために、いくつかの国内外の教授学習センターのプログラムやサービスを参考に調査した。そして、名古屋大学の教職員へのサービスを中心とした「学内教職員のサポート」のページを「みんなの部屋」の下に作成した。表4が学内教職員へのサポートの一覧である。8つのタイプのサービスから構成されている。この原稿のドラフトは夏目教授が担当した。

表4 学内教職員へのサポート

<ul style="list-style-type: none"> ・FD 講演・ワークショップに講師を派遣します ・ゴーイングシラバスの利用をサポートします ・授業の悩みの相談にのります ・メンターを紹介します ・『名古屋授業研究』に投稿しませんか ・授業を見学させてください。授業と一緒に見学しませんか ・高等教育研究センターの各種セミナーに参加しませんか ・高等教育研究センターのニュースレターをご覧ください
--

5.4 その他

上記の「授業の基本」、「コラム」、「学内教職員のサポート」以外にもいくつか改訂した部分がある。表5がその改訂箇所とその改訂内容である。

表5 その他の改訂箇所

改訂箇所	改訂内容	担当者
トップページ	情報の最新化とデザイン修正	中井
ごあいさつ	Ver1.2用の新規あいさつ文	黒田
はじめに、目次	情報の最新化	中井
困ったときに - INDEX、FAQ	新規内容の検索の充実化	中井
情報への窓口 - 図書	最近の図書の紹介	青山
みんなの広場 - アンケート	アンケートの新設	中井

6 . Ver1.2 までの到達点

上記のような改訂がなされ、2004年12月20日に Ver1.2 をウェブ上で公開することができた。今回の改訂は以下のようにまとめられると言えよう。

第一に、センタースタッフのこれまでの活動の成果を中心に取り込み、Ver1.2 への改訂内容を開発したという点である。高等教育研究センターが進めてきた情報通信技術を活用した教授法、成人学生に対する教授法、学内外のFDの実践経験を改訂に取り込んだ。一方、TIGER プロジェクトでは、Ver1.1 に対するアンケートや授業見学なども進めていたが、それらの結果の大部分は今回の改訂には反映させなかった。

第二に、学内教職員に向けたサポートを充実させたことである。これは Ver1.1 のフレームワークを越えた部分であり、当初の Ver1.2 への改訂計画にはなかったものである。しかし、FDに関する調査研究などを進めるにつれ、名古屋大学の教職員へのサポートの強化の方法として、高等教育研究センターの教員による直接的なサービスを開始することを開発スタッフ内で合意した。具体的には、FD講演・ワークショップへの講師派遣のみならず、授業の相談などの個別サービスにまで支援体制を広げることになった。

Ver1.2 以降の改訂については、改訂のための資源は充実しつつある。TIGER プロジェクトで進めてきたアンケート結果は、改訂のためのさまざまな貴重な情報が含まれている。アンケート回答者へのインタビューや講師依頼も計画中である。また、授業見学からの知見も蓄積されつつある。さらに、高等教育研究センターで進めているFD活動やシラバスコンテストなどの取り組みもティップス先生の改訂に示唆を与えるであろう。その他にも、高等教育研究センター内で近田助教授を中心に進めているスタディティップス開発プロジェクトとの連携も進みつつある。このような資源を活用すれば、今回のバージョン情報が示す0.1の成長ではなく、Ver2.0への成長が見えてくると思われる。

参考文献

- 戸田山和久編(2001)『大学新入生の実態に即した教授技法の開発に関する調査研究』平成11・12年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究実績報告書,名古屋大学
- 中井俊樹・山里敬也・中島英博・岡田啓(2003)『eラーニングハンドブック - ステップでつくるスマートな教材』マナハウス
- 名古屋大学高等教育研究センター(2004)『プロフェッショナルスクールのための授業設計ハンドブック』名古屋大学
- 名古屋大学高等教育研究センター(2002)『「成長するティップス先生」の記録2001.04-2002.03』平成13年度名古屋大学教育改善推進費プロジェクト報告書

2 『成長するティップス先生』に関するアンケート集計分析

中島 英博

1. はじめに

『成長するティップス先生』は、2000年3月にウェブ版として公開後、2001年に書籍版の刊行やウェブ版 Ver.1.1 の公開を通じて、コンテンツの充実を図ってきた。しかし、初版が公開されてから5年が経過し、学内外における成果と今後の発展の方向を評価・検討する時期に来ているといえる。そこで2004年10月より、ウェブ版 Ver.2.0 の制作へ向けて抜本的な改訂作業に着手することとなった。本節ではこの作業の一環として、現在公開している『成長するティップス先生』の課題についてアンケート調査を通じて明らかにする。

2. 調査の目的と方法

『成長するティップス先生』では、教員が個人単位で取り組める授業改善活動を支援することが、基本的な役割である。『成長するティップス先生』を中心とする取り組みが、文部科学省の推進する特色ある大学教育支援プログラムに採択されたことは、その役割が一定の評価を得たことを表すものといえるだろう。

中島(2002)で指摘されているように、『成長するティップス先生』は学外からも注目されており、学内における活用にとどまらない普及力を持っている。これは特定の教員層にのみ有効という性格のものではなく、幅広い層の教員によって活用されうる可能性を示唆するものであろう。しかし、『成長するティップス先生』のこういったコンテンツが有効と考えられているのか、あるいはこういったコンテンツが不足しているのかについては、これまで必ずしも客観的に把握できていなかった。

そこで今回は『成長するティップス先生』の改訂に向けて、学外から客観的な評価を得ることを目的にアンケート調査を行うこととした。特に、現在のコンテンツが教員の授業改善に役に立つかどうか、および改訂の方向性に関する要望の二点に関する調査を行うことを目的とした。

アンケート調査は、11月下旬より全国721の国公立大学へ調査票を郵送する形式で行った。調査票の内容については、資料4を参照されたい。宛先は「FD企画・実施担当者」とし、学内における授業改善活動について、個人的見地と組織的見地の双方から意見を述べられる方からの回答を想定して依頼した。上述の目的の通り、『成長するティップス先生』の改訂に関する内容を問うため、書籍版を一冊同封して閲覧の上で回答できる工夫を行った。回収期間は約1ヶ月に設定し、2004年12月20日までの回答を依頼した。

3. 調査結果

3.1 調査結果の概要

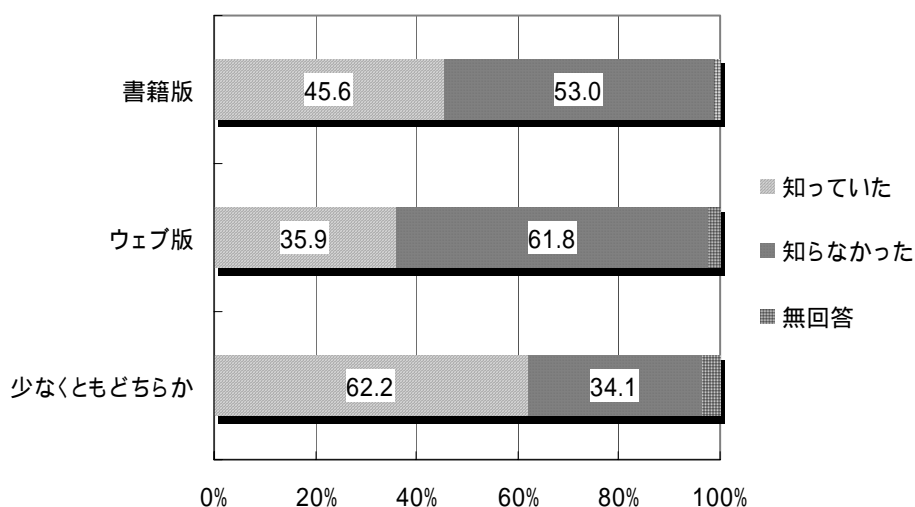
アンケート回答依頼の結果 217 の大学から回答が得られ、回収率は約 30%となった。回答者のうち 1 割に満たない割合で、学務課長・教務課長といった F D 関連の業務に携わる事務職員から回答があったが、大多数が学長・副学長・学部長を含む教員からの回答であった。特に、役職者と教授・助教授だけで 7 割以上を占め、40 歳代以上で 8 割以上を占めている。ある程度授業経験が豊富で、学内の教育活動の実態をよく知った先生方からの回答が得られたと言ってよいだろう。また回答者の専門領域は特定の分野に偏ることなく、文系・理系とも幅広い専門領域を背景にした回答が集められた。国立・公立大学からの回答は 1 割未滿で、大多数は私立大学からの回答であった。

以下では、各設問項目に沿って集計結果を検討していく。

3.2 『成長するティップス先生』の認知度について

まず、『成長するティップス先生』そのものがどの程度認知されているかについてたずねた。集計結果は図 1 の通りである。書籍版を知っていたという回答は約 46%、ウェブ版を知っていたという回答は約 36%であった。また、書籍版とウェブ版の少なくともどちらかを知っていたという回答で見ると、約 62%が『成長するティップス先生』を知っていたということが分かり、認知度は高いといえる。近年各大学で教育改善に関する取り組みが進められているが、他大学の取り組みの状況については近隣大学の状況以外は把握しにくいものだろう。その中で、この結果は名古屋大学における取り組みが全国のかなりの大学によって認知されていることを示唆するものであろう。

図 1 「成長するティップス先生」を知っていたか

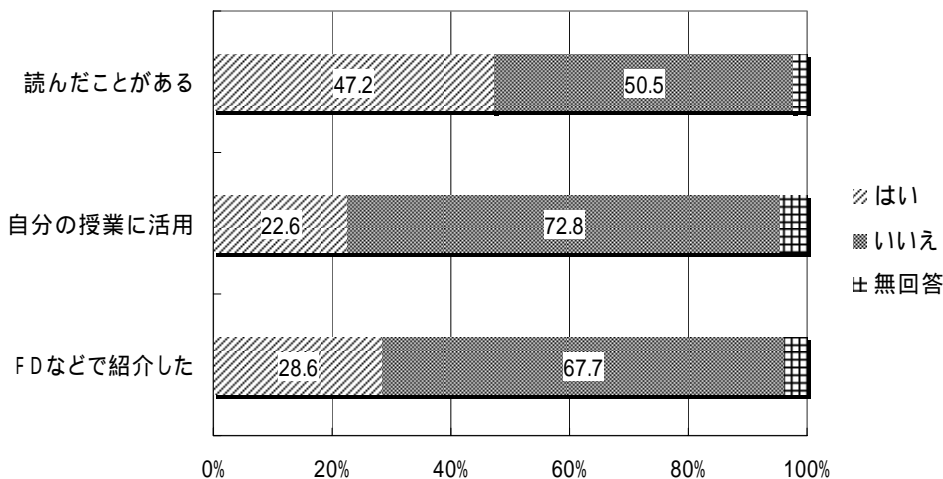


ウェブ版についてはこれまで恒常的なアクセスがあり、その認知度は高いと考えられていたが、書籍版の認知度に比較してやや劣ることも明らかとなった。年齢構成別に見たウェブ版と書籍版の認知度はほぼ同じであり、若い世代ほどウェブ版の認知度が高いなどの傾向が決して見られるわけではない。この結果は、今後の開発成果の提示方法を検討する上でも興味深い点である。

3.3 『成長するティップス先生』の活用実績について

次に、『成長するティップス先生』を利用したことがあるかについて、「読んだことがある」、「読んで自分の授業に活用した」、「FDなどで紹介したことがある」の3点をたずねた。集計の結果、読んだことがあるという回答が半数近くあり、先の認知度の結果からみて『成長するティップス先生』を知っていた人の多くが、何らかの形で読んだことがある実態を表していると言えよう。その一方で、自分の授業で活用したとの回答は約23%にとどまった。このことは、コンテンツが実践に結びつきにくいことを示唆する可能性があり、今後の改訂で考慮すべき結果といえる。しかし、次章の自由記述分析でも示すとおり、既に知っていた・実践していた内容であったという意見も一部にあり、どのような要因が今回の低い活用度にとどめたかについては、別の角度からの分析が必要である。授業での活用に関わらなかったかについては結果となった。また、FDなどで他の教員に紹介している割合も3割に満たないことも示されている。

図2 『成長するティップス先生』を利用したことがあるか



3.4 『成長するティップス先生』の全体的な評価について

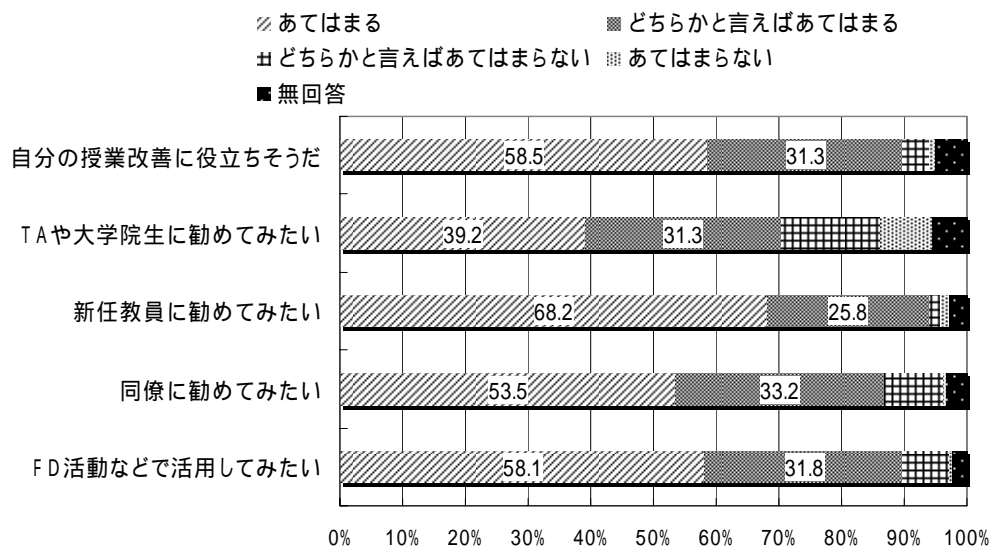
今回の調査では書籍版を同封し、そのコンテンツを読んでもらった。まず、内容の全体的な印象・感想についてたずねた。具体的には読んだ感想について、「自分の授業改善に役立つそうだ」、「TAや大学院生に勧めてみたい」、「新任教員に勧めてみたい」、「同僚に勧

めてみたい」、「FD活動などで活用してみたい」という点について、「あてはまる」、「どちらかと言えばあてはまる」、「どちらかと言えばあてはまらない」、「あてはまらない」の4段階で評価をたずねた。

「TAや大学院生に勧めてみたい」という項目を除くと、それぞれ「あてはまる」との回答が半数以上、「どちらかと言えばあてはまる」まで含めた肯定的な評価は9割に達する結果となった。『成長するティップス先生』のコンテンツの有効性の一端を示す結果といえるだろう。中でも「新任教員に勧めてみたい」という点については、特に高い支持が得られた。『成長するティップス先生』の制作コンセプトの一つに、とりわけ初めて教壇に立つ教員の方々に有益なアドバイスとなることを念頭に制作したという点があり、その妥当性が評価されたと考えてよいだろう。また、「同僚に勧めてみたい」、「FD活動などで活用してみたい」という点についても高い肯定的評価を得たことは、組織的な活用について高い期待・ニーズがあることを示しており、今後の改訂でどのようにして組織的な活用を支援するかという点を積極的に検討する必要があるといえよう。

「TAや大学院生に勧めてみたい」という項目で、比較的低い評価となった点については、TA制度を設けていない場合や、大学院生の数があまり多くない大学が多数含まれていることによる可能性がある。従って、この点の評価は慎重に行うべきであろう。

図3 『成長するティップス先生』を読んだ感想



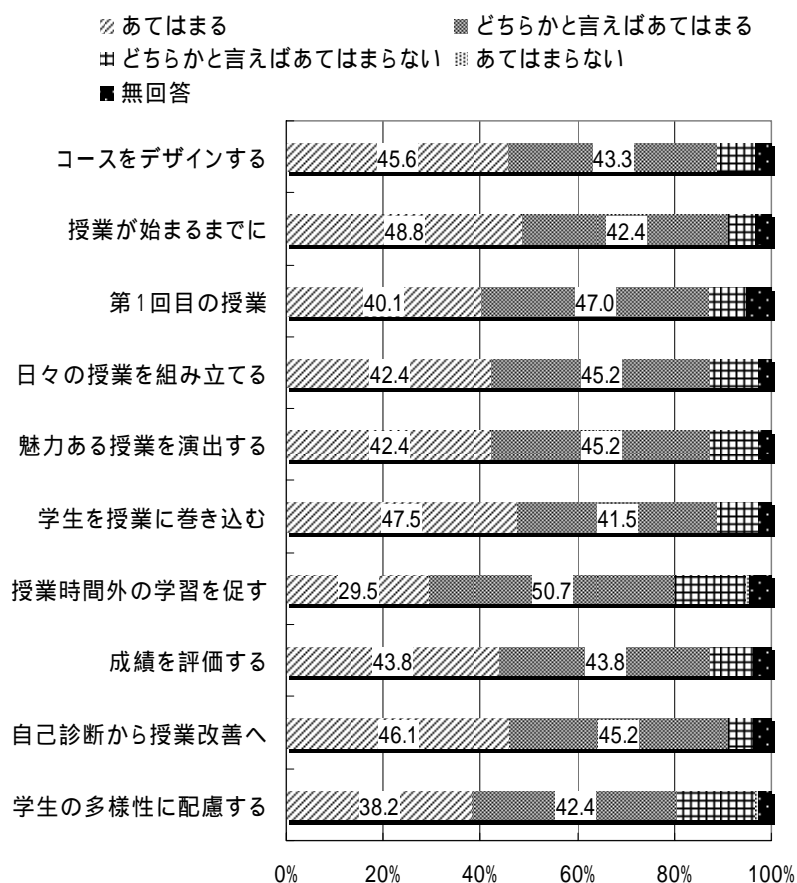
3.5 「授業の基本編」のコンテンツ評価について

全体的な評価に続き、『成長するティップス先生』のコンテンツの中核ともいえるべき「授業の基本編」の内容について授業改善に役立つものかをたずねた。「授業の基本編」は、「コースをデザインする」、「授業が始まるまでに」、「第1回目の授業」、「日々の授業を組み立てる」、「魅力ある授業を演出する」、「学生を授業に巻き込む」、「授業時間外の学習を促す」

「成績を評価する」、「自己診断から授業改善へ」、「学生の多様性に配慮する」の10章から構成されており、初回の授業が始まるまでの準備から成績評価に至るまで、教員が直面する悩みについて時系列・場面別にノウハウを提示する形をとっている。

結果は多くの章で「あてはまる」という回答が4割程度、「どちらかと言えばあてはまる」まで含めた肯定的評価は8割程度得られた。逆に、「授業時間外の学習を促す」、「学生の多様性に配慮する」の二つに関しては他の章と比べて相対的に低い評価となった。特に「授業時間外の学習を促す」については教育の質的向上につながる重要なテーマであると考えられるが、このコンテンツに対する評価が相対的に低かった点は注目に値し、どのような要因がこの結果をもたらしたかについて慎重に検討する必要があるだろう。内容の妥当性に問題があるのか、内容の提示・表現方法に問題があるのかなど、この点の検討は自由記述の考察および今後の課題にゆずりたい。

図4 「授業の基本編」は授業改善に役立つか



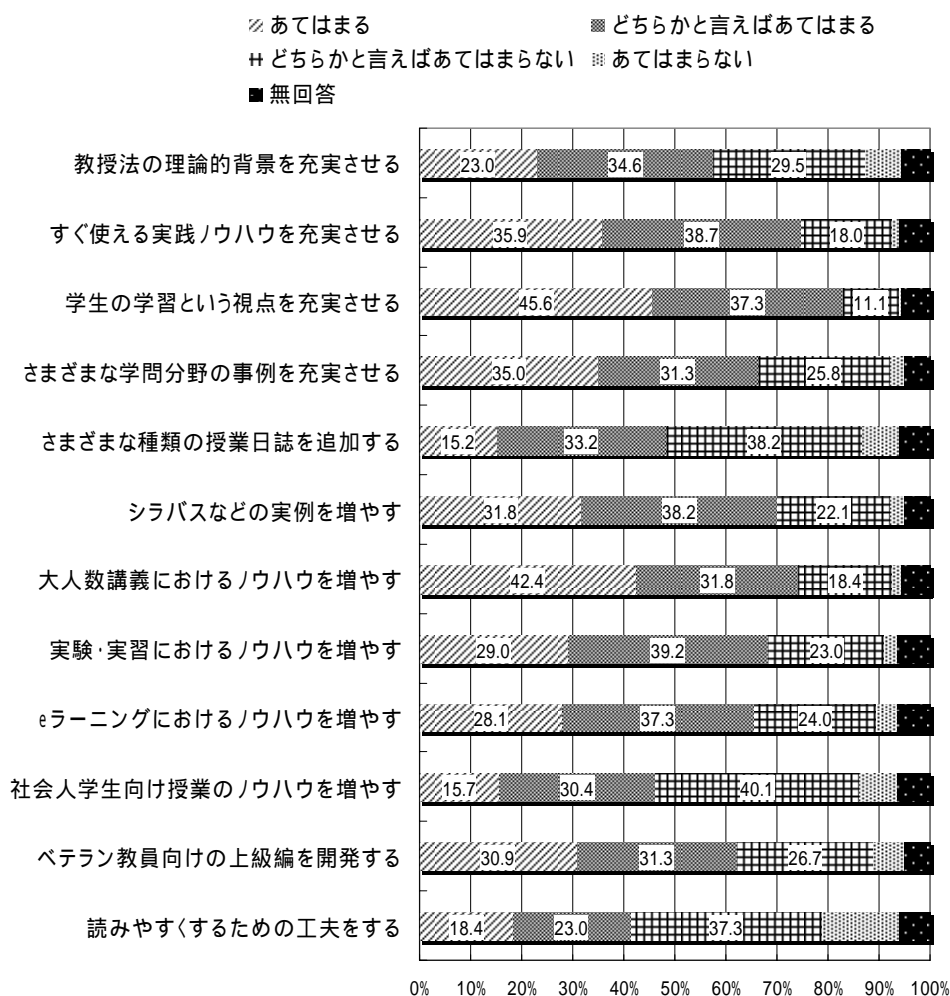
3.6 『成長するティップス先生』の改訂の方向性について

今後の改訂へ向けて潜在的なニーズを把握するために、『成長するティップス先生』の改訂の方向性についてもたずねた。12項目にわたってたずねた結果、今後の改訂へ向けた興

味深い結果が得られた。

まず、「あてはまる」という回答で相対的に高い要望があった項目は、「学生の学習という視点を充実させる」と「大人数講義におけるノウハウを増やす」という二点である。この二点は、現在の『成長するティップス先生』において十分に言及されていない点であるが、多くの教員のニーズがある領域と考えられる。今後の改訂において、この点を重点的に充実させていくことが期待される。

図5 『成長するティップス先生』の改訂の方向性



上記二点の次に、相対的に高い要望があった項目は、「すぐ使える実践ノウハウを充実させる」、「さまざまな学問分野の事例を充実させる」の二点である。特に、「すぐ使える実践ノウハウを充実させる」については、「どちらかと言えばあてはまる」まで含めた積極的要望が高い。これは現在提供している『成長するティップス先生』で、すぐに使える実践ノウハウが十分に提供されていないことを示唆しているかもしれない。しかし、『成長するティップス先生』は、通して読まないと使えないものにしない、興味のあるところだけ読ん

でも使える、どこから読んでも構わない、授業に行く5分前に研究室で読めるといった手軽さを重要なコンセプトの一つに掲げ、各教員ができるところから、興味を持ったところから授業改善に取り組める支援を意図してきた。次章の自由記述分析では、既に十分実践的であるという評価から、未だ抽象的な説明に留まっているという評価まで多様に別れている。今回の結果は、より多くの利用者にすぐ使える実践ノウハウを提供できるよう、一層の改善が期待されていると考えるべきだろう。

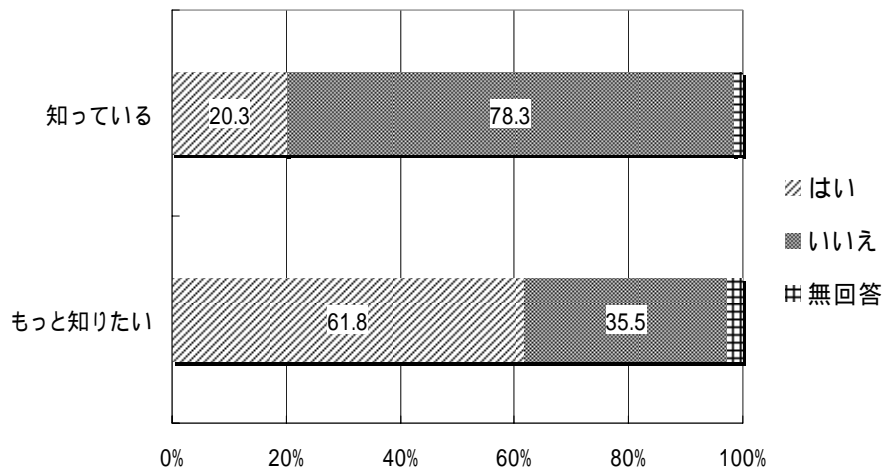
最後に、「あてはまる」という回答で2割以下、「どちらかと言えばあてはまる」まで含めても5割以下の積極的回答となったのが、「さまざまな種類の授業日誌を追加する」、「社会人学生向け授業のノウハウを増やす」、「読みやすくするための工夫をする」の三点である。授業日誌は『成長するティップス先生』のコンテンツの全体像を俯瞰する意図で設けてあり、この点についてはその役割が十分に果たされているといえよう。また、読みやすさについても知的でありながら独特の親近感ある文体により、一定の評価を得たものと考えてよいだろう。今後の改訂では、文章表現等の体裁の問題はそれほど小さくなく、すぐに使えるノウハウを充実させたコンテンツの改訂が望まれているものと言える。「社会人学生向け授業のノウハウを増やす」についてあまりニーズがなかった点も、興味深い結果である。近年、社会人大学院や生涯学習ニーズ拡充に沿って、社会人学生向けの授業ノウハウの充実が求められていると予測していた。しかしながら、今回の調査では多くの大学の教員が『成長するティップス先生』に期待している役割は、伝統的な学生に対する授業改善のノウハウ集であることがわかった。社会人学生向けの授業ノウハウに潜在的なニーズがあると考えられるが、当面の改訂における優先順位は低いと考えてよいだろう。

3.7 「ゴーイングシラバス」の認知度について

最後に、今回の調査では『成長するティップス先生』から派生した授業改善支援ツールである、「ゴーイングシラバス」についてもたずねている。「ゴーイングシラバス」は、ウェブ上でシラバスを作成し、授業の進行でもシラバスを活用するためのツールである。

「ゴーイングシラバス」の認知については、2割程度の認知度にとどまり大多数の大学のFD担当者に認知されていない実態が明らかとなった。これまで「ゴーイングシラバス」は開発途上にあり、有志の教員による利用と利用後のフィードバックからツールの改訂を行うという作業を進めてきた。こうした背景からも、学外における認知度は決して高いものとならないことが予想された。しかし、認知度は低いながらも全国の大学を対象にしたアンケート調査で2割の認知を得ている点が興味深い。さらに、「もっと知りたい」という回答が6割以上ある。これらは、今後の「ゴーイングシラバス」の学外普及に高い期待ができる結果であり、多くの大学で『成長するティップス先生』以外にも具体的な成果を伴うノウハウ・ツールの提供が望まれていることを示唆するものといえよう。

図6 「ゴーイングシラバス」について



4. アンケート調査から見た今後の課題

以上、アンケート調査の集計結果からみた『成長するティップス先生』の課題と今後の改訂について検討してきた。本節で得られた今後の改訂へ向けた示唆をまとめると次の通りである。

- ・ 今後の改訂においては、すぐに使える実践的なノウハウの充実が最重要課題である
- ・ コンテンツにおいては、学生の学習スタイルを知ることや、学生の学習をを支援するためのノウハウの充実が求められている。中でも授業時間外の学習を促進するノウハウと、大人数講義におけるノウハウの充実が最重要課題である。
- ・ 組織的な活用においては新任教員による活用につながるよう改訂すべきである
- ・ 成果はウェブ版で開発するとともに紙媒体でも提供すべきである

最後に、本節の分析に関する留意点についても触れておきたい。本節では全国の大学のFD担当者を対象にしたアンケート調査の集計に基づくもので、全国の大学の平均的な側面を反映したものにすぎない可能性がある。今後の改訂の方向を検討する際には、次節でみる自由記述の質的分析も重要であり、慎重に行うべきだろう。また、『成長するティップス先生』のウェブ版 Ver.1.0 をはじめて公開した際、コンテンツの主たる提供先は名古屋大学の教員に向けたものであった。Ver.1.2 となった現在でも、その「はじめに」において、「名古屋大学人による名古屋大学人のためのティップス」が特徴であることが明記されている。今後の改訂において、本節で考察した平均的なニーズを考慮しながらも、教員の自発的授業改善の促進という大きなコンセプトに基づき、現場の教員に十分活用されるティップスへ成長していくことを期待したい。

参考文献

中島英博(2002)「アクセス記録とメディアにおける紹介」名古屋大学高等教育研究センター『「成長するティップス先生」の記録 2001.04-2002.03』平成13年度名古屋大学教育改善推進費プロジェクト報告書

3 『成長するティップス先生』に関するアンケート自由記述分析

青山 佳代

本稿では、『成長するティップス先生』に関するアンケートにおける自由記述意見を分類・分析し、今後の改訂への示唆の提示を試みる。なお、自由記述のうしろに職位/年齢/専門領域を参考までに付記した。

以下に示すのが、本アンケートでの自由記述項目である。

『成長するティップス先生』をお読みいただいた感想はいかがでしたか？

『成長するティップス先生』をお読みいただいて、どのような方向で改訂すべきだと感じられますか？

『成長するティップス先生』についてご意見等ありましたら、ご自由に記入してください。

上記3点からなる自由記述項目を、以下の要素に分類し、分析することとした。分類は次のように行った。まず、1.『成長するティップス先生』を読んでどう思ったか、では、積極的評価ならびに消極的見解の二つに分けた。さらに積極的評価では、本書を「『参考になる』と評価」したもの、ならびに「FD活動や新任教員に対するテキストとして評価できる」としたものに分けた。次に、『成長するティップス先生』をどのように改訂すればよいか」では、大学教育全般を取り巻く意見、専門領域ならびに読者層に関する意見、教授法に関する意見、ならびに本書の構成に関する意見に分類した。教授法に関する意見は、ノウハウに関するものおよび理論に関するものに分けて分析している。節のしめくりとして、「自由記述からみえるもの - 今後の改訂に向けての示唆 - 」を述べている。

1. 『成長するティップス先生』読んで、どう思ったか

『成長するティップス先生』を読んでの感想を、積極的評価および消極的見解に分類し、代表的なものを以下に掲載する。

1.1 積極的評価

本書に対する積極的評価と判断した感想を「参考になる」と評価、ならびに「FD活動や新任教員に対するテキストとして評価できる」に分類した。

1.1.1 「参考になる」と評価

本書を「参考になる」と評価した感想のいくつかを紹介する。これらの感想のなかで特徴的なのが、「自分のやり方は間違っていなかったと振り返ることができた」とか、「当たり前なことだけど自己の授業を振り返る上で役立った」といった、自己の日頃の授業のあ

り方を確認するためのチェックリストとして本書が読まれていることである。チェックリストとしての本書の回答者の層としては、職位に偏りはないが、文科系の教員の意見が多かった。

- ・ 我流で試みていた実践と重なる部分があり、自分の考え方が孤立したものではないことに勇気付けられた。(助教授 / 40 歳代 / 教育学)
- ・ 教員からみて、内容は当たり前なことであるが、自己の授業を振り返る上でよい参考書だと思う。
(教授 / 50 歳代 / 経済学)
- ・ 内容について、自分自身反省すべきと思いついた箇所があり、今後の授業方法や展開について再検討するうえで参考になりました。(助手 / 30 歳代 / 情報学)
- ・ 双方向授業、学生からの発言を促す面で悩んでいたが、リアクション・ペーパーの使い方を授業で活用した。授業の復習、導入になり、教室が活気づいた。(教授 / 60 歳代 / 英文学)
- ・ 内容に刺激を受けた。自分の授業に実際にどう取り組むか考えている。またすでに自分でも実践している内容もあり、本書はそれを体系化して展開している点がよいと思う。(教授 / 60 歳代 / 日本文学)
- ・ 大変わかりやすく自らの授業の問題点を大いに考えさせられた。(教授 / 50 歳代 / 栄養学)
- ・ 授業で実践していることがよいことだと確認でき、さらに工夫が必要であるという提示を受けた。(助教授 / 40 歳代 / 理学療法)
- ・ 大学教員が教育者として成長するという、タイトルにひかれた。自分が見逃していたことや同感だと思う点があり、楽しんで読むことができた。(教授 / 40 歳代 / 社会福祉)
- ・ 内容は当たり前のことが書かれてあるが、自分の授業を振り返って反省することが多かった。(教授 / 50 歳代 / 一般教養)

1.1.2 「FD活動や新任教員に対するテキストとして評価できる」

本書をFD活動や新任教員に対するテキストとして評価している意見も多く見られた。このことはFD活動を支援するテキストが少ないこと、ならびに本書がFD活動にとって重要な書籍であることを示しているといえよう。加えて、大学教員が、小・中・高等学校の教諭と異なって教育実践に対する訓練を受けていないことから、本書に対するニーズの高まりも窺える。40歳代以上の「教授」からの意見が多かった。FD活動を実際に実施(推進)している体験からの見解といえる。

- ・ 内容が特定の思想や視点からのものでなく、ヒューマニティのあふれる視点からなっているので、新任教員への良品な贈り物にもなる。(教授 / 40 歳代 / 教育方法学)
- ・ 小・中・高の教員とは異なり、大学教員は教職に関する訓練を受けていないので、新任教員やFD活動に役立つと思う。(教授 / 50 歳代 / 会計・税務学)
- ・ 特に教育歴の浅い教員には必読だと思う。(教授 / 60 歳代 / 日本語学)
- ・ 授業改善のノウハウをやさしく記述されていて驚いた。大学の教員も中・高等学校の教員に近い授業デザインを身につける必要を痛感している。(教授 / 60 歳代 / 教育学)
- ・ 授業に関する研修会において本書を紹介した。FD委員会メンバーにも本書の内容を参考にすることを提唱した。(教授 / 60 歳代 / 心理学)
- ・ とにかくよい！ほかの教員に勧めます。学部長や学長にも話したい。(助手 / 40 歳代 / 地域医療)

1.2 消極的見解

本書に対する消極的な見解を以下に紹介する。この項目で特徴的だったのが、中堅以上の教員に対する受容の困難さ(たとえば、「受け付けない」とか)についてである。この類の書籍をどのようにして中堅以上の教員へ浸透させていくかが今後の課題といえよう。講師および助教授から見解を得た。

- ・ 年配の教員ほど自分の「授業アイデンティティ」を保守しているので、活用しにくいと思う。(講師 / 教育学 / 30 歳代)
- ・ 経験年数のある教員には後悔や課題ばかりとなり、毒気を感じるかもしれない。しかし、初心に帰る気持ちを持てば活用できると思う。(教授 / 40 歳代 / 教育方法学)
- ・ 本書を勧めたい中堅職員もいるが、受け付けないと思う。(助教授 / 50 歳代 / 複雑系科学)
- ・ 同僚や年配の先生に参考にしてほしいと思うが、無理だと感じている。(助教授 / 40 歳代 / 教育学)
- ・ ベテランの先生にはこういった本を手取ることは難しいのかもしれない。(講師 / 30 歳代 / 心理学)
- ・ 教員各自が判断すればよいと思うので、紹介するのみにとどめておきたい。(教授 / 40 歳代 / 英文学)
- ・ 個々が理解するということと、組織で実施するということは別問題で、アメリカ直輸入の言葉が独り歩きをし、各自の都合で解釈している感がある。真摯に教育改革に取り組む人、そうでない人といった差があるため、教員・職員に向けては『成長するティップス先生』のウェブ版にリンクを張って紹介する、FD研修会の資料として提示する程度にとどめている。(教授 / 40 歳代 / 数学)

2. 『成長するティップス先生』をどのように改訂すればよいか

ここでは、今後『成長するティップス先生』をどのような方向で改訂すべきかの意見を掲載する。寄せられた意見を、大学教育全般に関わる意見、専門領域ならびに読者層に関する意見、教授法に関する意見、および本書の構成に分類して紹介する。

2.1 大学教育全般に関わる意見

改訂に際して、「これから高等教育を受けようとする学生の質の変容を考慮して改訂して欲しい」といった意見が寄せられている。加えて、学部教育だけではなく、大学院教育におけるティーチングティップスを要望する意見もあった。

- ・ 大学教育界に新たな刺激になりうる、という意味で大学院教育の改善にも一石を投じる方向で改訂していただきたい。(教授 / 40 歳代 / 情報科学)
- ・ 高等教育における質の多様性といった観点からも論じて欲しい。(講師 / 30 歳代 / 教育学)
- ・ 初・中等教育の教授法との関連を(高等教育の固有性も考慮しながら)考えていくことが課題だと思う。(教授 / 40 歳代 / 教育方法学)
- ・ 学生は過去・現在・将来を含めた 10 年間に価値観や中高教育の内容・レベルが相当変わると予想される。教員も変わる中で講義を成立させる工夫は日々変わると思われ、それらの対応や心積もりも教示することになるであろう。(教授 / 60 歳代 / 材料工学)

2.2 専門領域ならびに読者層に関する意見

2.2.1 専門領域に関するもの

文系・理系と区別したものへのニーズ、さらには医療系版を作成して欲しいとのニーズがあった。また、教養科目、専門科目などの科目別の実例を取り上げて欲しいとの意見もあった。加えて、本書が文系科目を中心として描かれていることもあり、「自然科学系科目の事例やノウハウの充実を望む」といった見解もみられし、このような意見の多くが、理科系の教員からでている。

- ・ 欲を言えば、文系版・理系版など分野別のものがあればなお便利だと思う。(学務課長 / 40 歳代)
- ・ これまでにFDに関する書籍をいくつか読んだが、例示されているシラバスは文系のものが多い。理工系の例が1件あったが、カタログ的で従来の域を出ていないものだった。ティップス先生が推奨する理工系授業科目(電磁気学や電気回路など)シラバスとはどのような形式であるかを知りたい。(教授 / 60 歳代 / 電気工学)
- ・ さまざまな学問分野の充実を望む。英語、日本語表現法など。(教授 / 60 歳代 / 日本語学)

- ・ 教養、専門基幹、専門展開などの科目の種類別の実例も扱って欲しい。(教授 / 50 歳代 / 国際関係論)
- ・ 自然科学系科目の事例やノウハウの充実を望む。レポートの指導についても同じである。(助教授 / 40 歳代 / 物理学)
- ・ 学部により学生の人数・講義形式・カリキュラムも相当異なるため、学部別の事例を加えて欲しい。(教授 / 50 歳代 / 薬理学)
- ・ 医学・歯学はすべてが必須という場合が多く、コースデザインの決定も自由度が低い。特殊なコースデザインをどうすればいいか常に自問自答である。実習のポートフォリオをどうすればよいか、よい例を知りたい。(教授 / 50 歳代 / 組織学)
- ・ 『倫理学』の授業が例に挙げられていたが、理工系の授業と比較するとシラバスの作り方、授業の進め方、演習指導など異なる点があると思う。(教授 / 60 歳代 / 電気工学)
- ・ 分野別の具体事例の提示が直接的に役立つと思う。特に、数学、物理、英語学の基礎的科目および実験、実習科目の事例が挿入されたらよいかと思う。(教授 / 50 歳代 / 建築計画)

2.2.2 読者層に関するもの

改訂に関しては、「ベテラン教員向けの上級者編」と「ベテラン教員向けの初級編」の双方の刊行が望まれていた。また、「主体を学生、新人、ベテラン教師、などのどれかにおいて上級編や各論編に改訂するといいと思う」という、さまざまな対象からなる改訂版の刊行という意見も提示された。

- ・ 上級者(必ずしもベテラン教員が授業の上級者とは限らないが)向けの内容もみたい。(助教授 / 40 歳代 / 社会科教育)
- ・ 旧態依然として授業を愛好し、授業法改善に消極的な「ベテラン教員向けの初級編」が必要だと思う。(教務部長 / 40 歳代 / インド哲学)
- ・ 『成長するティップス先生』を主人公にした、物語的・説明的な工夫は若い世代には受け容れやすいと思う若手教員向けの上級編があるといいと思う。また、自分の研究と教育経験を自負している世代の自尊心を活かし、反発を買わないような工夫が必要。ベテラン向けの『入門編』が欲しい。(教授 / 40 歳代 / 数学)
- ・ 本書の完成度は高いと思うので、改訂よりは上級編(たとえば『成長したティップス先生』など)や分野別などのシリーズ化を考えた方がいいと思う。(助教授 / 40 歳代 / 教育心理学)
- ・ ベテラン教員向けの上級編を開発するのがいいと思う。(講師 / 30 歳代 / 専門領域不詳)
- ・ ベテランではあるが、自分の授業スタイルを頑固として変えない教員が目を通してく

れるような方向での改訂を望む。(教授 / 50 歳代 / 一般教養)

- ・ 本書が入門書であれば、主体を学生、新人、ベテラン教師、などのどれかにおいて上級編や各論編に改訂するといいたいと思う。(教授 / 60 歳代 / 看護学)

2.3 教授法に関する意見

2.3.1 ノウハウに関するもの

eラーニングや大人数講義に対するノウハウを実例で示して欲しいとの意見が多く見られた。さまざまな授業形態に対応できるよう、より多くの具体的事例を集積することが改訂に向けての課題となろう。なかには、「TA等のリソースがどうしても十分でない大学もあるが、限られたリソースを用い、また教員への過度な負担なしで、学生参加型の大人数講義がいかに可能であるかを検討していただきたい」といった、教員がひとりでも対応できる大人数講義の方法を求める意見もあった。

加えて、本書の「障害学生に対する支援」の部分では、実際に障がいをもった学生に対する項目の改訂を、実際に障がい者教育に携わっている教員から提案された。

- ・ 理論的なものより、すぐに使える実践ノウハウを充実させて欲しい(たとえば、「学生の授業中のマナーの悪さに対して具体的な注意の仕方を含めて対処法」(教授 / 40 歳代 / 経済学))
- ・ 本書はノウハウ中心の記述であるが、抽象的な説明が多くて具体例が少ない。
- ・ 大学の専門分野・授業は多様であり、事例紹介を充実させることには限界がある。むしろ学生と教員の授業における応答関係を充実させるという視点から eラーニングのノウハウの充実を求める。(助教授 / 40 歳代 / 哲学・倫理学)
- ・ eラーニングを導入したので、実際に eラーニングを用いた授業でうまくいかなかった事例を増やして欲しい。(講師 / 30 歳代 / 日本語学)
- ・ eラーニングに関しては、「学生の学習という視点を充実させる」ことを強調するような工夫が望まれると思う。(教授 / 40 歳代 / 数学)
- ・ 「授業デザインのための秘訣集」という趣旨から考えると、事例を増やすことが改訂の方向性として有意義だと思う。大学の授業は、教員と学生とのコミュニケーションが一方通行になりがちで、その現状を改善するための方法論について内容をより充実させて欲しい。(助教授 / 30 歳代 / 教育学)
- ・ 多くの大学において避けられないのが大人数講義をいかに学生にとって有意義な授業内容にするか、という点である。TA等のリソースがどうしても十分でない大学もあるが、限られたリソースを用い、また教員への過度な負担なしで、学生参加型の大人数講義がいかに可能であるかを検討していただきたい。(助教授 / 30 歳代 / 臨床心理学)
- ・ 大人数講義における、効果的なプレゼンテーションの方法が重要である。(教授 / 60

歳代 / 気象学)

- ・ 大人数講義における問題は多く、環境整備が特に必要である。学科による学生態度の違い、授業に対する学生の関心の度合い等々、多様な学生の満足度を高めるノウハウも一層必要である。(教授 / 60 歳代 / 英文学)
- ・ 私学では大人数講義で苦労している教員が大勢いる。これまでの実践例で紹介されているものの多くは、100 名前後の授業であり参考とならないため、大人数講義の充実を期待する。(教授 / 50 歳代 / 教育学)
- ・ 他人の授業実践はノウハウというより、ヒントになると思う。しかし、それはヒントにすぎず、すべての人が使用できるわけではない。重要なことはシラバスと授業管理の方法、講義、ゼミ、実習など、授業タイプ別の特徴を踏まえた事例だと思う。また、補習(リメディアル)の方法についても充実して欲しい。(教授 / 40 歳代 / 社会福祉政策)
- ・ 教授法の充実。たとえば、事例研究の作成と使い方、授業評価の行い方・活かし方、ディベート(知的対決の理論)教育の行い方、ならびに 学生によるフィールドサーベイ(学外調査)の進め方なのである。(教授 / 50 歳代 / マーケティング)
- ・ 当大学を含めて、医科大学・医学部では、カリキュラム改編により臓器別統合型に変わりつつある。授業形態も少人数によるチュートリアル+講義+実習である。講義は一コマごとに教員が異なる場合がある。学期制の意味を失いつつある。こういったカリキュラムではコース責任者の役割が非常に大きいと思うが、ガイドなどは各大学で模索中だと思われる。医学部におけるような新たなカリキュラムに対応したティップス先生が作成されるとありがたい。(教授 / 50 歳代 / 医学教育学)
- ・ 本書の「障害学生に対する支援」は不十分だと思う。障害学生は、障害の種類やレベルにより大きく異なるので、教師がどう対応すべきかわからないと思う。熱心な教師のみが対応できる記述がなされており、残念に思う。もっと具体的な事例で示すべきだと思う。(助教授 / 40 歳代 / 障害者支援)
- ・ 障害のある学生の項目では、今後増加すると思われる、LD(学習障害)やアスペルガー障害の人への配慮についても加えて欲しい。(教授 / 40 歳代 / 言語障害)
- ・ シラバスや授業展開の実例をつけていただけるとよいと思う。(教授 / 60 歳代 / 経営情報学)

2.3.2 理論に関するもの

本書の改訂に際して、理論に関する内容の充実も期待されている。また、なかには、教授法の理論的背景を充実させることへの危惧を示した意見もあった。

- ・ 大学教員は教育方法論などを系統的に学んではいないので、それぞれの授業目標はどの観点で整理されるのか、成績評価とはどのような目的で、何をどう強化するべ

きかなどである。(教授 / 50 歳代 / 数学)

- ・ 多くの教員にとって欠けているのは、基本・理論なので、すぐに役立つノウハウよりも、大学におけるティーチングの基本的な考え方を説明することに重点を置いたらいいと思う。具体的な事例は、それを理解するのに必要最低限の分量でいいと思う。(教授 / 50 歳代 / 経営工学)
- ・ 自分の経験から、「教授法の理論背景」は充実させると逆効果になると思う。(教授 / 40 歳代 / 数学)

2.4 本書の構成に関する意見

本書の構成については、見やすい・読みやすいものを求める意見があった。たとえば、多色刷りやティップスの検索のしやすさ、また「授業日誌編」から「授業の基本編」へのリンクのしやすさを求めるものである。

- ・ 本文の記述中に矢印や吹き出しなどを加えて、具体的な注意点やコメントを書き込むと良いと思う。たとえば、うるさい授業では名簿順に席決めをする。必ずメディアを使い学生を引き込む、授業のはじめは起立して挨拶する。途中で体操を取り入れるなど。(教授 / 60 歳代 / 経営情報学)
- ・ 現版でも十分に読みやすいものになっている。あえて言うならば、日記 基本編へのページの移動が少々面倒なので、日記のところに対応する基本編のページを記載した上で、数行以内でそのエッセンスが記載されていると通読しやすいかもしれない。(助手 / 30 歳代 / 情報セキュリティ)
- ・ もう少し紙面にゆとりがあれば読みやすいと思う。(学習支援課職員 / 50 歳代)
- ・ やや分量が多いように感じる。改訂する場合、当然さらに分量が増えることになると思うので、その点が悩ましい。(教育企画課主査 / 30 歳代)
- ・ 順に読み進めていくことは余り無いと思うので、いかに検索しやすくするか、目次を魅力的にするかが大切だと思う。(助教授 / 教育心理学 / 40 歳代)
- ・ 多色刷りでもっと見易い紙面づくりも可能だと思う。(講師 / 40 歳代 / 教育学)
- ・ 授業の様子を MPEG ビデオとして収録した CD-ROM を付録してはどうか。たとえば、「よい」といわれる授業の様子や「悪い」授業の様子といった形で。(助手 / 40 歳代 / 地域医療)
- ・ 現状でも十分読みやすい。フランクな書き方は、若手教員や学生、大学院生には抵抗なく受け容れられるが、シニアの方は敬遠しそうな気がする。重厚さをなくした分、見た目で見えないタイプの人もいると思う。(助教授 / 40 歳代 / 教育学)
- ・ 「授業日誌編」と「授業基本編」に分けて構成されている点は、大変読みやすく感じた。日誌編の問題に対して、強い共感を持ち、その対応についてじっくりと基本編で考えることができた。(講師 / 40 歳代 / 経済原論)

- ・ 「授業日誌編」は教員の成長物語の感があり、感動した。「授業の基本編」は説教のような口調が気になるが、述べられている事柄については傾聴に値すると思う。(教授 / 50 歳代 / 心理学)
- ・ 最大公約数的なものとして、現在の形式がベストだと思う。(助教授 / 40 歳代 / 英語学)
- ・ 本書は授業改善への第一歩を促す意味において完成されているのではないかと思う。(助教授 / 30 歳代 / 大学教授法)

3 . 自由記述からみえるもの - 今後の改訂に向けての示唆 -

さまざまな意見のなかでも、以下の二点が、今後の改訂に向けての示唆として特筆できよう。

第一に、ベテランの教員への対応方法を検討する必要がある。アンケート結果からは、「フランクな書き方は若手教員には受けがよさそうだが、シニアの方は敬遠しそうな気がする。重厚さをなくした分、見た目を読まないタイプの人もある」とか、「自分の授業に対するアイデンティティを強くもったベテラン教員にどうやって読んでもらうか」との回答があった。そこで、いくつかの回答にあったのが、「ベテラン教員向けの初級編」の刊行である。筆者のほうでも「ベテラン教員向けの上級者編」の刊行は望まれていると思っていたが、「ベテラン教員向けの初級編」は意外な発想であった。ここでポイントとなるのが、もし、その方向で改訂をしていくのであれば、ベテラン教員にも受け容れてもらえるような編集を心がけるといことになる。

第二に、教授理論に裏打ちされた具体的事例を集積する必要がある。現版の『成長するティップス先生』は、「論理学」の授業のはじまりから終わりまでの一連の流れにそって、記述されているが、文系科目・理系科目編や、教養科目・専門科目編といった専門領域および科目領域別の具体例を集積することも重要であろう。ここでいう具体例に対するニーズもさまざまである。たとえば、シラバスであったり、授業評価の方法であったり、ポートフォリオの作り方であったりする。また別の側面では、e ラーニングや大人数講義に対するノウハウであったりもする。つまり、大学の授業におけるあらゆる局面に対応できる具体的事例を集積していくことが今後の課題となろう。

なお、回収したアンケートの自由記述は、本報告書資料5にも掲載しているので、参考にされたい。

4 実践的教授法の抽出を目指した授業分析

夏目 達也

1. 授業見学の経緯

本プロジェクトでは、ティーチングティップス改訂の準備作業のひとつとして、授業見学を行うこととした。

いうまでもなく、ティーチングティップスは教員がみずからの授業実践を改善する際のサポートとすべく制作されたものである。そのため、有効なティップスを作るためには、なによりもまず授業の現場を知ることが必要である。センタースタッフは日々授業実践を行っており、とりあえずその内容を振り返ればよいのだが、センタースタッフが担当している授業数はきわめて限られており、それだけでは多くのティップスを抽出するのは難しい。また、ティップスは多くの教員に使用してもらえるものでなければ意味がないが、そのためにはティップスの内容を普遍的なものにすることが必要である。より多くの教員の授業を見学し、そこで展開される教員の実践や学生の様子などしっかり把握しておくことはティップス改訂に不可欠な作業と考えたのである。見学の対象は名古屋大学で行われる授業としたが、これは名古屋大学の教育改善に貢献するというセンターの使命にも合致するものである。

見学の対象を名古屋大学の授業とすることを決定した後に問題になったのは、どの教員のどの授業にするかであった。ティップスを抽出するためにわれわれが検討した条件は以下のようなものである。特定の専門領域に偏らないこと、そのために学部や大学院の専門教育ではなく、全学教育の授業とすること、演習や実験ではなく講義であること、受講者が一定数以上の授業であること、換言すれば中人数ないし大人数クラスであること、内容の充実した授業であること、学生からも高い評価を得ていること。

このような選択基準をたてたものの、どの教員にお願いするかは多少の躊躇があった。自分の授業を他人に見学させることには多少ともためらいを感じるものである。まして、面識のない者に対してはなおさらであろう。センターの活動に対するある程度の理解のある方でないと、授業観察の趣旨を理解していただくことは不可欠ではないか等が議論された。慎重に検討した結果、各セメスターごとに実施している学生による授業評価アンケートで高い評価を得ている授業とすることを決定した。われわれが選択した授業は、美術史特殊講義（木俣元一・文学研究科教授）、中国語3（丸尾誠・国際言語文化研究科助教授）、「微分積分学」（南和彦・多元数理科学研究科助教授）の3授業であった。

さっそく対象となる授業を担当している教員にお願いすることとし、目的・趣旨や、対象としてお願いするに至った経緯等を説明しつつ、見学をお願いした。選出した授業担当の教員は、センタースタッフとは面識のない方ばかりであった。授業観察の対象を絞り込

んだのが後期の授業開始も迫った時期であったため申し出が授業開始直前になった。そのため、反応は心配であった。しかし、結果的には杞憂であり、幸いいずれの方からも快諾いただくことができた。これは教員のお人柄にもよるが、授業評価アンケートの高い結果が示しているように、充実した授業を行っていることが背景にあると思われる。

3 授業には、それぞれ2名のスタッフで見学することにした。これは複数の視点で授業をとらえることが不可欠と判断したためである。授業終了後、2名で観察結果をつきあわせて、感想を出し合ったり、抽出できるティップスについて協議することにした。また、他のグループのメンバーとの情報交換も行うこととした。

授業見学に先だって、授業をどのような視点で観察するかについて、いくつかの先行研究をもとにスタッフで検討した。もっとも参考になったのは、ラリー・キーン、マイケル・D・ワガナー著（高橋靖直訳）『大学教員「教育評価」ハンドブック』（玉川大学出版部、2003年）であった。本書には、授業観察の視点が手際よくまとめられており、とくに図表「授業観察ガイド」は参考になった。これらの検討結果をふまえて中島助手がとりまとめた提案に基づいて、われわれなりの授業観察の視点を、抽出すべきティップスという形で以下のように設定した。

表1 授業観察の視点

1. 導入時に学生のモチベーションを高めるティップス
目標の提示、アウトラインの提示の工夫
問題の提起・例示、学生の興味・関心の呼び起こし
アイスブレイキングの工夫
2. クラスデザインのティップス
90分をどのように分けて構成するか
3. プレゼンテーションのティップス
具体と抽象（理論と事例）の示し方・使い方
板書の工夫、視聴覚機器の工夫
話の仕方の工夫、学生の顔があがる工夫
4. 教材のティップス
学生が主体的に学べるような教材の工夫
難しい内容をわかりやすく説明する工夫
コンテンツをわかりやすく配置する工夫
5. 学生を参加させるティップス
質問の仕方、学生の発言を促す工夫
学生の発言への応え方、フィードバックの工夫
大人数の学生が主体的に学ぶ工夫
学生を褒める工夫
学生同士が関わりあう機会を作る工夫
6. 終了時に次回へモチベーションをつなげるティップス
授業のまとめ方の工夫
課題の出し方の工夫
7. 学習環境を整えるティップス
授業のルールづくり（私語・飲食）の工夫
机の配置、教員の立ち位置の工夫
8. TAを活用するティップス
教員とTAの役割分担の工夫
学生がTAに関わる機会を作る工夫

2. 授業の概要

観察した3授業はいずれもすぐれたものであり、ティップスを抽出するのに役だった。以下、授業の内容を紹介するが、紙幅の関係で丸尾助教授の授業「中国語3」のみをとりあげる。

2.1 スピード感ある授業の展開

一言でいうと緊張感に溢れた授業である。学生の緊張感を途切れさせないための工夫が随所にみられる。その工夫の一つは授業をテンポよく展開していることである。この授業では、90分の授業をいくつかのパートに区切って展開している。一つの課題を15分くらいで切り上げ、次の課題に移る。学生の緊張感がそれほど長続きしないと教員は判断しているためかもしれない。

課題によって内容や進方は当然異なるが、しばしば行われるのは学生に練習問題をさせることである。受講者でいっせいに、あるいは一人ずつ発音をさせる。受講者約30人のクラスでこれを15分程度で終えるためには、かなりのスピードを要する。教員は次から次へと手際よく進めていく。学生を指名し、回答させるスピードはかなり速い。スピードがある上に、いつ自分が指名されるか分からない。そのため、学生は常に緊張させられるが、スピード感が心地よさをもたらしているのかさほど苦しんでいる様子はない。そのほか、スピードを落とさないために、板書のスピードにも配慮している。教員の板書は速い。宿題・課題を学生に黒板に書かせる場合には、板書する学生以外の受講者はいぼんやりしがちである。この時間に、教員は中国語学習や中国に関する事情についての解説を行うなどして、授業のスピードが落ちたり、緊張感が低下するのを防いでいる。また、時には板書ではなく口頭発表に切り替えるなどしている。

しかし、緊張の連続で90分はややつらい。そのため、課題と課題の間には、ちょっとしたエピソードを入れてリラックス、気分転換を図っている。そのエピソードは、一見すると授業の内容に直接関係ないように思われるが、実は深く関係している。学習内容に対する興味・関心を高める効果のあるものを慎重に選んでいるという印象である。たとえば、語学学習の動機についてである。語学学習には直接的・実利的動機が不可欠であることを強調する。当たり前と思われる内容であっても、中国人や日本人の学生の例をユーモアを交えて紹介することで、学生に納得させる。あるいはF1サーキットやサッカーなどの話をしながら、中国の経済発展や中国内の民族の多様性等、中国に関する基礎的知識を理解させている。エピソードを入れても授業が脱線したという感じを与えないために、授業に対する学生の注意を途切れさせない。次の課題への切り替えがスムーズできる。まるで音楽を聴いているときのようにリズム感がある。

2.2 学生の個別の水準の把握

中国語でいくつか問題を出して、それに対する学生の理解度をチェックする。中国語の

文章を教員自らが発声して、その理解度をみる。最初はナチュラルスピードで読み、「今の中国語の内容が完璧にわかった人はいますか?」。手をあげる学生があまりいないのを確認すると、今後は次はややゆっくりしたスピードで読み上げ、再度反応を見るという具合である。さらに、学生一人一人について弱点のチェックリストを作成している。小問題を解かせて、つまづいた点をリストに記入する。それを最終回の授業で学生に渡し、自らの課題を理解させることをめざしている。

2.3 素早く適切なフィードバック

授業のスピード感と関係することでもあるが、学生一人一人に発音をさせ、それを教員がチェックする。次々に学生に発音をさせるために、教員が教卓でじっとしてではなく、学生の間を移動しながら、次々にあてていく。学生の発声に対して、短くコメントをする。「基本的にできている」「できている」「よくできている」「うん、うまい」「うまいからもっと上のレベルを求めろ」「あっているけど、ちょっと違う」「期待しているよ」等々である。まずい場合には、具体的にどこがどうまずいかを示して、やり直しをさせている。「空気が出ていない」「力が入っていない」「口をすぼめて」などの評価である。その場で迅速なフィードバックは、学生が自分の発声・発音を直すのに有効である。しかも、教員のコメントのことばからわかるように、単なる正誤を示すだけでなく、必ず褒めている。このような形でのフィードバックは学生には励みになっていると思われる。

2.4 高い水準への到達を促す

授業中の課題だけではなく、授業時間の最後に小テストを実施する。それができた学生から順次退席させる、できない学生は、居残りをしてできるまで残ってもらうと宣言をする。居残りがイヤなら自宅学習をすることと告げる。これは学生に修得させる目標や到達水準が教員の側で明確になっていることを示す。同時に、その水準に学生を到達させるために、学生に一定の緊張感をもたせるための工夫の一つであろう。

2.5 学生に対するきめ細かな配慮

学生に対するきめ細かな配慮が随所にみられることも、この授業の特徴であろう。小テストによる居残りについても、宣言された学生は少なからずプレッシャーを受けるであろうことを見越したかのように、次のように付け加えることを忘れない。「過去の経験では、居残りをした学生はしなかった学生よりもかえってできるようになった。居残りになっても心配はいらない。」必要以上のプレッシャーを与えないための配慮である。

学生がつまづいた場合の個別ケアについて宣言している。「困ったらなんでも教えてあげる」という教員のことばは、学生の不安を取り除くものである。さらに、板書の際に、教員は教室の後ろに行って、自分の書いた文字の大きさ・見やすさを自ら確認している。授業の冒頭に、席の取り方などについても、強制はしないで、前に来るメリットを説きな

がらやんわりと指示している。

2.6 TAの活用

授業が半分ほど進み、学生が中国語の学習がある程度進んできたと思われる頃に、ネイティブスピーカーのTAによる指導の時間が設定された。まず、簡単な自己紹介を行う。途中でストップして、説明の内容の理解度を点検している。さすがに授業も回数を重ねており、学生も理解度が高まっている。次にTAによる出席確認。中国語で名前を呼ぶので、中国語で返事することを求める。教員は、シャドーイングという学習方法について解説。これは他の人がしゃべることばをそのまま繰り返すものである。通訳になるための訓練方法の一つで、有効な方法であることを説明する。TAがテキスト文を読むのを教員が繰り返して、シャドーイングのモデルを示す。TAの活用方法・求める仕事を明確に設定することにより、授業の効果を高める一例である。

3. 授業見学からの示唆

われわれの授業観察は、始まったばかりで、その内容もささやかなものである。ティップスを抽出するにはきわめて不十分であることを理解している。それでも、今回の授業観察から学んだことは実に多かった。それらはティップスとして、『成長するティップス先生』に付け加えることができるものである。以下では、今回の観察によってわれわれが抽出できた示唆を、いくつか限定して示す。

授業を展開するリズムが重要である。メリハリをつけるということでもある。丸尾助教授の授業にみられるように、テンポよく展開することにより、授業全体に緊張感をもたせることができる。とくに一つの課題を比較的短い時間で完結させ、それをいくつか設定するという方法は、学生の集中力を維持させることができ、結果的に学習効果を高めることにつながるという意味で重要であろう。もちろん、科目によって差異はあるが、少なくとも語学の場合にはこのような方法は有効であるように思われる。

学生の学力水準や準備状況等を教員が事前に把握しておくことの重要性である。学生の学力、勉強意欲、興味・関心などは多様である。近年の高校教育の多様化を促進する政策や、学習指導要領改訂による教育課程の多様化等により、その傾向は年々顕著になっている。授業の内容に関する事前の知識や興味・関心も当然、学生によって多様である。とくに理科関係科目の場合、科目によっては高校での未履修者は少なくない。語学の場合も同様である。初年度の学生の場合だけでなく、2年次以降の学生の場合にも基本的にあてはまる。学生はこの程度ことは知っているだろう、という期待や先入観を教員はもちがちであるが、彼らがそれを知っている保証はない。これらの点を無視したのでは、学生の要求を満足させ得る授業を行うことは難しく、学生の勉強意欲を高めたり、学習効果を向上させることはできない。こうした事態を防ぐために、初回授業のオリエンテーションや授業の多様な場面等でチェックをすること、それをふまえて指導内容・方法を検討するこ

とが必要であろう。美術史の木俣教授の場合には、前期の続きで後期の授業が行われるが、後期から受講する学生もかなりの数にのぼる。そのため、前期からの受講者の復習をかねて、初回講義ではかなりの時間を割いて、前期の講義内容を説明している。これも学生間のギャップを埋める一つの工夫である。

の内容ともかかわって、授業の内容や水準を決定する際に、学生の理解度を十分にふまえることの重要性と必要性である。専門教育であれば別であるが、教養教育の場合、多くの学生は授業の内容についての予備知識がなく、関連の知識さえも必ずしも十分ではない。そのため、授業の内容を初めて聞くという学生は少なくない。初めて聞く内容を正確に理解することは、学生にかぎらず誰にとっても難しいことである。しかし、当然のことのように思えるこのことに、意外に気がつかない。ともすれば、教員は各回の授業で設定した目標の達成を重視するあまり、一方的な説明をしてしまいがちである。ますます学生は理解が難しくなるのが実情である。このような事態を防ぐために、学生の理解度をふまえること、説明を行う際にも学生が抱くであろう素朴な疑問を想定すること、ときには内容を工夫した質問により学生の反応を確かめることが重要である。

フィードバックを迅速にかつ適切に行うことである。丸尾助教授の授業ではこの点できわめて示唆的である。学生に発声をさせたり、練習問題をさせたりして、そのたびごとに教員の評価を行う。しかも簡潔なことばで学生を励まし学習意欲を高めている。そこには一種の対話が成立している。もちろん、科目の特性や学生数が限定されていることによるところが大きいですが、その他の授業でも工夫の余地はあろう。

4. 今後の課題

授業見学から多くのことを学ぶことができたが、同時に課題も明らかになった。そもそも、今回の見学には最初から多くの制約があった。われわれの授業観察はセンターとしては初めての試みであり、わからないことも多く、手探りの状態で始めざるを得なかった。事前にどのような準備が必要であり、どのような手順で進めれば効果的な観察ができるのか、観察結果からより多くの、意味のあるティップスを抽出するための方法・ノウハウとはどのようなものなのか等々を模索しながら進めてきたというのが実情である。それでも、観察を快諾してくださった教員の方々のおかげで、多くのことを学ぶことができた。以下、今後の課題を整理する。

第1に、授業観察に必要な能力・ノウハウを明確にすることである。授業観察と一口に言っても、その内容は複雑である。授業は授業者と受講者という生身の人間同士の知的な対話・交流の営みであり、両者の間で繰り広げられる一種のドラマである。そこは、本来的には緊張感あふれる知的な営みの場所であり、多くの情報が盛り込まれている。そこから、より多くの情報より質の高い情報を、よりの確に適切に引き出すためには、当然のことながらしかるべき観察の能力なりノウハウが必要である。これがいかなる内容であるかを明確にすることであり、そのための検討が欠かせない。そのためにも観察を重ねていく

必要がある。

その一つは観察結果の記録方法に関するものである。今回、われわれは「資料」に示したように記録した。これはとりあえず試行的に作成したものである。今後とも継続的に観察を行うために、またそこから多くの情報を取り出し観察者の間で共有するためには、記録のフォーマットを改良することが必要である。すでに『成長するティップス先生』では、授業者みずからレコーダを用いて授業を録音することを提起してきた。これは簡単にできる方法であり、多くの情報量を記録できる。これらにとどまらず、ビデオなどの機器を活用することも当然検討すべきである。もちろん、そのためには、授業担当の教員の協力と理解が不可欠であることは言うまでもないが、ビデオの台数、配置場所、映像として残すべき対象・内容等々検討すべきことは多い。多くの先行研究や実践の成果に学ぶ必要を痛感している。

第2に、観察者の数を増やすことである。観察者はそれぞれの専門をもち関連分野については知識もあり、授業で教授される内容の程度や場合によっては適否なども判断できる。しかし、専門外の分野ではそれらを期待することはむづかしい。もちろん、専門外の人間だからこそ発見できることも少なくないとはいえ、抽出できる情報量にはおのずと限界がある。したがって、多様な専門分野の教員が観察に参加することが必要であろう。複数の専門の立場から観察を行い、その結果をもちより検討することにより、多くの情報やティップスを引き出すことができる。

第3に、授業の数を増やすことが必要である。今回の授業観察はスタッフの人数の制約もあり、わずか3つに限定したこと、それぞれの観察回数も数回程度であったことは、ティップスを抽出する上で十分であったとはとても言えない。学内の教員の協力を積極的に求めるなどして、観察のケースを増やすことが不可欠である。今回の観察で対象としたのは、学生の評価の高かった授業であり、内容や方法の優れた授業であった。もちろん、優れた授業であればティップスを抽出することは容易である。しかし、観察者が観察のための技能を高めれば、必ずしも優れた授業でなくても学ぶことは多いはずである。ごく普通の授業からも学べるし、学生の評価の低い授業からさえも学ぶことはできると思われる。その意味で、観察対象を狭く限定することなく、より多くの授業を見学・観察することが必要である。

ともあれ、われわれの試みは始まったばかりである。今回の観察にご協力いただいた3人の先生には感謝申し上げるとともに、今後とも多くの教員の協力を得て試行を重ねたいと考える。

5 ハーバード大学におけるティーチングティップス ティーチング・フェローを対象にしたティップスに注目して

鳥居 朋子

1. はじめに

本稿では、米国マサチューセッツ州ケンブリッジに位置するハーバード大学(Harvard University)において開発されているティーチングティップス(以下ティップスと略記)のなかでも、とりわけ学士課程教育の運営に欠かせない存在であるティーチング・フェロー(Teaching Fellow 以下TFと略記)のためのティップスを紹介する。TFとは、いわゆる日本の大学でいうティーチング・アシスタント(Teaching Assistant 以下TAと略記)に相当する有給の授業補助職¹で、登録受講生が18名以上の学士課程のコースを担当する教員(コース・ヘッドと呼ばれる)の授業運営を支援する大学院生のことである。

近い将来の教員候補者の養成を視野に入れて開発されたハーバード大学のTFのためのティップスは、日本の大学におけるTAにむけたティップス開発はもとより、教育経験の浅い新任教員にとっても有益だと思われる。もちろん、教育経験の長い教員にとってもこれらのティップスから得られる示唆は少なくないだろう。

以下では、ハーバード大学におけるティップスの概要をふまえて、具体的なティップスの事例を紹介する。最後に、ハーバード大学におけるTFを対象としたティップスの特徴を整理し、日本への示唆をまとめたい。

2. ハーバードにおけるTFを対象にしたティーチングティップス

2.1 開発の背景

研究大学として常に世界のトップに位置するハーバード大学において、学術研究の活動の推進とともに、学士課程教育をどのように充実させていくかということは今日の学内議論の的の一つとなっている²。とりわけ、学士課程の学生を擁するハーバードカレッジ(Harvard College 以下カレッジと略記)では、学士課程カリキュラムを構成するプログラムやコース運営の際の重要な課題となっている。カレッジの教育を担当する文理学院(Faculty of Arts and Sciences 以下FASと略記)には全体で約1,400名のTFが存在するが、なかでも、低年次生が主に履修するコア・プログラム(Core Program)と称される選択必修科目や、ライティングプログラム(Writing Program)の運営を円滑にするために学生の学習を支援する約300名のTFの存在は実質的に重要な位置を占めている³。授業の補助とはいえ、TFの任務は、毎週のディスカッション・セクション(discussion section)またはラボラトリー・セクション(laboratory section)をリードし、学生が提出した課題の評価や成績評価、定期的なオフィスアワーの開設や試験後の復習セッションの指導、など多岐に

わたくしであり、そのなかみもティーチングスタッフを称するに相応しい⁴。

とくに、概論的な入門レベルの大人数講義においては、教員が授業時間内で汲みつくせない学生の質問や意見を、TFが授業時間外に週に1回の割合で設定するセクションの時間において引き取り学生の学習の深化と定着を助けることは、TF業務のなかでも主要なものの一つである。一方、コース・ヘッドである教員にとっても、より学生との距離に近いTFを通じて学生からのフィードバックがきめ細かに得られるという点で、双方向的な授業実践が可能となるというメリットがある。さらに、TFにとっては、ティーチングの仕事は自らのティーチング・スキルを向上させるという目的以外に、比較的優遇された給与(1コースを1学期間担当した場合、約4,300ドル支給。週10時間相当の労働とみなされている)などの条件面でも魅力のあるものとなっている。住居費や物価の高いケンブリッジで生活しながら高額な授業料の大学院で研究を継続するTFたちにとって、実利的な面でも価値のある仕事だといえる。

このように、授業の担当教員といわばチームを組んでコースの運営を担っているTFを対象に、FASに1976年から設置されているデレク・ボク・センター⁵(Derek Bok Center for Teaching and Learning 以下ボク・センターと略記)が開発主体となり、さまざまなティップスやセミナー、ガイダンス、ランチミーティング等のファカルティ・デベロップメント(Faculty Development 以下FDと略記)の機会が提供されてきた。

もともとは、ライティングプログラムを補助するTFをどのように支援するかというセミナーからスタートしたTFのサポートプログラムは、2005年の現在では多種多様に展開しており、その一部はボク・センターのウェブサイトで公開されている。たとえば、自らの研究やその他の学業などで忙しいTFが気軽にアクセスできるように、「TFのための有効な情報(Resources for Teaching Fellows)」(<http://bokcenter.harvard.edu/TFs.html>) が簡潔なテキスト様式で提供されている。

このように、ハーバード大学では、カレッジの教育を担当するスタッフのFDの一環にTFの力量向上を位置付け、かれらに資するティップスが開発されている。

2.2 ティップスの概要

2.2.1 冊子体のティップス

ハーバード大学がオリジナルに作成しているティップスに相当するもの(ハンドブックを含む)のなかでも、主なものは次のとおりである。

- A The Graduate School of Arts and Sciences and The Derek Bok Center for Teaching and Learning, *Teaching Fellows Handbook 2004-2005*.
- B The Core Program, *A Guide for Head Section Leaders in the Core Program 2004-2005*.
- C Mattuck, Arthur P., *The Torch or the Firehose: a Guide to Section Teaching, Harvard Edition, 2005, Draft Version*.

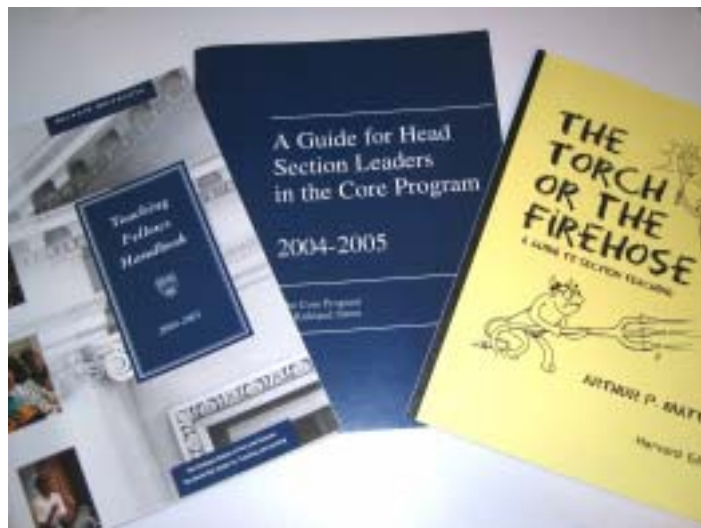


図1 T Fのためのティーチングティップス（左よりA、B、C）

Aはハーバード大学の Graduate School of Arts and Sciences とボク・センターとの共同により開発されたものであり、T F 業務の遂行に有効な一般情報やアドバイスが掲載されている。

Bは学士課程のコア・プログラムの運営を統括するコア・オフィスによって制作されたヘッド・セクション・リーダーにむけたティップスである。ヘッド・セクション・リーダーとは、各セクションに配置されたセクション・リーダーとしてのT Fをとりまとめ、セクション運営の全体を統括する者である⁶。

Cはマサチューセッツ工科大学（Massachusetts Institute of Technology 以下MITと略記）で作成されたセクション運営についてのティップスをヒントに作られたハーバード大学バージョンであり、現在は仮製本の状態である。

これらA、B、Cのティップスの内容項目を一覧にまとめたものが下表である。

表1 T Fを対象とするティーチングティップスの内容項目

A	B	C
Part 1 I. T F プログラムの一般情報 II. 任用 III. 職務の位置づけ IV. 給与その他の財政的支援 Part 2 V. スタート VI. アクティブラーニング VII. ティーチング・スキルと戦略 VIII. 評価とティーチングの改善 IX. 責務とその他の情報	*電話番号および電子メールアドレス帳 *学年暦 *学期開始前 - 教材の検討とコースの支援サービス - 教室確保と調整 - 提出期限日のチェックリスト - コアコースへのT FおよびT Aの配置 - クラス初日の最終準備	*はじめに *ガラスの壁を取り払おう:双方向的なやりとりの勧め *学生の質問、T Fの質問 *T Fの仕事の開始前に *教育関連用語 *授業にて *良いスタートを切るには *基本的なコミュニケーションスキル

Part 3 X. 情報ガイド XI.よくある質問集 XII. 付録 *セクションの準備 *コースセクションの評価アンケート *自然科学セクションの評価アンケート *一般教育委員会の評価アンケート *セクションにおける口頭発表のガイドラインサンプル *ライティングの自己評価フォーム *同僚意見シート *学生評価シートのサンプル *推薦状 *セクシャルハラスメントの申し立て *職務上の規則 *ティーチングに関する文献 *雑誌 *ビデオテープ 索引 電話番号簿 ハーバードマップ	*学期中 - 履修登録期間 - セクション運営 - セクションフォームのサンプル - 第一回セクション会議 - 講義およびセクションの配布資料 - オフィスアワーの場所 - 障がい学生 - 教科書およびコースパケットの返品 - コースおよびティーチングスタッフに関する中間アンケート - コースに関する中間アンケートのサンプル - 課題レポート - 中間試験 - 学期末 - 学生の授業評価アンケート - 復習セッション - 期末試験 - 成績評価の変更 - 再試験 *コース教材と著作権法	*見ればよくわかる：黒板の活用 *学生の評価：課題、試験、成績評価 *TFの評価：フィードバック *少人数指導：チュートリアルとオフィスアワー *存在感の薄い学生 *外国人教員 *手のかかる学生、問題を抱えた学生 *おわりに：アドバイス *要約 *索引
---	--	---

セクションに限定した冊子体のティップスが2点制作されていることが示すように、TFのセクション運営は大学当局およびティーチングスタッフにとくに関心が持たれている。セクション運営は、講義を担当しているコース・ヘッドがタッチせず、その運営が全面的にTFに任されている業務である。セクション（コースによってディスカッション・セクションとラボラトリー・セクションの2種類）の時間は、TFにとって学生への直接的な指導・助言が求められる機会である。TFはディスカッション・セクション⁷では18~20人の学生グループの議論の舵取りを行い、ラボラトリー・セクションでは自然科学領域のコースで修得すべき公理や実験方法などに関する指導を行うことから、自立的なセクション運営の計画と実施が要請される。そのため、ティーチング経験の浅いTFにとって、セクションは課題が多く心理的なプレッシャーを生じさせる場面である。そうしたプレッシャーを軽減したいというニーズに応えるため、セクションの時間の有効な運営の方法に関するティップスが細項目に分類されつつ具体的に提供されている。

2.2.2 ウェブ版のティップス

ボク・センターのウェブサイト（<http://bokcenter.fas.harvard.edu/>）では、教員対象のティップスや各種セミナー、プログラムの情報にあわせて、TFにとって有効な情報が提供さ

れている。それらは、ボク・センターのスタッフや先輩TFたちが執筆した短いエッセーや、備忘録のようなテキストの様式が主流である。「一目でわかるティップス」というよりは、「読ませるティップス」という表現がよくあてはまる。

以下にサンプルとして示したのは、ヘッドTFのための有益な情報の一つである。ヘッドTFとは、多数の同僚TFを束ねながら、大人数コース（100名以上の履修登録者）の事務的な調整を担当する経験を積んだリーダー格のTFのことである。

**Derek Bok Center for Teaching and Learning, Harvard
University | ONLINE DOCUMENT**

ORGANIZING LARGE COURSES:

INFORMATION FOR HEAD TEACHING FELLOWS

by Nancy Sultan (and the Bok Center Staff)

I Pre-semester Organization

1. Meet with the professor to plan strategies, either the semester before or during the summer.
2. Consult the Manual for Teaching Fellows in the Core (if you're doing a Core course) and the Teaching Fellows Handbook.
3. STAFFING should be planned a year ahead (if possible), leaving room for additions, so--make a list of committed TFs, alternates, and prospectives, with phone numbers.
4. Organize PAPER TOPIC committees & work ahead so that lists of potential topics are available from the first section meeting. (以下省略)

図2 ウェブ版ティップス「大人数クラスの運営：ヘッドTFのための情報」(部分)

(<http://bokcenter.harvard.edu/docs/Sultan.html>)

2.3 特色あるティップスの事例

ここでは、セクションの時間における具体的なティーチングの場面にかかわる特色のあるティップスを、2点の冊子体のティップスから拾い上げてみたい。

2.3.1 MITとの共同開発によるTFのためのティップス

TFの多くは学士課程で学ぶ学生とそれほど年齢の差がない大学院生たちである。同じ

ケンブリッジに位置するMITのティップスに基づきハーバード大学で開発されているティップスには、青年期の大学院生ならではの悩みに親身に（そして多少のユーモアを交えて）答えるようなものがいくつか含まれている。

たとえば、冊子体のティップスCでは、現実にセクションの場面で起こりうる問題を想定し、TFの目線に立ったティップスが提供されている。

ここでは、とくに、具体的な状況設定のなかで期待されるTFのふるまいや対処法が描かれているティップス「よいスタートを切るために：Off to a Good Start」と「問題のある学生、問題を抱えた学生：Problem Students and Students with Problems」を部分的に見てみよう⁸。

（１）よいスタートを切るために

経験を積んだTFであっても、未経験のTFであっても、初回のセクションは緊張を伴うものである。そうした緊張をときほぐすためのティップスが提供されている。

***まずは自己紹介をしよう**

TFであるきみの名前、オフィスの場所、email アドレス、電話番号（もし学生が電話をかけてきても構わないなら）、オフィスパワーを伝えよう。そして、もし差支えなければ、きみ自身のこともちよっと話してみると良い。きみの学生生活、研究、興味など、担当のクラス以外のことがらでも構わない。もしきみが海外から来た学生ならば、簡単な履歴を話すとともに良いだろう。もしかすると、きみの話す英語はかなりくせがあるかもしれない。また、セクションの教室サイズが大きすぎるようなら、初日に小さいサイズの教室への変更を申請しよう。

***学生に自己紹介させよう**

学生に用紙を回してかれらの名前、住所、email アドレス、電話番号、専攻（希望の専攻）指導者の名前を書かせよう。（あわせて、学籍係からも公式の履修登録者リストを入手しておこう。）履修登録が固まるまで、2～3回のセクションにわたって用紙をまわすとよいだろう。固まった頃に、公式のリストと照らし合わせてもれがないかを確認したら、全員にリストのコピーを渡そう。

***初回のセクションですべきことから**

- 学生の名前を覚えよう

名前は不思議な力を持っている。学生の名前を呼べば、きみが独立した個人としての学生に関心を持っているということが伝わり、双方向的なやりとりがうまくいく。きみが名前を呼ぶことで、学生は喜び、きみに応えようとするだろう。

- クラスではファーストネームで呼び合おう

学生を知る一番の近道。とくに初回や第2回目くらいのセクションでは、学生が発言する際にかれらのファーストネームを言ってもらうようにしよう（ファーストネームは誰でも持っているのだから）。名前を言い間違えることを心配して引っ込み思案にならないように。間違っても大丈夫。

- 小テストをやろう

問題用紙の一番上に学生のフルネームを書いてもらおう。学生たちが問題を解いている間に、かれらのそばを巡回しよう。そうすることで、どの学生が学習をスタートするうえで助けを必要としているのかがよくわかる。初日のセクションでやっても構わない。

- 課題提出物を学生に返すときは

返却時には学生のフルネームを呼ぼう。読みにくい名前はメモを取っておくとよい。どう呼ばれるかを学生は気にするものだ。もし返却する課題になんらかの評点がつけられていない場合は、TFが直接返す代わりに、学生たちに一括して渡して回させてもよい。（そうすることで学生たちもお互いの顔を覚えられる。）このように返却の方法に一工夫を加えることで、学生たちの特徴を記憶しやすいし、席順も覚えやすい。

- 学生の顔写真を手に入れよう

ヘッドTFに学生のID写真の入手方法をたずねて手に入れよう。より顔を覚えやすくするために必要ならば、ヒゲや眼鏡、ロングヘアなどいらずら書きしても構わないが・・・後から消すのは至難の業であることをお忘れなく。

(2) 手のかかる学生、問題を抱えた学生

また、どのクラスにも一人はいるかもしれない手のかかるタイプの学生や対応の難しいタイプの学生、学生との間に生じた現実的な問題に対処するティップスが提供されている。

- おしゃべりな学生

いつも教室の最前列に座って、正しかろうが間違っていようがおかまいなしに、しかもきみが質問を言い終わらないうちに、全ての質問に対して答える学生。一度口を開けば、テーマに沿っていようがいまいが関係なく長々と話し出す学生。そういう学生は時として授業の深刻な妨げになってしまう。そういう時は、次のような言葉をかけてみよう。

「ちょっと発言を待ってもらって、みんなで考える時間をつくろうよ。」

「もうすこしトピックが深まるまで質問は待ってくれるといいな。」

「そのことについてはクラスの後で話し合うのがいいと思うよ。」

「遮って悪いのだけど、もう少しきみのポイントを絞ってくれないかな？ そうすれば他の人からも意見が聞けるから。」

- 無口な学生

おしゃべりな学生の対極にいるのがまったく発言しない無口な学生だ。こうした無口な学生の多くは、発言すべき考えはたくさん持っているものの、発言への勇気を必要としている。なんとかしてかれらと交流をはかる理由をみつけて（課題レポートを理由にするのが良い方法かもしれない）、それからクラスのなかで発言することを促してみよう。また、気軽な雰囲気でごう話しかけるのも一案だ。

「いままであんまり発言していない人たちの答えはどうか？（教室を見渡して）マーク？ サリー？ ジム？」

ここで、決してかれらを脅かしてはいけない。気軽な雰囲気がかつ大切だ。ひとたび無口な学生が発言した後は、きみはかれらがなにかを発言したがつている様子を表情から読み取り、そしてかれらの羞恥心を気遣いながら呼びかけるとよい。

- 依存心の強い学生

授業後に必ず質問をしてきたり、オフィスアワーに訪問してきたり、個人的なアドバイスを求めてくる学生がいたら、TFとしては嬉しいものかもしれない。でも、それは同時にうんざりするかもしれない。もしそうなら、何が問題なのかを見極めて適切な行動を取ろう。

- ・ もしその学生が基礎必須科目を受けていないために基本的な知識に欠けている場合は、きみが個人指導を行って支援できるような問題ではない。履修のセメスターを遅らせるか、もし可能ならばより難易度の低いクラスに移ることを勧めるべきだろう。
- ・ 基礎必須科目を既習しているものの、テーマに関する知識の修得が弱い学生に対しては支援する責任がある。ただし、もし他の個別指導サービスがあるならばそれらも活用した方がよい。きみが支援に費やせる時間をはっきりさせて、学生にもちゃんと伝えよう。
- ・ なかには、面倒をみてもらうのを好み、誰かに頼って学ぶ「依存心が強い」タイプの学生がいる。しかしそれをきみが引き受ける必要はないし、そうすることは学生にとってもよくない。かれらに自立することをすすめてあげよう。「私はきみを助けることはできるけど、きみが自分自身でやった方がより多くのことがら学べると思うよ。」と。
- ・ あるいは、学生は個人的にきみに惹かれているのかもしれない。はっきりとは意識していなくても、きみと友だちになりたいとか、一緒に楽しく時間を過ごしたいのかもしれない。セクションの仲間みんなが歓迎していることが明らかなら構わないが、もしきみが快く思わなかったり、あるいは時間を割くことができないなら、個人的な注目は不適切なことだとそれとなく知らせよう。あくまでも、ビジネスライクに、機転をきかせて。

- 悩みを抱えた学生

学生たちがきみのことを好きで信用するからこそ、個人的な悩みや学習上の問題を打ち明けてくるかもしれない。そういう時は、自分の友人に接するように耳を傾け、親身に答え、きみにできるアドバイスをすれば良い。もし、明らかに学生の悩みが深刻で、学生にとってより豊かな経験に基づく指導が必要だと感じるならば、アドバイスを与えすぎることには慎重になろう。シニアチューターか1年生の担当スタッフに連絡をしよう。かれらは問題を抱えた学生たちに毎日接しているし、多くの経験を積んでいる。さらに公的な支援体制には、大学のヘルス・サービスや学習相談室がある。学生がきみのオフィスにいる時にこれらのサービスに予約を取るよう勧めることは可能だが、場合によっては機転をきかせよう。もし学生が自分で連絡を取ることを望まず、きみの眼から見て学生が自分自身での解決が困難であると判断したなら、きみ自身がシニアチューターやアシスタント・ディーン

に連絡を取ることもできる。こうした職員たちは、他のTFからも相談を受けているかもしれないし、全体的な見通しの中でTFとしてのきみのはたらきかけに期待するだろう。もしきみがベストな方法がわからなければ、専門スタッフに電話をしてアドバイスを求めよう。スタッフたちもそれを歓迎するし、また重大な問題を事前に回避できるかもしれない。

- 学習上の問題

最初の試験に失敗した学生や複数の宿題を提出していない学生がいる。きみはかれらの何が問題なのかを知るために、そうした学生と接触するのが良い。学生は悪い点数を取ったことや成果が挙がらなかったことを恥ずかしいと思っているし、きみに会いづらいと感じている。だから問題をつきとめるのはきみの役目だ。そうした学生の多くは、えてして何も問題がないかのように装うか、物事はうまく運ぶという楽観的な望みを抱きがちだ。とくに1年生はそのようにふるまう。大学に入るまでの12年間、優等生として過ごし、大学入学後に初めて学習上の問題に直面したかれらは、内面的・外面的なプレッシャーと向き合わなければならない。そうした学生たちに現実を優しく伝えることがきみの仕事だ。テストの結果が悪かったのは、ただの「ついていない日」だったからなのか、テストの準備が不十分だったからなのかを明らかにしよう。そして、学生の学習のためにわかりやすい計画をたててあげよう。学生は、教材の使い方とともに、かれらの時間管理や勉強をいかに行えばよいのかについて助言を求めてくるだろう。また、個人指導を受けるよう励まそう。それらは、大人数の初年次コースや、学習相談室、寮などのチューターたちによって提供される。おそらく、そこには学生たちと勉強をともにできる仲間や、助けてくれる上級生がいるだろうから。ただし、きみはコースに関わる人々の誰よりも学生に近い存在であり、かれらの学習上の問題を防ぐ役目を負っていることを忘れてはいけない。もし学生の問題が深刻で、とくに他のコースにも影響が及ぶようであれば、機転をきかせて、アシスタント・ディーンやシニアチューターに連絡しよう。かれらは学習に関わるカウンセリングが可能だし、スタディスキルや時間管理を支援するプログラムを教えてくれるだろう。

以上のティップスは、とくに日本の大学における少人数クラスのセミナーなどの場面において参考になるだろう。なかでも、入学したばかりの1年生対象のクラスで、学生の緊張を解きほぐしながら教員と学生の信頼関係を築く際に有効だろうと考えられる。

なお、ティップスCには、このほか、クラスを受講生に個人的な好意を感じたときの対処法など、青年期のTFに現実的に起こりうる問題についてのティップスもある。また、外国人教員をサポートする場合の心得など、ハーバードやMITのように世界的な研究大学ならではのティップスも提供されている。

2.3.2 コア・プログラムを担当するTFのためのティップス

前掲のティップスBの項目でも見たとおり、ヘッド・セクション・リーダーには、通常のTFの任務に加えて、コースの教科書の注文、セクション同士の調整、セクション会議の部屋の確保、コース・ウェブサイトの管理、毎週開かれるヘッドTF会議の開催（コース・ヘッドの教員と協力）、セクションすべての一貫性の確保、学生からの苦情あるいは特別のリクエストへの対応、などが任されている⁹。ヘッド・セクション・リーダーにはティーチングの仕事以外に管理業務も付加されることになる。

ここでは、ティップスBで提供されている、初日の授業を迎える前のミーティングにおいて合意しておくべき項目を紹介する¹⁰。

コースの全体的な目標はなにか？ コースの目標は、コア・プログラムのガイドラインとどのように整合しているか？ これらのガイドラインや目標のもとで、セクションにおける学生の学習目標はなにか？

学生の成績評価において、セクションへの出席はどのように加味されるのか？ セクションへの出席はどのように確認するか？ セクション内でのミニ・レポートの提出や、抜き打ちテストか？

同じコースの別のセクションでは、それぞれ個別の配布物を渡すのか？ あるいは統一するのか？（著作権についての注意を配布資料に明記すること）

コース・ヘッドは、初めてセクション・リーダーのティーチングの評価を計画しているのか？ もしそうでないならば、セクション・リーダーは自分たちのセクションの様子をビデオテープなどで記録しておくべきか？ あるいはヘッド・セクション・リーダーが準備するのか？

誰が学生の合格/不合格フォームに署名するのか？ コース・ヘッドかヘッド・セクション・リーダーか？

追加受講登録のフォームに誰が署名するのか？ 各学期の第5月曜日はコース登録のキャンセル/追加申請の最終締め切り日である。この日程設定では、後から入ってくる学生が追いつくには遅すぎる場合もあるため、コース・ヘッドかヘッド・セクション・リーダーは、よい早い時期の登録締め切り日を設定できる。

学生の間接評価はなにに基づくのか？ セクションへの出席か？ 小論文か？

レポートの提出日はいつごろに設定するか。いつ、どのようにそれを回収するか。スタッフは成績評価に関するミーティングをいつ開くか。いつ、どのようにレポートを返却するか。提出期限の延長のポリシーとは？ 提出が遅れた場合のペナルティは？

障がいを持った学生のニーズへの対応は？

宗教上の理由でコースを欠席する学生に対するフォローは？ 詳細な情報は、FASで提供している情報を参照すること。最初の授業で、宗教上の理由による欠席予定を学生にたずねておくのがよい。

なんらかの肯定的な理由（スポーツ競技会への参加、就職活動、進学活動など）あるいはなんらかの芳しくない理由で、学生がコースミーティングを欠席する場合、どのように証明書を提出させるか？ 宗教上の理由以外による欠席に対するポリシーは？ 誰が決めるのか？ 誰が補習クラスの実施を決定するのか？

すべての講義がビデオに記録化されたら、どこに、どのような環境で保管しておくのか？ それらのビデオを学生が利用することは可能か？

春学期のコースの場合、卒業論文を執筆している4年生や、再試験やコースレポートの提出期限の延長を希望する4年生にはどのように対応するのか？ セクション・リーダーはこれらの問題をコース・ヘッド、あるいはヘッド・セクション・リーダーに伝えるべきか？ すべてのティーチングスタッフは、任用手続きが進められ給与が支払われるように、コア・オフィスで必要な書類を記入したか？

講義時間やセクション・スタッフ会議が組まれた毎週のコース・スケジュールが配布されたか？ それぞれのセクション・リーダーは、いつどこでオフィスアワーを開くか？ セクションの時間やオフィスアワーのスケジュールは、コース全体の講義時間やスタッフ・ミーティング、フィルム上映の時間などどのように調整するか？

以上のように、ヘッド・セクション・リーダーは担当コースの目標の確認、成績評価の方法の検討、配布物の規格の確認、特別な理由による学生の出欠の取扱、ミーティングのスケジュール調整、各種の事務手続きなどについて、授業開始前に同僚TFらと合意することが課されている。FDの観点から見れば、コースの全体像を視野に入れながら一定の範囲でのセクション運営を任されるTFは、自立した教員への準備期間として自らのティーチング・スキルや授業運営の力量を高めることを期待され、組織的に支援されているといえる¹¹。



図3 学生の授業評価アンケートで高いポイントを得たTFの表彰
(ボク・センター主催の CUE Teaching Awards ceremony 2005年4月14日)

まとめ

以上、概観してきたとおり、ハーバード大学においては、学士課程教育の充実に欠かせない存在としてのTFを支援するティップスが組織的に開発・提供されていた。その特徴を整理すると、以下の5点が挙げられよう。

第一に、ティップスの開発においては、ハーバード大学に固有の文脈にそくしたティップスが重視されている。つまり、コア・プログラムを基礎とする学士課程のカリキュラムや、講義とセクションを効果的に組み合わせたコース運営のあり方と密接に結びつき、よりハーバードの学士課程教育により適合するように工夫されたティップスが開発されている。

第二に、TFについては、職務や職責の違いから、リーダー格のTFと一般のTF対象とに分けたティップスが作成され、かれらのニーズにきめ細やかに対応している。

第三に、TFに対しては、単にテクニカルなティップスやノウハウを伝授するのではなく、次代の教員を養成するという観点からティップスが提供されている。TFはひとりの自立したティーチングスタッフとしての心構えやティーチング・スキルを鍛えることを期待される。さらに、近い将来の自立した教員としての態度、責任感などが育成される仕組みになっている。

第四として、問題を抱えた学生への対処方法など、現実的かつ微妙な問題に関しては、青年期の大学院生としてのTFの視点に立って作られた身近で親しみやすいティップスが提供されている。

第五として、ティップスの多くは、いわゆるトラブルシューティング的に即答を授けるものではなく、よりよい解決へのアプローチを示唆する内容になっている。

もっとも、こうした特徴を備えたハーバード大学におけるTFを対象にしたティップスは、アメリカという固有の社会・文化状況や、それらを背景とするハーバード大学の組織風土のなかで開発されてきたものである。そうしたことから、直接的に日本の大学へ移入することは難しいティップスもあるが、文脈を読み替えることによって有効になると考えられるティップスも含まれている。たとえば、日本の大学におけるティップス開発に向けて、以下のような示唆が得られよう。

第一に、コースデザインにかかわる具体的なティップスである。ヘッド・セクション・リーダーに向けたティップスにもあった通り、ハーバード大学ではコース全体を視野に入れた授業運営が戦略的に行われていた。とりわけ、初回の授業の開始前にコア・プログラムのガイドラインと当該コースの目標との整合性を確認している点は、カリキュラムにおける当該コースの位置付けを把握するうえでも重要である。日本の大学ではとくに担当教員がコースデザインを行い、シラバスを設計する際に重視される視点であると考えられる。

第二に、ティーチングの支援にかかわる学内リソースとそこへのアクセス方法についてのティップスである。セクションを担当するTFのためのティップスで見たとおり、ハーバード大学では、TF個人の力では解決できない問題に関しては、学習相談室やシニアチ

ューター、アシスタント・ディーンなどの大学の専門組織や専門家らによる支援が得られるような体制が敷かれていた。日本の大学においても、授業実践の悩みを抱えた教員が孤立してしまわないように、FDの専門部署が中心となって学内の関連部局や専門組織に関する情報を教員に積極的に提供することが有効だろう。あわせて、学内の関連部局との連携、組織的な支援体制を緊密なものにしていくことが重要である。

第三に、実際の授業実践の場面における学生との双方向的なやりとりに関するティップスである。とりわけ、ハーバード大学におけるTFの配置に見られたとおり、学士課程の大人数講義においてはセクションの時間が設定され、小グループのディスカッションによる学生の学習の定着および深化、意見の共有などが図られていた。日本の大学においては、大人数講義の場がしばしば教員からの一方的な知識や情報の伝達の場にとどまってしまう、学生からのフィードバックが不十分な例が少なくない。人件費の問題などから、コースに配置されるTAの人数が限られている場合が多い日本の大学の現状にそくせば、大人数クラスにおける双方向的な学習の促進方法や、学生の学習を深化・定着させるための効果的な授業時間外の課題の出し方、学生からのフィードバックの取り方（毎回の授業終了時に回収するレスポンス・ペーパーなどの活用）に関するティップスを開発することが有効であろう。

今回紹介したハーバード大学のTFを対象にしたティップスからは、ティーチングスタッフのコミュニティ形成が組織的に推進されていることが認められた。ハーバード大学におけるティップスとは、授業実践にコミットする人々が - 教育経験の豊富な教員であろうとも教育経験が浅い大学院生のTFであろうとも - 学生の学習を成功に導くために共有すべき秘訣であると考えられる。これから教育経験を積もうとしているTFであってもティーチングスタッフの一員であるとみなし、教員やFDの専門組織、大学事務局やその他の関連部署の組織的な支援体制が敷かれている点は重要である。事実、現在ハーバード大学でフルタイムの教員として勤務している者のなかには、かつてのTFが多数存在するという。大学の伝統や組織風土のなかから生れてきたティップスによって、次世代の教員 - それはハーバード大学以外の高等教育機関に職を得る者も含む - にティーチングの精神が継承されている事例であるといえよう。

主要参考文献およびウェブサイト

Mattuck, P. (2005) *The Torch or the Firehose: A Guide to Section Teaching, Harvard Edition*, Draft Version.

The Core Program (2004) *A Guide for Head Section Leaders in the Core Program 2004-2005*.

Sarkisian, E. (1997) *Teaching American Students: A Guide for International Faculty and Teaching Assistants in Colleges and Universities*, revised edition, Derek Bok Center for Teaching and

Learning.

Lonoff, S. (2000) *Report on the Graduate Writing Fellows Program: Research Series No.1*, Derek Bok Center for Teaching and Learning.

TF リーダー経験者によるティップス (Tips from Experienced Head TFs)

<http://bokcenter.fas.harvard.edu/docs/experienced.html>

TF のための有益な情報 (Resources for Teaching Fellows)

<http://bokcenter.harvard.edu/TFs.html>

ハーバード版ティーチング用語集 (Glossary of “Harvardese” Teaching Terms)

<http://bokcenter.harvard.edu/docs/harvardese.html#TFs>

謝辞

本稿をまとめるにあたって、ハーバード大学デレク・ボク・センター長の James Wilkinson 教授、および同大学コア・プログラム・オフィスのダイレクター Susan Lewis 氏からご厚意を頂戴し、多くの示唆を得た。記して謝意を表したい。

【 注 】

¹ なお、ハーバード大学の授業補助職には、TF のほかに Teaching Assistant というカテゴリーも存在する。これは、同大の大学院に在籍していない者を採用する際に適用される。

² ハーバード大学では、2002 年から文理学院長 Kirby のリーダーシップでコアカリキュラムの見直しと再構築に向けた検討が始まり、現在、専門委員会 (Core Curriculum Review Committee) での議論が継続している。

³ 正確には TF と TA を合計した数である。

⁴ ただし、もしその大学院生の TF がカレッジのコースを 1 つでも履修している場合は、その大学院生は学生の試験やレポートの評価は行えないことになっている。

⁵ 1976 年の設置当時は、the Harvard-Danforth Center for Teaching and Learning という名称であった。デレク・ボク学長の名前にちなみ、ボク・センターに改称されたのは 1991 年 5 月である。

⁶ セクション・リーダーおよびヘッド・セクション・リーダーのほとんどは大学院生の TF であるが、コースによっては PhD を取得したポスト・ドクターが担当することもある。そのため、コア・オフィスでは一般の TF の呼称とは別にセクション・リーダーという肩書きを用いている。

⁷ 実際のシラバスのなかで説明されているディスカッション・セクションの内容は以下の通りである。「セクション：必修。セクションの主な目的は、前回の講義およびリーディングスで扱ったトピックをめぐり議論を行うことです。セクションでは、学生のみなさんが質問や議論をしたり - それらは論争的な主題であり、誰でも何らかの意見を持つようなテーマです - 教科書の内容について話し合ったりする機会が提供されます。学生のみなさんの成績評点の 10 パーセントはセクションへの参加に配分されます。さらに、セクションを通じて TF はあなた方学生を知り、あなたと授業の主題をつなげる大切な窓口になるとともに、最終的な成績評価および他の決定に影響を及ぼすでしょう。」(Steven Pinker, *Science B-62: The Human Mind*, 2005 spring term)

⁸ これらのティップスは紹介にあたり筆者が意識を行った。詳しくは、ティップス C の 31 - 33 頁、および 56 - 59 頁を参照のこと。

⁹ なお、ヘッドTFの特別手当として、規定の給与が支給される。もし履修登録生が100名に達しなかった場合は、コース・ヘッドがヘッドTFの任務を負う。

¹⁰ これらの項目は、ティップスBの15 - 16頁を参照して筆者が抄訳した。

¹¹ なお、ボク・センターでは、学生から高い評価を得たTFを対象に、かれらのティップスを収集する活動を行っている。

資料1 Ver1.2 において改訂した内容

ここでは、『成長するティップス先生 Ver1.1』から『成長するティップス先生 Ver1.2』への改訂において加筆・修正した内容を紹介します。その主な内容は、表1に示した通りである。『成長するティップス先生』に関するアンケートもウェブ上では公開しているが、資料3と重複するため省略した。また目次のページなどの細かな修正部分も省略した。

表1 Ver1.2 において改訂した内容

ごあいさつ
開発スタッフ
授業の基本
・ 5.3.3 新しい道具がもたらすメリット
・ 10.3 成人学生の学習を支援するためのティップス
コラム
・ コースデザインは手順が命
・ フィクション「みればわかる?!カリキュラムのグランドデザイン」
・ ルンバをスマートに踊れますか？
・ 社会が学生に求めるもの
・ はじめてのシラバス作成
・ 学生は4年間の大学生活でどのように発達するの？
・ 私の名大デビュー
・ 学生はますます多様に
・ 大規模クラスで教えるコツは
・ 新しい道具で思わぬ苦勞
・ 学生をほめてのばそう
・ まずは、いっしょに歩こう
・ シラバスどおりの授業
・ 学生による授業評価からわかる教授法ランキング
・ アメリカで最も有名な大学教授法
・ 社会人大学院でどう教えるか
みんなの広場
・ 学内教職員のサポート

玄関

[ごあいさつ](#)

[はじめに](#)

[使い方](#)

[目次](#)

成長するティップス先生

Ver1.2

- 名古屋大学版ティーチングティップス -

Teaching Tips at Nagoya University, Ver 1.2

- NEW!** 2004/5/1 [書籍版『成長するティップス先生』第7刷ができました](#)
- NEW!** 2004/12/20 [みんなの広場](#) に「[学内教職員のサポート](#)」と「[アンケート](#)」の新しいセクションができました
- NEW!** 2004/12/20 [『成長するティップス先生』がVer 1.2になりました](#)
- 2004/11/10 [書籍版『成長するティップス先生』第6刷ができました](#)



最終更新 2005年 4月26日

Ver 1.2 2004年12月20日

Ver 1.1 2001年12月 1日

Ver 1.0 2000年 3月31日

名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL:052-789-5696 FAX:052-789-5695
E-mail: webmaster@cshe.nagoya-u.ac.jp
URL: <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>

本サイトに掲載されている文章・画像等の無断使用及び転載はご遠慮下さい。
Copyright (c) 2000-2004 Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University.
All rights reserved. No reproduction or republication without written permission

ごあいさつ



黒田 光太郎
(高等教育研究センター長)

『成長するティップス先生』ウェブ版の改訂をようやく発表することになりました。2001年12月1日に改訂してから3年ぶりのことです。この間、ティップス先生を成長させるべき高等教育研究センターは休んでいただけではありません。むしろ多忙な日々を送ってきました。「ゴーイングシラバス」の改訂をはかり、「スタディティップス」を準備したり、さまざまな活動を展開してきました。とりわけ、名古屋大学評価情報分析室の活動にも深く関与し、2004年4月からの国立大学法人化の準備段階では大いに尽力してきました。しかし、『成長するティップス先生』がバージョン1.1のままであることはずっと気がかりでした。

2003年度から文部科学省が推進する「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」の選定が始まり、2004年度の「特色GP」には、高等教育研究センターを中心に進めてきた名古屋大学全体の取組「教員の自発的な授業改善の促進・支援 授業支援ツールを活用した授業デザイン力の形成」が採択されました。この取組は、教員の自発的な授業改善の促進・支援を目的に、授業改善の方法論を開発し、その具体的な実践手段を個々の教員に提供する活動で、授業改善に必要なスキルである「授業デザイン力」を教員が身に付けることを支援しています。この取組の3つの柱は、『成長するティップス先生』と「ゴーイングシラバス」、全学的FD研修です。

「特色GP」の採択理由には、

この取組は、平成10年4月から名古屋大学が高等教育研究センターを中心として教員の自発的な授業改善の促進・支援を行うことを目的に授業支援ツールを開発し、極めて具体的な実践手段を教員に提供するというものです。具体的には、FDに戸惑う教員のために授業改善のノウハウやヒントをわかり易く表現した『成長するティップス先生』の制作、ウェブ上のシラバス「ゴーイングシラバス」の開発に成功し、現在教育の質の向上とFD活動の推進に一定の成果を上げています。

と述べられています。さらに、今後の課題としては、

学内における取組の拡大、学生の成績向上の検証、『ティップス先生』と「ゴーイングシラバス」の見直し、ツールの改善等に一層の努力と工夫を重ねられることにあると思います。

と指摘されています。

今回の『成長するティップス先生』の改訂は「特色GP」で指摘された課題への最初の回答です。それで、バージョン1.2としています。主な改訂ポイントは、

1. 「みんなの広場」に「学内教職員のサポート」というセクションを追加し、名古屋大学の授業改善をサポートするサービスを開始
2. 新しいコラム16個を追加
3. 授業の基本に2つの節を追加
4. 「みんなの広場」にティップスのフィードバックをとる「アンケート」のセクションを追加
5. これまでの内容で不適切な部分の修正

などです。さらに、全国の皆様のご意見を参考にして、より大きな改訂も準備しています。近い将来に、それがバージョン2.0として結実することにご期待ください。

開発スタッフ

Ver 1.2 改訂スタッフ

企画会議	黒田 光太郎 (センター長)
	夏目 達也 (センター教授)
	栗本 英和 (センター助教授)
	近田 政博 (センター助教授)
	中井 俊樹 (センター助教授)
	鳥居 朋子 (センター講師)
	小湊 卓夫 (センター助手)
	中島 英博 (センター助手)
	青山 佳代 (センター助手)
プロジェクトチーフ	中井 俊樹
プロジェクトメンバー	夏目 達也
	中井 俊樹
	中島 英博
	青山 佳代
コラム執筆	黒田 光太郎
	夏目 達也
	近田 政博
	中井 俊樹
	鳥居 朋子
	中島 英博
	青山 佳代
ウェブ制作	池田 輝政
	中井 俊樹
	中島 英博

小林 克希 (情報科学研究科大学院生)

* 所属は平成16年12月20日現在

5.3.3 新しい道具がもたらすメリット

近年は情報通信技術の急速な発展に伴って、大学の授業で活用する事例が増えているようです。電子メール、メーリングリスト、電子掲示板、チャット、ウェブなどの活用が、それにあたります。一言でいえばeラーニングとなるのですが、通信講座や放送大学の講義のように大掛かりなものではなく、ここでは日頃の授業の中でこうした新しい道具を活用するという程度のアイデアを考えてみましょう。

情報機器に強い人に言わせれば、独自にウェブサイトを立ち上げるなんてことは簡単だそうですが、初心者にはなかなかハードルの高いものです。しかし、今やほとんどの先生が通信手段としてメールを使っていると思いますから、まずはメールの活用から考えるというやり方でもいいでしょう。

新しい道具もうまく活用すれば、小さな力で大きく授業を動かすテコになるかもしれません。学生を授業に参加させるひとつの方法として活用してみてはいかがでしょうか。

- 電子メールで質問を受け付ける。授業中には質問しにくいと感じている学生でも、電子メールなら質問できるという場合もあります。また、授業時間外に疑問に思ったことをすぐに質問できるようにしておけば、次回の授業までに忘れてしまうということも防げます。質問が投げかけられたら、できるかぎり早く答えてあげることが、学習意欲を高める秘訣です。
- 電子メールでレポートの提出を受け付ける。メールによる提出は、提出時間が明確になるとともに、(コンピュータが壊れない限り)紙のようになくしてしまうことがありません。ただし、レポート作成に使用するソフトウェアなどは、学生が容易に使い、かつ教員が確実に閲覧できるものにあらかじめ指定するなどの配慮は必要です。
- 「電子掲示板」で質問を受け付ける。電子メールによる質問の受付と同様の効果が期待できます。「電子掲示板」は少なくとも受講者の中で公開されますから、同じ質問に何度も答えたりする手間を省くことができます。ただ、電子メールの送付よりも敷居が高いと感じる学生もいるかもしれませんので、まず自己紹介を投稿させる、教師からメッセージを投げかけてそれに応える投稿をさせるなど、学生に慣れてもらう配慮をするとよいでしょう。
- 学生のレポートや調査成果をウェブで公開する。学生はお互いの成果がオープンになることで、いい加減なものを出せないという気持ちになるとともに、達成した時に公正に評価されたという気持ちも高まります。だれでもアクセスできるインターネットに公開する必要はないかもしれませんが、少なくとも受講生の間で共有できるウェブに公開するとよいでしょう。

10.3 成人学生の学習を支援するためのティップス

10.3.1 成人学生の特徴を理解しよう

最近では大学にも職業経験や社会経験をもった大人の学生が増えています。彼らは高校を卒業して大学に進学する学生とは特徴が異なります。高校を卒業して大学に進学する学生はよく伝統的學生と呼ばれるようなので、ここでもその用語を用います。

成人学生と伝統的學生はどこが違うのでしょうか。まず頭に入れておくべきことは、伝統的學生より成人学生の方が集団として多様だということです。年齢も経験も、社会の中での立場も多様です。したがって、成人学生だからこのような特徴をもっているというような固定観念を持つことよりも、目の前にいる学生個人の特徴を理解することが大切です。

しかし、成人学生に共通した特徴があることも事実です。まず注意すべきことは、身体的な特徴です。個人差はありますが、成人学生は視力が若い時より衰えている場合があります。板書するときの文字のサイズや色、教室の部屋の明るさ、配布資料の文字の大きさなど、学生にとって適切かどうか確認する必要があるでしょう。また、視力ほど顕著でないかもしれませんが、聴覚についても加齢による衰えがあります。自分の声が学生全員にクリアーに届いているか注意したり、聴覚の弱い学生に配慮して席の配置を変更したりすることも必要でしょう。また、学生に対しても、聴覚の弱い学生を含めた学生全員に聞き取れるように、ゆっくり大きな声で発言することを求めることが必要でしょう。視力や聴覚以外にも加齢による身体的な衰えはあります。長時間にわたってあまり高価とは言えない椅子に座ることに苦痛を感じる人もいるでしょう。適度な休憩を入れることが学習効果を高めることにつながるかもしれません。

成人学生は社会面や精神面においても伝統的學生とは異なります。成人学生は、昼間は会社において働いている場合も多いでしょう。また人生の段階としては、結婚していて家庭を持っている学生もいるでしょう。仕事や家庭をもった成人学生が、現実的にどれだけの授業外の学習時間をとれるのかについて把握しましょう。

10.3.2 成人学生の学習意欲と経験を生かそう

職業に必要な知識・技能を身につけたい、体系的・理論的な研究をしたい、キャリアアップのきっかけにしたい、資格を取得したい、教養を深めたいなど、成人学生が大学へ学びにくる目的はさまざまです。しかし、個々の成人学生の目的は多様であっても、目的を明確に持って入学してくる点が重要です。学費を所属組織に負担してもらう学生もいれば、自ら負担している学生もいますが、いずれの場合も何らかのミッションを背負う決意とともに学びに来ています。また、成人学生の多くは、過去の学習経験や職業経験を通じて、時間の使い方やディスカッションの進め方など基本的な学習態度を身につけています。

高い学習意欲を持ち、基本的な学習態度を身につけた成人学生を教える際には、主体的な学習を促すような教授法が有効です。たとえば、授業設計の段階から成人学生

に主体的に参加してもらいたいでしょう。学習目標や評価方法などの大枠は教師が決めておく必要がありますが、具体的な学習活動や課題のテーマについては成人学生と話し合っ決めてという方法もあります。また、文献の批判的検討、ディスカッションの活用をはじめ、シミュレーション、ロールプレイ、フィールドワーク、研究プロジェクトなど主体的に学習させる方法が考えられます。教師は成人学生の高い学習意欲と基本的な学習態度を生かせるかどうか鍵となるでしょう。

また、伝統的學生と比較した特徴として、成人學生が持つ社会経験があります。この成人學生が持つ豊かな経験を授業内で教育資源として活用してみたいはどうでしょう。彼らが社会で培ってきた経験は、彼ら自身の貴重な教育資源となるだけでなく、他の受講生や教師にとっても貴重な教育資源にもなります。彼らの教育資源がクラス全体に共有されるようなグループ学習やプロジェクトなどを取り入れてみてはいかがでしょうか。

コラム:コースデザインは手順が命

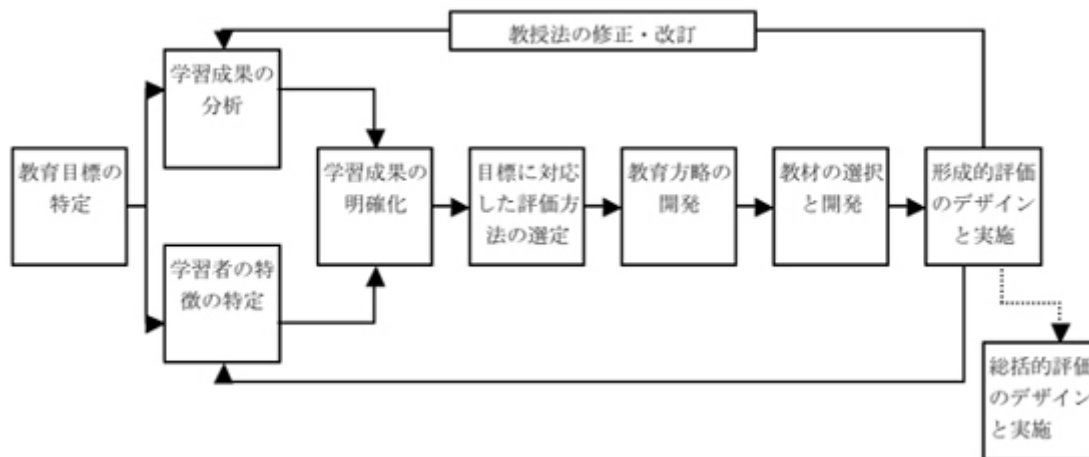
閉じる

「コースをいかにデザインするか」を考える際のポイントの一つに、明確な学習目標にそって教材を作成しましょうというものがありました。この考え方はインストラクショナル・デザインという考え方に基づいています。Dick and Carey (1978)が示した下図のモデルは、その代表的なものです。

このモデルでは、カリキュラムに沿って目標を明確に立てる 目標の到達を示す最終試験を作る・レポート課題を設定する 試験・課題のクリアに必要な授業内容・教材を決定する、という手順が示されています。この手順のポイントは、授業内容を考える前に、試験問題などを考えるところです。こうした明確な目標にそった授業づくりが、教育効果を高めると考えられています。

私たちがかつて受けてきた授業の多くは、まず講義が先にあり、試験の時期が近づいてきてから、どのような問題にしようか、と考えがちでした。さらに、「今期はこのトピックまで進めなかった、試験範囲から外そう」、「このトピックは学生の反応がよかったから試験範囲はここだけにしよう」、「昨年までの学生より学力不足を感じるから試験問題を少しやさしくしよう」ということもあったでしょう。

私たちはそろそろ恩師の授業スタイルから脱却する時が来ているのかもしれません。



Dick and Carey (1978), p.9より作成

参考文献

Dick, W. and L. Carey (1978) The Systematic Design of Instruction, Scott, Foresman and Company.

コラム：フィクション「みればわかる?! カリキュラムのグランドデザイン」

閉じる

今日は某国の著名な大学のVIPが急にご訪問。どうやら当大学との協定を考えているらしい。ちょうど教授が出張で不在だったため、若手のA先生と私が引っ張り出されました。とりあえず、教養教育の説明を終えたのですけれど…。

外国人訪問者「質問です。全学教育科目の基礎科目にも文系と理系があって、教養科目にも理系と文系がありますが、これはどういう関係なのですか？」

教師A「むむ。それはBさんからご説明を。」

私「ええッ!! 私ですかぁ?(汗)えーと、これはその…あのですね、文系基礎科目というのは、『人文・社会科学系分野の学問体系を認識するとともに、自主的判断能力を培う科目』、なんですね。それで、理系基礎科目は、『自然科学系分野の学問体系を認識するとともに、自主的判断能力を培う科目』、になっているわけです(汗だく)。

それに対して、文系教養科目は、『人文・社会科学系分野の諸現象について、それらの諸現象を学際的、総合的に分析、把握する能力を育むとともに、他の学問分野との関連性について理解する科目』、なんですね。そんでもって、理系教養科目は、『自然科学系分野の諸現象について、それらの諸現象を学際的、総合的に分析、把握する能力を育むとともに、他の学問分野との関連性について理解する科目』、なんですよ(汗まみれ)。」

外国人訪問者「どうやら、基礎科目は『学問体系』、教養科目は『総合性』をキーワードにして構成されているようにお見受けしましたが…まだピンときませんね。具体的な科目配列を教えてくださいませんか？」

私「むむむ…(冷汗)」

教師A「ふ〜っ、疲れた。慣れない外国語だったし。しかし難しいなぁ、教養教育のカリキュラムを外国人に説明するのって。」

私「なに言ってんですか!! 説明に困ったのは私の方でしょ。でもこれって、外国人だけに限らず、日本人相手でも説明するのは難しいんじゃないですか？」

教師A「だいたい自分自身がよくわかっていないもんね。カリキュラム全体のなかでの自分の授業の位置づけとか深く考えたことなかったしなぁ。これでよく授業がやれてるよ。反省。」

私「そうですね。カリキュラム上の授業の位置を確認すると、授業の学習目標が明確になるし、学生のモチベーションも高まるかもしれませんよね。」

教師A「でも、そもそも、われわれや外国の大学関係者にもすぐには呑みこめないカリキュラムの構造が、大学1年生にわかるのかなぁ。まずは新入生にきちんと理解してもらうように働きかけることが大切だよな。」

コラム：ルンバをスマートに踊れますか？

閉じる

「コースの到達目標の明確化」と言われても、実際はなかなかむずかしいところです。自分では明確なつもりだけでも・・・という場合に、自分で簡単にチェックできる方法があります。

それは、目標をスマートに書けているかどうかです。スマートとは、SMART(Specific、Measurable、Achievable、Relevant、Timely)という5つの点から振り返りながら修正することです。

スマートな目標を書くためのポイント

1. Specific: 獲得する知識や技能が具体的に設定されているか
2. Measurable: 目標の到達は評価できるものか
3. Achievable: 学習者が到達可能なものか
4. Relevant: 学習者のニーズにあったものか
5. Timely: 社会や時代のニーズにあったものか

他にも、RをRealistic(現実性)やResults-oriented(成果重視)、TをTime-bound(学習時間の考慮)やTrackable(進捗状況の把握)として示しているものもあります。

「目標はルンバで書く」という方法もあります。このRUMBAは、医学教育のワークショップ教材などでよく使われているものです。

ルンバな目標を書くためのポイント

1. Real: 目標が現実的か
2. Understandable: 学生が理解可能な言葉で書かれているか
3. Measurable: 目標の到達が測定できるものか
4. Behavioral: 学生の行動レベルで書かれているか
5. Achievable: 学生が努力すれば到達できる水準か

スマートな目標とルンバな目標、みなさんはどちらがお好みでしょうか？

コラム：社会が学生に求めるもの

閉じる

「社会が大学や学生に求めるものはどのようなものだろうか。現在の日本は、経済のグローバル化にともなって世界各国との厳しい競争に直面している。そのような競争に備えて優秀な人材はますます必要となっており、その人材養成機関としての大学に対する期待が高まっている。このような状況の中で、近年の大学改革をめぐる議論でも、大学が養成すべき能力や資質が論点の一つとなっている。

たとえば、中央教育審議会大学分科会が2004年9月に発表した「我が国の高等教育の将来像(審議の概要)」は、21世紀は新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、「知識基盤社会」(knowledge-based society)の時代であるとし、それを担う人材の養成を大学に求めている。

大学が養成する人材にもっとも注目していると思われるのは企業だろう。リクルート社の『就職白書2004』によると、企業が採用基準で重視する項目は、以下のようなものである。人格、会社への熱意、今後の可能性のベスト3にくわえて、能力適性検査の結果、大学での成績、学部・学科、語学力、知識試験の結果などが上位を占めている。白書では、学生が重視されたい項目についても調査しているが、上位を占めるのはアルバイト経験、所属クラブ・サークル、趣味・特技などである。ただし、企業はこれらをあまり重視していない。

「知識基盤社会」云々はともかく、科学・技術が急速に進む中で、社会に出てからも通用する基礎のしっかりした知識・技能を学生に身につけさせることが、やはり大学教育の第一義的な使命というべきだろう。

コラム：はじめてのシラバス作成

閉じる

大学教員として初めて初年次セミナーを受け持つことになった私。そこで最初にやるべきことはシラバス作成…、ってことは『成長するティップス先生』を読んでわかっていました。けれども、シラバスって、何から書き始めていいのかいいか全くわからない…。そこで私は、まず先輩教員のシラバスを真似することにしました。さっそく自分の大学の大学要覧、学修案内をくまなくサーチ。そして、他大学の場合はウェブで検索！日本の他大学はもちろんだけど、海外の大学もGoogleで検索しました。海外の大学への検索キーワードは、“syllabus freshman seminar”。なんと32,200件もヒットしちゃいました。

ここで重要なのが「どういうシラバスがイケてるシラバスなのか」という選球眼。最初はというのがイケてるのかわからなくても、いろんなシラバスを数多くみていると、不思議なことに、なんとなく「あ！このシラバスはイケてるっ」というのがわかってくるものです。

でも、いちばん有益なのは、自分のシラバスにコメントをしてくれるメンターのような先輩教員の存在です。もし近くに自分のシラバスにコメントをしてくれる先輩教員がいなければ、名古屋大学の教員であれば高等教育研究センターの方でメンターを紹介します。

[高等教育研究センターのメンター紹介](#)

コラム：学生は4年間の大学生活でどのように発達するの？

閉じる

みなさんの学生時代を振り返ってみましょう。4年間の大学生活で学生はさまざまな面において発達したと言えるのではないでしょうか。もちろん学生の発達は、専門分野の知識の習得に限られたものではありません。授業や友人との関係を通して、自分の人生の目的を見つけた学生もいるでしょう。また、サークル活動、アルバイトなどを通じて対人能力を大きく発達させた学生もいるでしょう。このように大学生は、単なる知的発達にとどまらないより広い全人的発達を遂げると言えるでしょう。

大学生がどのように発達するのかについて、さまざまな研究者が理論を作りました。その中で最も有名なものはチックリングによる7つのベクトルです。チックリングによると大学生は以下の7つのベクトルの方向に発達するとされています。

- ベクトル1 専門能力を獲得する
- ベクトル2 感情をコントロールする
- ベクトル3 自立性、相互依存性を発達させる
- ベクトル4 大人としての対人関係を発達させる
- ベクトル5 アイデンティティを確立する
- ベクトル6 目的意識を発達させる
- ベクトル7 全体性を発達させる

はたして大学は学生のどのベクトルの発達に関わるべきなのでしょう。自分たちが学生だったころ、対人能力やアイデンティティの形成などは大学以外のところで身につけてきたと言うかもしれませんね。では今の大学生についてはどうでしょうか。大学そして教員は、どこまで学生の発達にサポートすべきでしょうか。この7つのベクトルはこういった問いを考えるとときのきっかけになるのではと思います。

参考文献

Chickering, A. and Reisser, L. (1993) Education and Identity, 2nd Edition, Jossey-Bass.

コラム:私の名大デビュー

閉じる

みなさんも学生時代にさまざまな授業を受けてこられたことでしょう。かくいう私も、印象に残る授業、ためになった授業、反面教師としてとらえた授業、いろいろありました。不思議なもので、学生時代に自分がいいと思った授業は記憶に残っているのですが、悪いと思った授業はほとんど記憶にありません。当時の自分には、悪い授業のどこが悪いのかを見るだけの視点がなかったこと、教員からの働きかけが特になければ冷ややかに見ながらも、盲目的・従属的に取り組み、扎扎实り単位はいただいていたからかもしれません。

そんな私も初めて名古屋大学で授業を持つことになり、さまざまな不安がよぎりました。自分の学生時代を思い出しても、学生は教員をよく見えています。名古屋大学くらいのところで、変な授業をしたら学生にばかにされるのではないか？ 授業で伝えたいことが、学生に的確に伝わるのだろうか？ など、あげだすときりがありません。

自分の体験では、いい授業には適度な負荷があったので、私も学生に時間外で課題を課すことを心がけました。しかし、多くの学生が、大学に入ってまで宿題があるとは考えてもいなかったようで、なかなか進みませんでした。『ティップス先生』は読んでいたものの、新米の私はいざ現場に出たらあせるばかり。ティップスなんて吹っ飛んでいます。けれど、「一生懸命やってほしい」、「とにかくがんばれ」と励ますことで、最後はなんとか全員に取り組んでもらいました。テクニックはなくても、学生に勉強してほしい、という気持ちを伝えるだけでもまずはいいのかな、と思ったデビュー戦でした。

コラム：学生はますます多様に

閉じる

学生がいろいろな意味で多様化している、というのは多くの教員の実感だろう。もっとも顕著に感じるのは、やはり学力面の多様化だろう。しかし、これは学生個人の問題とばかりはいえない。むしろ高校教育の多様化を積極的に進めてきた政府の施策の影響が大きい。いまや高校教育と一口に言っても、その内実はかなり多様であり、一様に論ずることは難しい。多様化といえば、かつては職業学科が主な対象だったけれども、現在は普通科に重点が移っている。たとえば、関連の施策を見ると、単位制高校、総合学科、中等教育学校などの制度的なものに加えて、スーパー・サイエンス・ハイスクール、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール、さらには学力向上フロンティアハイスクール事業などもある。

くわえて、高校内部でのカリキュラム編成による多様化もある。文系・理系、これらの国立・私立別の系もあり、同じ高校であっても履修内容は多様である。系の分化は全体として早期化する傾向にあるため、高校の早い段階から履修内容が多様化している。荒井克弘らの研究によると、高校の教科科目の履修率にはかなりの差異がみられる。必修科目である国語・と数学・のほか、英語・では100%であるが、それ以外の科目ではかなりのばらつきがある。このような高校間の多様化をさらに拡大する可能性をほらむものとして、高校の学習指導要領改訂がある。現行の学習指導要領は1999年に改訂され、2003年度から学年進行で実施されている(この下で高校教育を受けた生徒たちは、2006年度に大学に入学してくる)。

はたして大学は学生のどのベクトルの発達に関わるべきなのでしょう。自分たちが学生だったころ、対人能力やアイデンティティの形成などは大学以外のところで身につけてきたと言うかもしれませんね。では今の大学生についてはどうでしょうか。大学そして教員は、どこまで学生の発達にサポートすべきでしょうか。この7つのベクトルはこういった問いを考えるときのきっかけになるのではと思います。

大学はこうした多様化した学生を対象に教育を行うことが求められている。まずはその実態を正確に把握することが必要だろう。

コラム:大規模クラスで教えるコツは

閉じる

規模によります。FD講演の後にこんな質問をされたときには、これまでは、300名を越えたら人格を変えてエンターテナーに徹してください、・・・でした。某国立大学の教養教育の授業では、700人規模のクラスがあると聞きました。これはもうシアター(劇場)空間のコンセプトに立つ興行的授業と考えたほうがよい。教師は役者が演出家になって、観衆を刺激的に楽しませるしかない。

クラス規模5000人という英国の遠隔通信授業の例を聞いたことがありますが、この場合は独学者という個が単位であって、大規模集団という捉え方ではない。これは「学習商品」にまで仕上げられたコース教材パッケージの組織的開発力があって成り立つ形態です。

大規模クラスで教えるコツは案外この辺りにあるようです。例えば、どうしても双方向型を実現したければ、コースの全体を見渡して設計した課題教材を作成し、何名かに報告させ、それから講師の解答例をその場で解説して自己採点させる。その結果を提出させる。疑問点はその場で質問時間をもうけるか、もしくは紙に書いて提出させる。こんな要領です。150名規模まではいくと思いますが、ポイントは課題型教材の設計と開発力です。

コラム:新しい道具で思わぬ苦労

閉じる

最近では、新入生として大学に入ってきた段階で、電子メールやインターネットを活用できる学生が増えています。また、コンピュータをまったく触ったことがないという学生でも、少し教えるだけで、あっというまにマスターしてしまいます。

そこで、学生にコンピュータを使ってレポートを作成してもらい、そのファイルを電子メールに添付して提出してもらうようにしてみました。事前に昨年度の学生が作成したレポートを見せて、形式面・内容面で見本を見せておいたので、レポートそのものはとてもよくできたものが提出されました。

ところが、レポートを集める過程では思わぬ苦労がありました。その一つが、メールに添付されるファイルです。レポート作成に使用するワープロソフトはあらかじめ指定しておいたので、表示ができないなどのトラブルはありませんでした。しかし、ファイルそのものが開けないということが続発しました。

いろいろ調べてみると、どうやら学生が知らないうちにおかしなファイルを添付していたようです。例えば、

- ショートカット。Windows系のOSで、別のファイルへの参照として機能する実体のないファイルやアイコンのことです。これを本体のファイルを間違えて添付するケースがありました。
- 一時ファイルの添付。Microsoft Wordなどでは、作業中のデータの保存のために一時的に作られるファイルがあります。これを間違えて添付するケースもありました。

他にも、とても熱心に一生懸命取り組んでくれた学生は、様々な図表・資料を入れたためにファイルのサイズが大きくなりすぎて、添付に支障が出るということもありました。

メールでのレポート提出は回収が容易で保存性もあり、大変便利なのですが、思わぬトラブルに対応できるよう、提出期限に余裕を持たせる、提出後1日以内に教員からの受け取り確認メールをチェックするよう周知するなどの配慮も必要ですね。

コラム:学生をほめてのばそう

閉じる

平成16年9月30日に教養教育院で実施されたFDでは、名古屋大学の教員は他大学の教員に比べて学生をあまりほめていないという報告が評価専門委員会からありました。ほめるという肯定的なフィードバックは、学生の動機づけに大きく影響を与え、学習効果を高めると言われています。では、具体的にどのようなほめたらよいのでしょうか。教授法の文献や周りの教員へのインタビューなどから、そのヒントになりそうなものを取りあげてみました。

- フィードバックは迅速であるほうがよい。
- 適度な水準の課題を出して、学生が成功する機会を確保するように努める。
- 結果のみではなく、プロセスや努力に対しても肯定的なフィードバックをするとよい。
- 質問や発言をするということは勇気を要することなので、まずその行為自体を高く評価する。
- 見えすいた内容でほめることは、かえって不信感を抱かせる可能性がある。
- 他の学生と比較したフィードバックは避ける。
- 個別にフィードバックを行うことが効果的な場合がある。
- 肯定的なフィードバックをするときに、同時に改善点も建設的に指摘することが有効である。
- 開放的で肯定的なクラスの雰囲気づくりを心がける。
- 授業によってはTAからほめることが有効である場合もある。

コラム:まずは、いっしょに歩こう

閉じる

授業改善は、教育学の専門的な内容を知らなければできないと思いませんか？ 授業改善というけれど、一体何をすればいいのか？忙しいのにそのような時間が取れるのか？と思いませんか？

その時は、まず「学生と一緒に歩く」ことから始めましょう。研究室から教室へ行く間で、教室から教室へ行く間で、教室から研究室へ戻る間で、3階から1階へ降りるほんの短い間でもかまいません。受講生と一緒に歩き、彼らの部活の話に耳を傾けたり、「今日の授業むずかしかった？」と話しかけてみましょう。

そんなことが授業改善か？と思われるかもしれませんが、これも教授法の研究で示されている「教員と学生のコミュニケーションを促進することは学習効果を高める」という理論にもとづいています。忙しいけれど少しでも授業改善に取り組んでみたいという場合、学生と一緒に歩くようなことから始めてはいかがでしょうか。

ところで、アメリカではこうしたすぐに行える実践的な授業改善のアイデアをまとめた情報が、いくつか提供されています。興味のある方は、下記のサイトを訪れてみてはいかがでしょうか。授業形態別にさまざまなノウハウが紹介されています。

[Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education Implementation Ideas](#)

コラム:シラバスどおりの授業

閉じる

全国の大学で学生による授業評価アンケートが行なわれている。アンケート項目のひとつに、「この授業はシラバスどおりに進められましたか」という内容が含まれていることが多い。なぜ、この項目が含まれているのだろうか。シラバスには、事務連絡文書、契約書、学術情報ソース、学習手引書の役割があるが、この国でシラバスが導入されて、シラバスは学生と教員の契約書であるということが強調されたため、「この授業はシラバスどおりに進められましたか」という質問が生まれたのではないかと推察される。

シラバスの本質は、田中浩朗によると、**受講生がある授業科目の単位を取得するためになすべき学習(1単位当たり標準45時間に学習)を主体的に進める上で必要な情報をまとめた“学習の手引き”**であると捉えられている。この観点こそ、この国の大学関係者のシラバス理解に欠けたものではないだろうか。それは、[コラム:SF「電話帳の『謎』」](#)に述べたように、「シラバス」と呼ばれていた、コースの初めに教員が受講者だけに配布する詳細な文書と、「bulletin」とか「course description」と呼ばれる、その年度に大学で開講されるすべての授業の内容を簡潔にまとめた冊子とを取り違えたことに起因している。

では、どうすればいいのだろうか。今われわれが「シラバス」とよんでいるものを授業要綱と本来のシラバスに分けようではないか。授業要綱は学生、特に新生の科目選択に必要な情報を与える小冊子にしよう。シラバスにはセンターが開発したウェブ上の[「ゴーイングシラバス」](#)を活用しよう。初回の授業では、[授業計画]のプリントアウトを配布して、授業の展開をきちんと説明しよう。授業の進行過程で変更が必要になったら、修正した[授業計画]を再配布すればよい。

シラバスの本質を理解するならば、「この授業はシラバスどおりに進められましたか」ではなく、「この授業の学習にシラバスは役立ちましたか」と聞くべきではないだろうか。

コラム: 学生による授業評価からわかる教授法ランキング

閉じる

学生による授業評価は多くの大学において実施されるようになりました。授業評価のアンケート結果は、教員や組織へのフィードバック情報だけでなく、教授法が学生の成果に与える影響の大きさも明らかにします。アメリカでは、教授法と学生の成果との相関関係を明らかにした研究がたくさんあります。フェルドマンは30以上にわたるこのような実証研究をレビューし、個々の教授法と学生の成果との相関係数の平均を算出しました。学習成果に影響の大きい要因を順に示したものが以下のものです。アメリカの大学教授法ランキングと見てもいいのかもしれませんが。

教員の準備、コースの設計	.57
説明の明確さと理解しやすさ	.56
授業目標にそった授業	.49
授業による学習成果の理解	.46
教員による知的刺激	.38
学生への高い水準への動機づけ	.38
質問の促進と他の意見への寛大さ	.36
教員への会いやすさと親切さ	.36
教員の話し方のスキル	.35
授業目標と履修要件の明確さ	.35
教員の科目内容の理解度	.34
クラスの水準や進捗への理解	.30
教員の熱意	.27
評価における教員の公正さ	.26

参考文献

Feldman, K. (1997) "Identifying Exemplary Teachers and Teaching: Evidence from Student Ratings" in Perry, P. and Smart, J. (Eds.), *Effective Teaching in Higher Education: Research and Practice*, Agathon Press.

コラム：アメリカで最も有名な大学教授法

閉じる

おかげさまで、この『成長するティップス先生』は、ホームページへのアクセスも多く、書籍としても6刷まで増刷され、日本の大学ではある程度知られるようになってきました。しかし、アメリカで最も知られている大学教授法から見るとまだまだのようです。

アメリカで最も有名な大学教授法は、チックリングとガムソンによる「優れた授業実践のための7つの原理」です。たった5ページに書かれたものですが、その小冊子は全米をはじめ英国やカナダの大学関係者間で1年半のうちに15万冊の注文があったそうです。また、2年後に出版されたチェックリストも合計で50万部以上の注文があったそうです。

なぜ、これほどまでに普及したのでしょうか。その理由のひとつとして開発コンセプトがよかったことがあげられるでしょう。これまでの教育学研究の成果を踏まえ、学問分野や大学の属性を超えた原理を、誰でも覚えられるように7つに集約し、5ページという短い論文にまとめたことが、大学の教育現場のニーズに合っていたと言えるでしょう。

「7つの原理」の詳しい内容については下記の文献などで見ていただきたいのですが、ここでは7つの教授法の原理を紹介します。

1. 学生と教員のコンタクトを促す
2. 学生間で協力する機会を増やす
3. 能動的に学習させる手法を使う
4. 素早いフィードバックを与える
5. 学習に要する時間の大切さを強調する
6. 学生に高い期待を伝える
7. 多様な才能と学習方法を尊重する

参考文献

Chickering, A. and Gamson, Z. (1987) Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education, AAHE Bulletin, March 1987, a publication of the American Association of Higher Education.

中井俊樹・中島英博(2005)「優れた授業実践のための7つの原理とその実践手法」『名古屋高等教育研究』第5号近刊予定

コラム：社会人大学院でどう教えるか

閉じる

私は30代後半の助教授です。大学職員のキャリアアップを目的とした社会人大学院で教えています。一番年上の学生(50代後半の管理職)と一番年下の学生(20代)は親子のような年齢差がありました。

このコースは従来型のアカデミックな大学院と違い、学んだことを仕事にすぐに活用できるような内容・方法が求められていると考えていました。だから、授業目標の立て方、課題の与え方、成績評価の方法などをできるだけ具体的・実践的に設計し、单元ごとに「どのような解決策・対応策が望ましいか」について検討・提案するなど問題解決型の授業づくりをめざしました。成人教育の方法論についての文献も参考にしました。

ところが、実際に授業を進めてみると意外なことがわかりました。社会人学生は毎日が実務の連続なので、むしろ基本的な考え方や基礎知識を必要としているようです。仕事が忙しいからといって、課題を手加減してほしいとは思っていないようです。彼らの意見を聞いてみました。

「社会人学生は実務経験が豊富な反面、基本セオリーを知らないことが多いから、とにかく基本をきちんと教えてほしい。そういう意味では実践的な知識を得たがる若い学生とは反対かもしれません。必要な課題はどんどん課してくれて構わないけど、何がポイントなのかを明確にしてほしい。お金を払った甲斐があったと思いたいですね。」

「課題をフィードバックする機会が与えられないと、ついつい怠けてしまう。よくないことはわかっているんだけど。課題の成果を求められた方が、取り組みざるをえなくなるね。先生が年上か年下かは、気にしてないです。基礎的なことを勉強するのはとても楽しいですよ。毎日が発見の連続です。」

学内教職員のサポート

高等教育研究センターは、「ティーチングティップス」や「ゴーイングシラバス」など、授業改善支援ツールの開発をはじめとして、名古屋大学やその他の大学の教育改善のために多様な活動を行っています。これまでの活動内容をふまえて、今後はさらに活動の範囲を拡大するとともに、学内のみなさんの授業改善に関するご要望に対応したきめ細かなサポートを提供することをめざしています。以下に、その活動の内容を紹介します。

- [FD講演・ワークショップに講師を派遣します](#)
- [ゴーイングシラバスの利用をサポートします](#)
- [授業の悩みの相談にのります](#)
- [メンターを紹介します](#)
- [『名古屋授業研究』に投稿しませんか](#)
- [授業を見学させてください。授業と一緒に見学しませんか](#)
- [高等教育研究センターの各種セミナーに参加しませんか](#)
- [高等教育研究センターのニューズレターをご覧ください](#)

FD講演・ワークショップに講師を派遣します

学部・学科等で授業改善のためのFD講演・ワークショップ等の実施される場合には、必要に応じて高等教育研究センターから講師・チューターを派遣します。センタースタッフでは対応できないテーマもあるかもしれませんが、その場合でもご要望に応えられる適当な方をご紹介します。必ずしも学部・学科単位でなくても、先生方の人数が3～4人程度まとまっていれば対応します。まずは高等教育研究センターにご相談ください。

対象: 名古屋大学のすべての教職員

担当: 夏目(当センター教授)

TEL: 内線5693

Email: natsume@cshe.nagoya-u.ac.jp

[戻る](#)

ゴーイングシラバスの利用をサポートします

「ゴーイングシラバス」は、大学教員の授業デザイン力の向上と授業支援を目的として制作されたシステムです。『成長するティップス先生』の内容などをふまえながら、ウェブ上で実際にシラバスを作成できるようになっています。ウェブ上に提示される画面にしたがって、必要事項を書き込んでいくことにより、よい授業を行う上で不可欠なシラバスを、無理なく作成できるように設計されています。

「ゴーイングシラバス」の具体的な内容や、これを使用した授業の記録などは、下記のページでご覧になれます。

[ゴーイングシラバスのページ](#)

ゴーイングシラバスを上手に活用するための「コースウェア」もオンライン上で利用できます。しかし、これだけではよくわからない、詳しい説明がほしい、使用のための教授法的・技術的サポートが必要という方には、センターのスタッフが研究室まで直接ご説明に伺います。まずは、高等教育研究センターまでご連絡ください。

対象: 名古屋大学のすべての教職員
担当: 中井(当センター助教授)
TEL: 内線5385
Email: nakai@cshe.nagoya-u.ac.jp

[戻る](#)

授業の悩みの相談にのります

「シラバスがうまく作れない」「学生が授業にのってこない」「学生の私語が多くて授業にならない」など、授業について悩みを抱えていらっしゃる先生方は少なくないと思います。どの教員も多かれ少なかれ悩みを抱えながら、授業をしているのが実情でしょう。

そのような場合には、一人で悩まずに、高等教育研究センターにご相談ください。授業改善の取り組みは一人でもできますが、できるだけ多くの方々、とくに同じような悩みを抱えた方々と積極的な議論や共同の取り組みを行うとより効果的にできます。多くの方との議論によって多くのヒントを得ることができますし、授業改善の意欲も高まります。

授業でお悩みの場合には、まずは気軽に高等教育研究センターにご相談ください。連絡先は次のとおりです。

対象: 名古屋大学のすべての教職員
担当: 夏目(当センター教授)

TEL: 内線5693

Email: natsume@cshe.nagoya-u.ac.jp

[戻る](#)

メンターを紹介します

授業の悩みについての相談だけでなく、授業改善のための適切かつ具体的なアドバイスを必要とする場合には、高等教育研究センターが適当な指導・助言を行うメンターをご紹介します。

また、センターでは、メンターとして、学内の教員に指導・助言をしてくださる方を募集しています。ご自身で授業改善の取り組みをされていらっしゃる方、その取り組みで得た知見をお持ちの方、それを積極的に他の方に伝えようとお考えの方は、ぜひメンターになって、名古屋大学の授業改善にご参加ください。

メンターを必要とされる方、メンターになってもよいと考えておられる方、まずは気軽に高等教育研究センターにご相談ください。連絡先は次のとおりです。

対象: 名古屋大学のすべての教職員

担当: 夏目(当センター教授)

TEL: 内線5693

Email: natsume@cshe.nagoya-u.ac.jp

[戻る](#)

『名古屋授業研究』に投稿しませんか?

高等教育研究センターでは、『名古屋高等教育研究』という研究紀要を毎年編集・発行しています。高等教育に関するホットなテーマによる特集論文のほか、学内の教員、センターの客員教授やスタッフ等による研究論文などで構成されています。

『名古屋高等教育研究』は、高等教育に関わる幅広い問題を研究対象とする論文を取り上げてきました。そのため、各大学における教育改革の要ともいべき授業実践に重点を置いた編集という点が、やや不十分であったことは否めません。そこで、高等教育研究センターでは、『名古屋高等教育研究』に加えて、新たに『名古屋授業研究』(仮称)の編集・発行を予定しています。

授業についての本格的な研究はもちろんのこと、日々の授業について疑問に感じていること、授業で改善したこと、将来的に改善してみたいことなど日頃授業について素朴に感じていることを、ぜひ論文にまとめて、『名古屋授業研究』に投稿してください。ご投稿を希望される方は、下記までご連絡ください。

[名古屋高等教育研究のページ](#)

対象: 名古屋大学のすべての教職員
担当: 中井(当センター助教授)
TEL: 内線5385
Email: nakai@cshe.nagoya-u.ac.jp

[戻る](#)

授業を見学させてください。授業と一緒に見学しませんか

高等教育研究センターでは、すぐれた授業とは何か、それを成立させるための条件とは何かについて研究しています。この研究のために、また『成長するティップス先生』の内容を改訂するために、すぐれた授業を行っている学内外の先生方から積極的に学ぶために、授業を見学させていただきたいと考えています。すでに一部の先生方からご協力をいただいています。

また、高等教育研究センタースタッフと一緒に授業見学を希望する方を募集しています。日々の授業を改善するための手っ取り早い方法は、他の教員の授業、それもすぐれた授業を見学することです。名古屋大学にはそのような授業がたくさんあるはずで、それを一緒に発掘し、学んでみませんか。

授業見学でご協力いただける方、また、ご一緒に見学をしてみようとお考えの方は、下記までご連絡ください。

対象: 名古屋大学のすべての教職員
担当: 中井(当センター助教授)
TEL: 内線5385
Email: nakai@cshe.nagoya-u.ac.jp

[戻る](#)

高等教育研究センターの各種セミナーに参加しませんか

高等教育研究センターでは、各種のセミナーを開催しています。さまざまな角度から高等教育を研究している方や、高等教育改革を実践している方などをお招きして、お話を伺う招聘セミナー（ほぼ毎月開催）、センターの客員教授としてお招きした国内・外国の研究者による客員セミナー（年3回程度）などです。これらは今後の名古屋大学の教育のあり方を考える上で重要な示唆に富むものになるように努力しています。

高等教育に関心をお持ちの方は、ぜひ気軽にご参加ください。資料を用意する関係で、事前にご連絡をお願いしています。また、メーリングリストに登録されますと、毎回確実に開催のご案内を差し上げます。メーリングリストへの登録は、下記の連絡先で受け付けております。また、セミナーで取り上げるテーマについて、ご意見やご要望ありましたら、遠慮なくご連絡ください。

対象: 名古屋大学のすべての教職員
担当: 中島(当センター助手)
TEL: 内線5384
Email: seminar@cshe.nagoya-u.ac.jp

[戻る](#)

高等教育研究センターのニュースレターをご覧ください

高等教育研究センターでは、年3回、ニュースレター（『高等教育研究プロファイル』）を発行しています。国内外の高等教育をめぐる動き、学内教員や学外研究者などによるエッセイ、高等教育研究センターの活動報告など、内容は盛りだくさんです。ニュースレターは印刷物として発行していますが、以下のページでもご覧になれます。

[ニュースレターのページ](#)

[戻る](#)

資料2 ミーティング議事録

2004.08.23

ティップス改訂に向けて：ブレインストーミング

中井

今日の目標

- ・ ティップス改訂に関するブレインストーミングを始めることによって、どちらに向かって改訂するのか、そしてそのためにどのような投入が必要なのかの計画を立てるためのとっかかりをつかむ。

私のティップス観 - ブレインストーミングのための燃料

- ・ 開発サイドが教授法の原理と実践ノウハウを構造化していない(図1)。
- ・ 授業デザインのコンセプトは開発時より深まっているが反映されていない。
- ・ 手法化されている部分が少ない(例：どうやって授業目標を設定するのか)
- ・ すぐ使える例が少ない(シラバスの例はこのままでいいのか)
- ・ 学生の視点が弱い(学生の発達論、学生像の変遷、学生が成長することを喜びとしよう)
- ・ 成人学生に対するティップス(身体面、社会面、精神面で異なる学生、10章に追加?)
- ・ ウェブを使った授業改善のティップス(ITをどうやって授業改善のてこにするか)

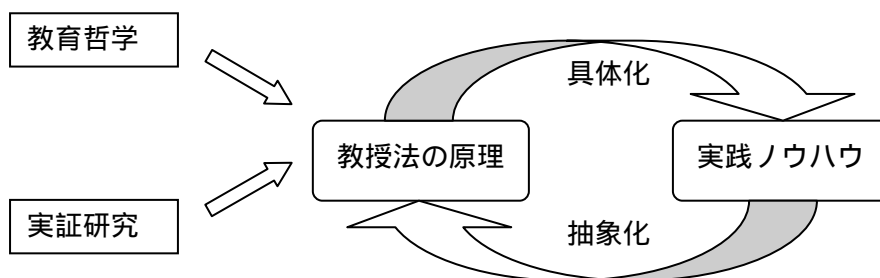
開発方法案(図1のどこから始めるか?)

- ・ 実践ノウハウの抽出(学内の授業を資源に)
- ・ 教育哲学(例：構成主義的学習観)や実証研究(学習成果に相関の高い要因)から教授法の原理の抽出
- ・ 教授法の原理と実践ノウハウの構造化

計画案に向けて

- ・ プロジェクト期間
- ・ 到達目標の設定(少しずつ成長させる?短期目標および長期目標)
- ・ 人とお金の投入(若手×人+アシスタント×人)

図1 授業の基本部分



2004.09.09

ティップス改訂計画案

中井

プロジェクト名 TIGER(TIps, GEAr up, Research)

進捗状況

- 2004.08.30 夏目先生との打ち合わせ
- 2004.09.07 臨時プロジェクトミーティング(中井・中島・青山)
- 2004.09.08 夏目先生との打ち合わせ

目標設定：3つのマイルストーン

- Ver. 1.2 完成 2004.12.01 まで
最終更新以降のセンターの成果(例:成人・IT)等を中心に取り込む
例:本文の修正、節の追加、コラムなどの追加、センター長のあいさつ
- 改訂プロジェクト報告書 2004.03.31 まで
アンケート、授業見学・インタビューなどの記録の保存
GP全体の進捗報告書の中でも可
- Ver. 2.0 1st Draft 2005.08.31 まで
新たなティップスの制作
実践ノウハウの収集、教授法の原理と実践ノウハウの構造化

活動

- 現行版のフィードバック(1000部配布アンケート) 2004.10.01 開始
- 実践ノウハウ・現場ニーズの収集(授業見学・インタビュー) 2004.09.09 開始

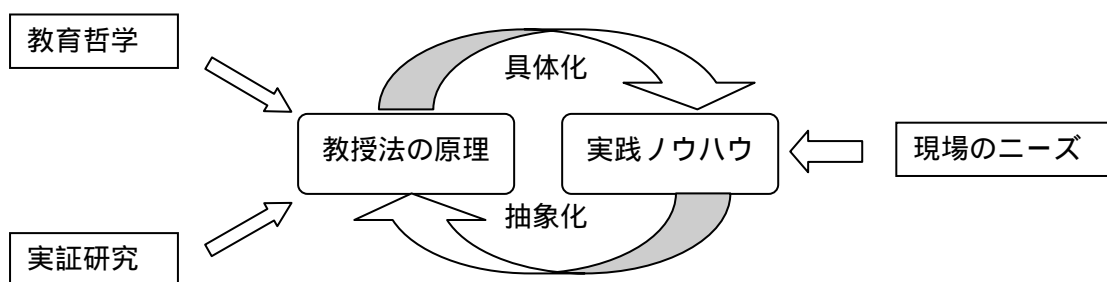
教授法の原理の精緻化
 Ver. 1.2 への改訂
 水曜ランチタイムに「虎の穴ミーティング」

2004.10.01 開始
 2004.09.09 開始

開発スタッフ

中井・中島・青山、夏目、アシスタント 1 名追加

図 1 授業の基本部分



2004.10.07

TIGER プロジェクト進捗状況 - TIPS, GEAr up, Research

中井

進捗状況

- 2004.09.22 虎の穴ミーティング (中井・青山)
- 2004.09.27 臨時虎の穴ミーティング (中井・中島・青山)
- 2004.09.27 臨時虎の穴ミーティング (中井・中島・青山・夏目・東)
- 2004.10.06 虎の穴ミーティング (中井・中島・青山・夏目)

目標設定：3つのマイルストーン

Ver. 1.2 完成	2004.12.01 まで
改訂プロジェクト報告書	2004.03.31 まで
Ver. 2.0 1st Draft	2005.08.31 まで

活動

現行版のフィードバック (1000 部配布アンケート)	2004.10.01 開始
実践ノウハウ・現場ニーズの収集 (授業見学・インタビュー)	2004.09.09 開始
教授法の原理の精緻化	2004.10.01 開始
Ver. 1.2 への改訂	2004.09.09 開始

授業見学

後期開講の3つの授業を対象 10.07 から開始

- 美術史特殊講義（木俣元一先生）火 4：対象学部・クラス（文以外）
教室（文学部 237）[開放科目]
- 中国語 3（丸尾誠先生）木 3：対象学部・クラス（文系 CH1）
教室（教養教育院 1C 講）[言語文化 I]
- 微分積分学 II（南和彦先生）木 3：対象学部・クラス（工学部 II 系）
教室（教養教育院 1A 講）[理系基礎科目（理系）]

1000 部配布アンケート

夏目先生を中心に進める

教授法の原理の精緻化

ジャーナル（研究ノート？）を目標にまとめる

今後の予定 虎穴に入らずんば虎子を得ず、Ver. 1.2 改訂を進める

10.07	2:00-7:00	虎の穴
10.20	11:00-7:00	虎の穴
10.27	11:00-1:00	虎の穴
10.28	2:00-7:00	虎の穴

2004.11.04

TIGER プロジェクト進捗状況 - Tlps, GEAr up, Research

中井

目標設定：3つのマイルストーン

Ver. 1.2 完成	2004.12.01 まで
改訂プロジェクト報告書	2004.03.31 まで
Ver. 2.0 1st Draft	2005.08.31 まで

活動

現行版のフィードバック（1000 部配布アンケート）
実践ノウハウ・現場ニーズの収集（授業見学・インタビュー）
教授法の原理の精緻化
Ver. 1.2 への改訂

授業見学

授業見学の実施

授業見学記録のフレームワークのドラフト完成

教育学部的場先生、柴田先生などに専門的知識の提供をいただく予定

1000 部配布アンケート

アンケートドラフト完成

発送先：全国国公立大学の教務担当者？

11.10 アンケートおよび宛先決定

教授法の原理と実践ノウハウの精緻化

ジャーナルを目標にまとめ中

中井・中島「教授法の原理に基づいた実践ノウハウ」

Ver. 1.2 への改訂

今月集中的に行う

コラムリストの作成

コラムの執筆

本文の修正（eラーニング、成人学生）

今月後半に改訂の目処を立てて黒田先生に「はじめに」を依頼する予定

企画会議のみなさんへの呼びかけ

ティップスのコラム書いてみませんか？

2004.11.25

TIGER プロジェクト進捗状況 - Tips, GEAr up, Research

中井

目標設定：3つのマイルストーン

Ver. 1.2 完成 2004.12.01 まで

改訂プロジェクト報告書 2004.03.31 まで

Ver. 2.0 1st Draft 2005.08.31 まで

Ver. 1.2 への改訂内容案

コラム

新たなコラムの執筆 10 個

古くなったコラムの修正

授業の基本

5章 魅力ある授業を演出する（eラーニング）

10章 学生の多様性に配慮する（成人学生）

「授業改善支援」（仮称）

名大の先生を対象とした「授業改善支援」（仮称）という新項目を加える
学内の講演、授業相談などできる範囲の支援を示す

みんなの広場

今回実施したアンケートを掲載し、フィードバックを求める

新着情報

「2004/??/?? 書籍版『成長するティップス先生』第6刷ができました」など
GPとりました、1.2になりましたなどできるだけ増やす

「ごあいさつ」

黒田センター長による改訂にあたっての挨拶

コラム

文字数 500-800 語程度

執筆者を記すかどうかは検討

コラム案

はじめてのシラバス（青山）

学生をほめてのばそう（中井）

まずは、学生といっしょに歩いてみよう（中島）

アメリカにおける大学教授法の7つの原理（中井）

学生は4年間の大学生活でどのように発達するの？（中井）

学生の学習に効果のある要因（中井）

インストラクショナル・デザインという考え方（中島）

SOTLという活動（中島）

スマートな目標とルンバな目標？（中島）

ケーススタディをやってみました（青山）

年下の先生から学ぶ学生の本音（近田）

X（夏目）

古くなったコラムの修正

カリキュラムのグンドデザインがなきゃ始まらない

カリキュラムが変わった 新規コラムへ（鳥居）

コースデザインを支援するツール

教官 教員へ修正

私の名大デビュー

内容が古い 新規コラムへ（中島）

授業の基本

5章 魅力ある授業を演出する

eラーニングを授業改善のてこにしようという内容と具体的な使用法

10章 学生の多様性に配慮する（成人学生）

成人学生の学習スタイルの特徴や効果的な教授法をしめす

授業改善支援

コンセプト

名古屋大学の教員に対してセンターができるサービスをしめす

サービス内容例

講演・ワークショップ
ゴーイングシラバス利用のサポート
授業見学させてください
授業の相談にのります
メンター紹介します
名古屋授業研究に投稿しませんか
センター招聘セミナー
 メーリングリストに加える
大学院授業へ来ませんか？

参考

<http://www1.umn.edu/ohr/teachlearn/>

<http://www.iec.ehime-u.ac.jp/iecweb/system/system/index.html>

役割分担と期限

執筆（12月2日）

コラム	中井・中島・青山・鳥居・近田・夏目
授業の基本	中井・中島
授業改善支援（仮称）	夏目・中井・中島・青山
みんなの広場	中井
新着情報	青山

最終検討（12月3日） 夏目・中井・中島・青山

挨拶執筆（12月6日） 黒田

ウェブ作成 tips012（12月6日） 中島・小林

承認（12月13日） センター企画会議

アップロード・公開（12月14日） 中島

現行のものを tips011、tips012 を tips に、リンク要注意

2004.12.13

TIGER プロジェクト進捗状況 - TIPS, GEAr up, Research

中井

目標設定：3つのマイルストーン

Ver. 1.2 完成	2004.12.20 まで
改訂プロジェクト報告書	2004.03.31 まで
Ver. 2.0 1st Draft	2005.08.31 まで

Ver. 1.2 への改訂内容案

コラム

新たなコラムの執筆 10 個（残り鳥居、黒田）

古くなったコラムの修正

授業の基本

5 章 魅力ある授業を演出する（eラーニング）

10 章 学生の多様性に配慮する（成人学生）

「学内教員へのサポート」

「学内教員へのサポート」という新項目を「みんなの広場」に加える

学内の講演、授業相談などできる範囲の支援を示す

「アンケート」

今回実施したアンケートを「みんなの広場」に加え、フィードバックを求める

新着情報

「2004/?? 書籍版『成長するティップス先生』第 6 刷ができました」など

「ごあいさつ」

黒田センター長による改訂にあたっての挨拶

Ver 1.2 公開に向けて

- ・ 本日は、改訂の主要な方向性についてチェックしていただきたい
- ・ 当初の予定より少し遅れているが、12 月 20 日には公開したい
- ・ 公開前にセンターのすべてのスタッフにチェックしてもらいたい
- ・ みなさんに時間をとっていただけるのなら検討会、なければ各自で改訂部分をチェックしてもらい問題がある場合中井まで連絡か？

2005.02.03

TIGER プロジェクト進捗状況 - TIPS, GEAR up, Research

中井

目標設定：3つのマイルストーン

Ver. 1.2 完成	2004.12.20 まで
改訂プロジェクト報告書	2004.03.31 まで
Ver. 2.0 1st Draft	2005.08.31 まで

Ver. 2.0 へ向けて

改めて開発メンバーを募りたい
第一回ミーティングの日程を決めたい

予定

数回のミーティングでブレインストーミングをして方向性の確認
ブレインストーミングの素材
 ティップスアンケートの結果
 『授業の道具箱』
 『優れた授業実践のための7つの原則』
名古屋大学の事例集の分析
授業見学の記録
私からの Ver. 2.0 の提案書
その他メンバーからの Ver. 2.0 の提案書

2005.03.09

TIGER プロジェクト進捗状況 - TIps, GEar up, Research

中井

目標設定：3つのマイルストーン

Ver. 1.2 完成	2004.12.20 まで
改訂プロジェクト報告書	2005.03.31 まで
Ver. 2.0 1st Draft	2005.08.31 まで

Ver. 2.0 開発メンバー

中井・戸田山・夏目・近田・中島・青山

主な進捗状況

2005.03.01 Ver. 2.0 開発に向けたブレインストーミング (中井・戸田山・中島・青山)
2005.03.01 ミニ会議 (中井・夏目・近田・中島)

報告事項

- ・ 中井から提案した日本版原則の開発という方向で概ね合意した
- ・ そのための開発工程やその他の課題に関しては中井から提案することになった (京都において TIGER プロジェクトの時間は確保済)

資料：ブレインストーミングの記録 (03.01)

ティップス 1.2 までに残された課題

- ・ アンケートで連絡の来た人にインタビューを行う（71人）
- ・ 授業見学から得たノウハウを報告書としてまとめる
- ・ アンケートのデータ集計
- ・ 学内教員のサポートを本格化する

ティップスアンケート結果速報

- ・ 評価が相対的に低い章立て第一回、時間外、多様性
- ・ 学生の視点の充実、大人数講義のノウハウ充実、が求められている
- ・ さまざまな授業日誌、社会人向け授業のノウハウ、読みやすくする工夫の追加はいろいろな
- ・ ゴーイングシラバスについて知りたいという声大きい

現行ティップスの課題

- ・ 内容が抽象的・実践ノウハウが少ない
- ・ 実例の充実

改訂の方向性

- ・ 今のものの充実化はどこまでいけるのか？
- ・ 対象者を変える（学問分野別・キャリア別・学習者別・ティップス上級者向け）
- ・ 発信方法を変える（ビデオ）
- ・ 別のものを作る
- ・ 何度も読み返すノウハウ集を目指すのか？（それは多くの大学がやろうとしている）

プロジェクトの手法について

- ・ 単なる授業見学やインタビューは意味がないのではないかと（教材例の提供をもらいにいくなど、目的を決めてアプローチする）

中井からの提案

- ・ 日本版7原則を作ったらどうか（並行してビデオを作るというのも可）
- ・ 7つは覚えやすく、実践ノウハウをまとめる枠組みになっている
- ・ 学生・教員・大学の三者の役割を示している（授業改善＝教師改善にしない）
- ・ 研究につながりやすい（効果の測定がしやすい）
- ・ ティップスの弱点を補強できる
- ・ 実践ノウハウが豊富
- ・ 少ない分量で出せる（配布が容易）
- ・ 日本で誰も手をつけていない
- ・ 教員からのニーズは高い（FD講演会などの反響）
- ・ アメリカの経験を生かすことができる

開発プロセス

- ・ アメリカ版 7つの原則にそった実践ノウハウのプール + その他のプール (名古屋の事例集・授業見学)
- ・ 実践ノウハウの精選
- ・ 7つでほんとにいいのかを決定
- ・ 7原則センターの訪問
- ・ アウトプットの形の決定

議論

- ・ 中井案に概ね賛成、日本版 7原則の開発で合意
- ・ 今あるものがほったらかしになっている状況にはしたくない
- ・ 今のティップスはツールキットとして育てる (つまみ食い用)
- ・ 名古屋大学の状況 (事例・データ・テンプレート (アンケートなど)) を追加していく
- ・ 7つの原則は「成長しない」?
- ・ $7 \times 3 \times 10 = 200$ 以上のものをもらったらうんざりする
- ・ 冊子版とウェブ版で目的を変えることも可
- ・ 4冊を1冊にまとめるか、4冊のまま出して迫力を出すか、4冊まとめてとっておける形をつくれればいい
- ・ スタディティップスのプロジェクトとの協力体制
- ・ 楽になる情報を提供するのではなく、内発的な動機づけで取り組める情報の提供をする
- ・ ちょっとの努力で、学生も喜んで自分も満足する情報を出す

次回の予定

- ・ 次回、京都出張時にプロジェクト骨子を決定 (それまでにできる作業はすすめる)

2005.03.22

TIGER プロジェクト進捗状況 - TIps, GEar up, Research

中井

目標設定：2つのマイルストーン

改訂プロジェクト報告書	2005.04.28 まで
名大版 Principles	2005.08.31 まで

開発メンバー

中井・戸田山・夏目・近田・中島・青山

本日の作業メニュー

8月までの最終開発物の具体化
 それまでの作業工程と役割分担
 アメリカ版の教員チェックリストの検討（時間があれば学生・大学用も）
 残された課題への対応

8月までの到達目標

名大版 Principles Ver.1.0 の完成

名大版 Principles のコンセプト

専門分野や授業形態を越えた原則と具体的な実践ノウハウを示す

学生・教員・大学の役割と責任を示す

教育学の専門用語を必要としない

覚えやすく使いやすくインパクトのある配信方法で提供する

名大版 Principles の構成

名大版 Principles の説明

学生用チェックリスト(7)とノウハウプール(30)

教員用チェックリスト(7)とノウハウプール(30)

大学用チェックリスト(7)とノウハウプール(30)

配信方法：チェックリストは冊子。ウェブではノウハウプールも公開

名大版 Principles Ver.1.0 への道のり

(1) 教員用チェックリストとノウハウプール

アメリカ版チェックリスト(7) (徳島原稿) 済

アメリカ版ノウハウプール(30) (名大原稿) 済

名大版事例(15) (事例集から原則別に分類) 04.15

アメリカ版チェックリストの適用可能性アンケート(+/-) 04.10

以上のデータおよびセンター枠ノウハウを加えリスト作成 04.30

それぞれの有効性を有識者チェック 05.31

チェックリストとノウハウプールの完成 06.30

(2) 学生用チェックリストとノウハウプール

以下のデータをもとに作成

アメリカ版チェックリスト(7) (徳島原稿) 済

ゴンザガ大学チェックリスト(+x) 済

名大版事例(x) (ST 報告書から原則別に分類) 04.15

アメリカ版チェックリストの適用可能性アンケート(+/-) 04.30

以上のデータおよびセンター枠ノウハウを加えリスト作成 05.31

それぞれの有効性を有識者チェック 06.30

チェックリストとノウハウプールの完成 07.31

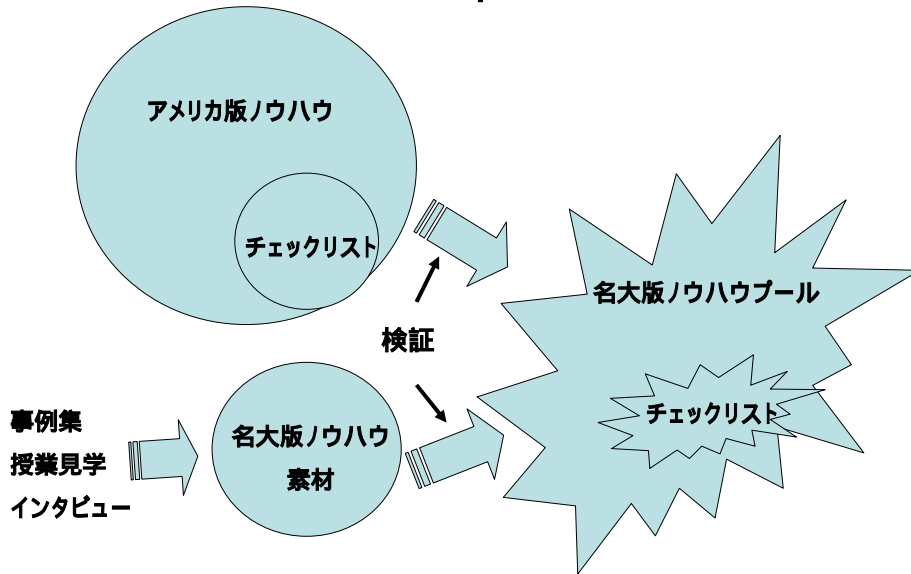
(3) 大学用チェックリストとノウハウプール

アメリカ版チェックリスト(7) (徳島原稿) 済

ゴンザガ大学チェックリスト(+x) 済

アメリカ版チェックリストの適用可能性インタビュー(+/-)	04.10
以上のデータおよびセンター枠ノウハウを加えリスト作成	04.30
それぞれの有効性を有識者チェック	05.31
チェックリストとノウハウプールの完成	06.30
(4) 3者の役割の確認と相互の関連を調整し、修正、完成	08.15

名大版Principlesに向けて



アメリカ版の教員チェックリストの検討

別紙アンケートに教えてください。

ディスカッションのポイント：名古屋大学への適応可能性

アメリカ版の学生・大学チェックリストの検討

徳島原稿をもとに同様のアンケートを実施

時間がなければ次回に持ち越し

名大版 Principles Ver.1.0 への課題

教員用アンケートをどうやって配るか？

学生用アンケートをどうやって配るか？

大学用アンケート・インタビューをどうやってするか？

そもそも7つでいいのかの議論をどの時点ですか？

この最終成果を何と呼ぶか？

この最終成果と現状のティップスとの関係をどうするのか？

定期的な開発ミーティングの設定

名大版 Principles Ver.1.0 開発に関わるアウトプットと構想

中井俊樹・中島英博「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」『名古屋高等教育研究』第5号
中島英博・中井俊樹「優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト」徳島大学『大学教育研究ジャーナル』第2号
中井俊樹・中島英博・近田政博「学生の学習参加度を高めるための学生・教員・大学の役割 - 「優れた授業実践のための7つの原則」の適用可能性に関する考察」日本高等教育学会第8回大会
大学教育学会への投稿
スタディティップスへの基礎的資料
名大版 Principles Ver.1.0 の適応可能性の調査
eラーニングにおける Principles (情報メディアセンターとの共同、着手済)
大人数授業、成人学生、大学院生用の Principles の開発 (構想中)
開発報告書

その他の残された課題への対応

アンケートでインタビューをOKしていただいた人への対応 (71人)
1.2までの改訂と作業を報告書としてまとめる (下に詳細)
アンケートのデータ集計 (中島・青山)
学内教員のサポートを本格化する
並行してビデオを作るか

報告書

スケジュール：各自担当原稿完成4月22日、発行4月28日
タイトル：『「成長するティップス先生」の記録 2004.08-2005.03』
体裁：『「成長するティップス先生」の記録 2001.04-2002.03』に準じる
編集：中井
編集方針：記録をきちんと残す、オープンドアで投稿歓迎
構成 (タイトルは仮)：

はじめに

- 1 バージョン1.2の開発 (中井)
- 2 ティップスアンケートの集計結果 (中島)
- 3 ティップスアンケートの自由記述の結果 (青山)
- 4 授業見学からの知見 (夏目)
- 5 アメリカのティップス (鳥居)

資料

バージョン1.2で改訂した部分 (中井)、ミーティング議事録 (中井)、授業見学記録 (中島)、ティップスアンケート自由記述全体 (青山)

資料3 授業見学記録

1. 全学基礎科目 言語文化

1.1 基本情報

対象授業 中国語3(木曜3限、1C教室 文系学部1年生対象)

対象期間 2004年度後期

担当教員 丸尾誠(名古屋大学大学院国際言語文化研究科 助教授)

授業見学者 夏目達也・青山佳代

授業の特徴と形態

中国語3は、全学基礎科目のなかの「言語文化」というカテゴリーにある科目であり、前期の中国語1の授業の後に位置づけられる授業である。中国語3は学部別に22の授業が開講されており、授業概要は理系・文系のそれぞれで共通したものがつくられている。教科書や参考書も理系・文系のそれぞれで共通したものを活用している。担当教員は、15人ほどである。

丸尾氏によるこの授業は、板書と説明を中心とした授業である。受講者数は約30人である。

授業の概要(名古屋大学『全学教育科目要覧 上巻』より抜粋)

本授業の目的およびねらい

中国語3は、中国語1の継続で、同じ教科書を用い、引き続き発音を重点的に練習しながら、初歩的な文法、特に各種の文型・表現方法など中国語の基礎をしっかりと習得させることが本講義の目的である。

履修条件あるいは関連する科目等

特になし

成績評価の方法

平常点および期末テストによる

授業内容

中国語1で主として、411の音節を、声調を伴って正確に発音できる為の訓練をしてきたが、この中国語3では、それを固めるとともに、初歩的な文法を一通り仕上げるように、授業は進められていく。中国語1よりも何度の高い文法的事項 “能、可以、会” など可能を表す助動詞、程度補語、数量補語、方向補語、受身文、処置式文、謙語式文、存現文、進行・持続・経験など動詞の態を習得し、さらに口と耳の訓練を多くして、2年次へ進むために必要な基礎能力を養う。

授業上の注意

- ・ 最初の授業でガイダンスを行います。
- ・ 参考書、辞書についてはガイダンスで説明します。
- ・ 初級中国語の最重要ポイントは発音です。十分な時間をかけて練習を繰り返します。
- ・ 再試験は定期試験では合格点に達しなかったが、再試験においては合格の可能性があると担当教員が判断した場合に行います。

教科書

董燕・遠藤光暁(2002)『北京物語』朝日出版社

参考書

必要に応じて授業で紹介する

1.2 授業見学の記録

第一回授業(2004年10月7日、夏目・青山)[受講者32名](欠席者、遅刻者なし)

	カテゴリー	記録
授業前	その他	・ 授業に臨む前に学生は準備をしているか? 教科書は出ている。幾人かはテキストに目を通してている。
導入	アイスブレイキング	上海グランプリ、サッカーなど中国で開催されたイベントの解説
展開部	ヒアリング	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員によるナチュラルスピード (今日は木曜日です。Jintian xingqi si.) (わたしは鈴木一朗です。Wo jiao Lingmu Yilang.) ・ 発音の難しさ、発音を重要視することの解説 教員の発音ののち、学生一人一人に発音させ、その場で矯正する
	学生の参加 「語学を学ぶ意義、学び方」を解説	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「なぜ中国語を選択したのか?」を学生へ発問 ・ 主専攻を東洋史にしたいから、ピンインが難しい ・ 姉の影響、発音が難しい <p>教員は、自分の選択動機よりも学生の選択動機の方がしっかりしていると発言</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「重慶における日本人サポーターにたいする行動」について解説 中国人、日本人とも個人レベルではうまくいく

	前期の復習	<ul style="list-style-type: none"> 子音の発音練習 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>【板書】</p> <p>bo - po mo fo</p> <p>de - te ne le</p> <p>ge - ke he</p> <p>ji - gi xi</p> <p style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">zhi - chi shi ri</p> <p>zi ci si</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 5px; display: inline-block;"> 無気音・有気音を 対照的に表記 </div> <div style="margin-left: 20px; margin-top: 20px;"> この子音は難しい。したがって、授業終了 10 分前に各自に発音させ、できた人から帰れる。 </div>
	その他	「どうやったら中国語がうまくなるのか？」 ・シュリーマンのロシア語修得方法 ・声に出して修得することの大切さ、文章を暗記することの大切さ
	課題	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ol style="list-style-type: none"> 1. これ誰の？ 2. 君にこれあげるよ。 3. 君、お兄さんいるの？ 4. 彼、どこにいますか？ 5. 彼はアメリカ人ですか？ 6. この本は高い。 7. 今、何時？ 8. 彼は香港人でしょ？ </div>
まとめ	学習環境	[ルールづくり] ・出席（欠席 4 回で試験を受ける資格なし） ・遅刻（遅刻 3 回で、1 回欠席。30 分以上遅刻で欠席 1 回とカウントする） ・発音を重視（どんなくだらない発音でも教えます!!）

第二回授業（2004 年 10 月 14 日、夏目・青山）

	カテゴリ	記録
授業前	その他	<ul style="list-style-type: none"> 授業に臨む前に学生は準備をしているか？ 教科書は出ている。幾人かはテキストに目を通してている。
導入		<ul style="list-style-type: none"> 出席をとる（中国語で各自を呼ぶ）
		<ul style="list-style-type: none"> 課題の確認 * 「説明が早かったらとめてください」 * 「字の大きさ、こんな感じでいい？」 * 「君、上手いんだからもっと大きな声でいわなきゃもったいないよ」 * 「もし、後から質問があったら個人的に来てください」

展開部	学生の参加 (発音練習)	個人カード(発音診断カード)の活用 *ひとりに1シート用意されている。大きさはA4を四分の一にしたぐらいのもので、教員が学生の発音を聞いて、その学生の発音で注意すべき点を列挙し、学期終了時に学生へ返却する。 *今学期の発音の問題点を学生自身が振り返ることができる。 *テスト、成績とは全く無関係 -2回読む:1回目より2回目のほうがスピードアップ(スピードが早いほうが中国語らしい)
	解説	(テキスト p.37) 文法説明「要」 要 動)必要とする、欲しい 助動)~したい、~するつもりだ
	その他	北京の地図を回す(地図は、現地の町の地図売りから購入) ・中国に旅行に行くさいに注意することーウエストポーチは危険
	学生の参加 (発音練習)	・テキスト(P.36)をひとりひとりに読ませる 個人カード:発音診断カード記入 ・テキスト(P.37)をひとりひとりに読ませる 個人カード:発音診断カード記入
まとめ		・次回からは授業のスピードを少し上げることを提案

第三回目授業(2004年10月21日、夏目)(29人、遅刻者なし)

	カテゴリー	記録
授業前	その他	・授業に望む前に学生は準備をしているか? 教科書はでている。幾人かはテキストに目を通してしている。 ・学生どうして互いに学習をしている(3~4人グループで)。 ・教員は、ホワイトボードの色がでるかどうかのチェック
導入		出席をとる(学生が中国語で自分の名前を発音する):発音について修正しながら進める。「うん、できてる」「そう、やればできるじゃない」「うん、あっている」
展開部	学生の参加 (課題)	・課題を出して、それを学生にさせる。学生は前に出て解答を板書。 「お店はここから遠い」 ・教員「課題の解答をみんなで読むよ」:教員が模範を示しながら、学生に発音させる。一部の発音について若干の注意とコメント。 ・教員「質問はあるかな?」
	アイスブレイキング	・<余談:姓名について> 中国人の姓のほとんどが5種類の姓でカバーされることを紹

		介する。 例： 陳（チェン） アグネスチャン
	解説	<p>（テキスト p.38～）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・板書： （板書の文字について）教員「読みにくいところがあれば言ってください」 ・英語を例に出して、比較級について説明： 昨日は deha, 「私は彼ほど背が高くない。」
まとめ	学生の参加 （発音練習）	<p>テキスト（p.38）の文章全部を全員で復唱する。 その後に学生に復唱を指示。「個別に練習をしてください。」「小さい声でも結構です。」</p> <p>→ その間、教員は机間巡視をしながら発音をチェック・調整。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・約2分間。 ・1行目を3人の学生に発音させる。 → 次に全員でいっせいに発音 ・次ぎに第2文を読ませる。 <p style="text-align: center;">* * *</p> <p>個人カード（発音診断カード）の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個別ノートを見ながら、適宜コメント。 「先週は駄目だったけれど、今日はいいね。」「うまい、まるでテープを聴いているようだ。」 「先週は4声がだめだったけど、今日はできている。」「うん、完璧だ。」 「○○さん、そこ読んで。先週、そこができなかった。」 <p>その後全員で</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個別に発音。 「個別ノートに基づきながら、コメント」 ・「まず読んで、次に意味を言ってください。」 → 学生の発表について、まずほめる。次に簡単な解説。 ・最後に練習問題 「発音ができた人から帰っていいですよ。」

第四回授業（2004年10月28日、青山）（29人、遅刻者なし）

	カテゴリ	記録
	ー	
授業前	その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業に臨む前に学生は準備をしているか？ 教科書は出ている。幾人かはテキストに目を通してしている。 ・ 学生どうしてお互いに会話をしている。（3~4人グループで） ・ 教員は、ホワイトボードの色がでるかどうかのチェック

導入		・出席をとる（ニーハオのバリエーション）
	アイスブレイキング	・最近の中国での話題
展開部	学生の参加（発音練習）	・テキストの音読 ・「これいくら？」の発音
	出席確認	・教員は日本語で学生を呼ぶ 学生は自分の名前を中国語で答える （できたか、できなかったかは、あとで教員が個人的に修正する 「できたかどうかは、後でしか分からない。楽しみにしててね」
	学生の参加（課題）	・学生に解答させている時間を活用して、出席確認時の発音修正を教員が行う。
まとめ		

第五回授業（2004年11月4日、青山）（29人、2名欠席、遅刻者なし）

	カテゴリー	記録
授業前	その他	・授業に臨む前に学生は準備をしているか？ 教科書は出ている。幾人かはテキストに目を通してしている。 ・学生どうしてお互いに会話をしている。（3~4人グループで） ・教員は、ホワイトボードの色がでるかどうかのチェック
導入	あいさつ	・中国語で挨拶
	学生の参加（出席確認）	・教員が中国語で学生の名前を呼ぶ。呼ばれた学生は、自分の名前を中国語で発音する。できなかったら、その場で矯正。
展開部	学生の参加（課題）	・テキストの答え合わせ ・テキストの音読（家で発音練習をすることが課せられている。ひとりずつあて 個人カードへの記入）
	その他（話題提供）	・中国でのディスカウントの仕方について
	解説	・文法解説（テキスト p.42）：途中でひとり寝ちゃいました。
	学生の参加（発音練習）	・テキストを全員で読んだ後に、学生が3分ほど個人で発音練習をする（積極的に練習している） この間、教員は机間巡視（学生が気軽に教員に質問できる雰囲気ができている）

まとめ	学生の参加 (次回までの課題)	
	次回の授業の案内	今回は重要かつ、面倒な単元であることを提示

教員へのインタビュー項目

<p>講師の情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 中国への留学経験あり <p>授業の特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ たんにテキストだけに頼るのではなく、テキストは補助教材として活用している ・ 文法も大切にしているが、なによりも発音を重視している。 発音診断カードの活用 <p>説明の仕方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の冒頭に中国に関する時事問題が話される ・ つねに発音がうまくなるように、発音練習が多い。さらに、発音がうまくなるように学生を常に励ましている点が特徴

1.3 抽出されたティップス

授業デザインのティップス

- * 評価、出席・欠席に対する取り扱いに関する約束事の確認。
第1回に確認する。
- * 語学学習の動機の例を紹介。
強い動機 = 直接的、実利的動機を持つことの大切さを強調。
- * 重要なポイントを繰り返して強調。定着を図る。
- * 中国語の文章をナチュラル・スピードで読み上げる。「理解できた人」
学生の能力の簡単な評価；「今のが分かった人？」
2回目はややスピードを落として、「今のが分かった人？」
到達目標の提示、教員の能力の紹介、自分の能力評価の評価、相対的位置の理解

導入のティップス

- * エピソードを適宜挿入している。
 - ・ エピソードの内容は学習内容（この場合中国語）に関するもので具体的。脱線した感じを与えない。授業に対する学生の注意を途切れさせない。

学生を参加させるティップス

* ある程度厳しい課題を与える。

授業時間内にテストを課し、それができた者から退席。できない学生には居残りを指示。しかし、過去居残りをした学生は、かえってできるようになったと紹介。安心させるための配慮も忘れない。

プレゼンテーションのティップス

* 一つ一つのチャプターが短い。

メリハリをきかせて、学生に飽きさせない。

リズム、テンポをよくすること。

* 学生を個々に指名 インタラクション、緊張感を与える。

同レベル学力・能力の学生による発音を聞くことによる効果

- ・自分の水準の理解、難しい発音の確認
- ・学生の誤り、不十分さに対する教員の注意・指導
- ・教員の注意・指導の学生による内面化

* 個人カード：発音診断カードの活用

まとめのティップス

見学者の印象と改善へのコメント

* 話し方：

ソフトな感じ、威圧感を与えない。厳しさの中にもやさしさがみられる。

きめ細かなケア

適度なスピードがあり、学生に緊張感を感じさせる。

* 学生に対する個別ケアの宣言

「困ったらなんでも教えてあげる。」 学生の不安を取り除く。

* 学生の発音に対する指導：

学生をつねに励ます。不安をあおったり、意欲を減退させないような配慮。

* 学生が日に日に上達しているのが目に見えて分かる。それだけ学生のモチベーションを保つのが上手いんだと思う。

2. 理系基礎科目

2.1 基本情報

対象授業 微分積分学 II (木曜3限、1A教室 工学部1年対象)

対象期間 2004年度後期

担当教員 南和彦(名古屋大学大学院多元数理科学研究科)

授業見学者 中井俊樹・中島英博

授業の特徴と形態

微分積分学 II は、全学教育科目の理系基礎科目であり、前期の微分積分学 I の授業の後に位置づけられる授業である。微分積分学 II は学部別に 20 の授業が開講されており、授

業概要は共通したものがつくられている。教科書や参考書は担当教員によって異なる。
この授業は、板書と説明を中心とした授業である。受講者数は約 50 人である。

授業の概要（教員配布のシラバスより抜粋）

講義のテーマ

微分積分学。定量的な変化を記述し分析することの数学的手法が解析学であり、その中心が微分積分学である。微分積分学は数学および自然科学から発し、近年は社会科学にも広く応用されるようになった。微分積分学 II 通年講義の後半として主として多変数の微分と積分について解説し、その理論構成を理解するとともに具体的な計算に習熟することを目的とする。

関連科目

高校数学と微分積分学 I の内容を前提とする。通年で微分積分学 I とあわせて受講することを想定する。

講義内容

多変数の関数、極限、連続性、偏微分と方向微分、微分可能性、ヤコビ行列、連鎖律、多変数のテイラー展開、極値問題、ラグランジュの未定乗数法、重積分とその性質、重積分の計算、累次積分、変数変換、重積分と空間図形、ガンマ関数とベータ関数

教科書

「入門微分積分」三宅敏恒著 培風館

教科書と同じ記号を使いおよそ同じ順序で講義するが多少前後することがある。各人がこの教科書で勉強することを前提にはしない。

参考書

「解析入門 I」「解析入門 II」杉浦光夫著 東大出版会

「解析入門 I」「解析入門 II」小平邦彦著 岩波書店

「解析概論」高木貞治著 岩波書店

成績評価の方法

基本的に中間試験 40%、学期末試験 60%として得点を合算。レポートの結果をそれに加える。特に可と不可のボーダーラインにある場合には、得点だけでなく試験とレポートの詳しい内容にまで立ち入って考慮する。

講義予定

第一回 多変数の関数、極限、連続性

第二回 偏微分と方向微分、微分可能性についての準備的考察

第三回 多変数関数の微分可能性

第四回	連鎖律、多変数のテイラー展開
第五回	極値問題、ラグランジュの未定乗数法
第六回	陰関数定理について、全微分の応用
第七回	中間試験
第八回	重積分とその性質
第九回	重積分の計算、累次積分、変数変換
第十回	重積分とその応用
第十一回	グリーンの定理、ガウスの定理
第十二回	ガンマ関数とベータ関数(1)
第十三回	ガンマ関数とベータ関数(2)
第十四回	予備日
第十五回	予備日

状況に応じて内容を取捨選択あるいは追加、再構成する場合がある。また予備日を利用して途中で復習や演習をはさむ予定である。

2.2 授業見学の記録

第一回授業(2004年10月7日、中井・中島)

	カテゴリー	記録
授業前	その他	<ul style="list-style-type: none"> 受講生の多くは時間前に教室にいる。授業前に話をしている受講生は多い。 担当教員はほぼ時間通りに教室に入る。 インフォーマルな会話などはなし
導入	目標の提示 学生の参加 学習環境 授業デザイン	<ul style="list-style-type: none"> 5分くらいでシラバスにそって授業の概要を示す。 本日の内容を黒板にしめす。 授業内容でどの内容が難しいかを示す。 教科書と参考書の説明。意欲のある学生には難易度の高いものを。 授業後のオフィスアワーは、非常勤講師控室と自分の研究室で行う。 授業計画としては、復習や演習用に予備日を2日用意している。
授業本体	説明の仕方	<ul style="list-style-type: none"> 板書と説明を続ける授業。 チョークは白と赤がメイン。 大きくて読みやすい字。 図もわかりやすい。 声がこもるときがある。語尾が少し聞きにくかった。 なぜ定義が複雑なのかということを説明するために、わかりや

	学生の参加	<ul style="list-style-type: none"> ・ すい例を提示。 ・ 授業中は学生の目を見て話し、板書する。講義ノートは時々見る程度。 ・ 板書しながらの授業は講師に動きがある。 ・ 最もいい例を参考書の中から選ぶ。 ・ ある程度のかたまりごとに今日のポイントを説明。 ・ 簡単なものから複雑なものへ順に解説する。 ・ この後の授業内容との関連を意識させる。 ・ 参考書の著者の話などミニブレイクを挟む。 ・ 「物理ではね」、他の科目との関連を意識させる。 ・ 終了間際(今日はもうすぐ終わりですと言った直後)は少しざわざわした。 ・ 2人ほど遅れた学生。しかし、目もくれず。 ・ 1割くらいは授業には集中できず。 ・ 「他の距離の求め方もあるんだけど」と、さりげなく刺激を与える。 ・ 授業中、学生は静かにノートをとる。
まとめ	説明の仕方 その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 短い言葉で授業のまとめを板書する ・ 図示もする ・ 黄色のチョークで囲む。 ・ 最後の言葉が少しまどわせた。「一般的には違うんだけど、普通は・・・」しかし、誤解していたようには見えなかった。 ・ 数人が講師のところへ。

第二回授業 (2004年10月14日、中島)

	カテゴリー	記録
導入	目標の提示 プレゼン 学生参加	<ul style="list-style-type: none"> ・ なぜ今後の授業のために今日の内容が必要なのかを説明する ・ その際に全体での位置づけを解説：いい性質はないが、多変数の偏微分のための部品と考えればいい ・ 今日のテーマ(偏微分)を大きく板書 ・ 時間通りに教室に入り、すぐに図を書く(成績分布の図)、成績評価の説明(一気に学生が集中する) ・ 本当は絶対評価で評価したいが、2クラスあり、進路選択につかわれるのでルール(3割が優など)を守らないといけない、次善の策として相対評価をすると話す ・ 昔の大学教師のエピソードを話す(レポートさえ出せば優にするとって8割を優にして問題になった話): 学生がちょっと笑う
授業本体	説明の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 頻繁に現在の内容が全体のどこに位置づいているかに気づく説

	<p>学生に参加</p> <p>授業デザイン</p>	<p>明をする（今日は絵で説明する、次々回にチェーンルールをやる、チェーンルールで証明すれば簡単にできるのでのときまた説明する）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大事な話をする前は、黒板の前を歩き学生の顔があがってるか、ノートを取り終えて話を聞く体制ができているかを確認していることがわかる ・ 例題はなるべく前回と同じものを使っている：前回の内容を思い出すきっかけになる ・ 大事なことを説明した後に、「大事なことですから字でも書きま
まとめ	<p>次回への動機づけ</p> <p>その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大事なことを説明した後に、「大事なことですから字でも書きま す」といって板書する：学生の集中度が上がる ・ 学生がノートを取る待ち時間でときどき話す自分の経験やエピソードがおもしろくりフレッシュになる、時々笑いがとれる（自分が学生のときに聞いた成績の話（「うーん、よし君を信じよう」、数学者は絵が描けないが物理学者は絵が描ける、など） ・ エピソードを話すときに、後ろの方では少し声が聞き取りにくい、ただし本論の説明のときには支障はない、教室の広さからいえばマイクを使う方がよいかもしれない ・ 教科書があるが、授業の内容の理解には教科書はほとんど必要ないと思われる、授業を聴いているだけで内容が理解できるように、説明の順序、板書の計画、例題が用意されている ・ 授業全体で学生に理解してほしいこと、毎回の授業で学生が間違えやすいところを知っている（学習成果のプロフィールと目標設定の往復作業ができている） <ul style="list-style-type: none"> ・ 次回はこの続きをやりますというところ終了（授業の後半30分は次回の内容の予備的内容であることをあらかじめ言っている） ・ 今日もオフィスアワーへの来訪はなし

第三回授業（2004年10月21日、中井・中島）

	カテゴリー	記録
導入	<p>目標の提示</p> <p>その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教室に入ると同時に、今日のテーマを板書 ほとんどの学生がすぐにやめる：板書をきっかけに授業が始まるぞという期待感がある ・ 5分遅れで登場、学生は騒がしい
授業本体	説明の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今日の本論に入る際、「微分可能性の拡張は大事」「今日はそれを絵を描いて説明する」「あせっても理解できない」「今日はゆっくりやります」：今日の授業のアウトラインを示すと同時に、学生

	教材	<p>に不安を与えない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「ここはややこしいけど」、「もう一回言うと」: 学生が理解しにくそうと思うところは何度でも説明し直す:(特に前の方に座っている) 学生の顔を見て話す ・ 板書はわかりにくくなりそうと思ったら何度でも書き直す、特に図: 授業が丁寧な印象を持つ、かつ板書に無駄がなくなる ・ 授業中に何度か学生に呼びかける: 「ここまでのことわかりますか?」「今日はこれだけ納得して帰ってください」 ・ 例で用いる関数は教科書のものとは違い、毎回できるだけ同じ関数を使う: 前回までの授業でやった例題との関連を思い出しやすい ・ 数学の授業であるが、物理の具体例をつかって頭にイメージさせる(「瞬間の速さ」という具体例の提示) ・ 後からノートをみてすぐわかるように、「図示」、「例」、「結局」など全体の中の位置づけを明確に示している ・ 板書に書く日本語は明確であり短い言葉で書かれている ・ 寝ている学生は4人程度。内容を知っているためかどうかは不明。他の学生は学習に集中しているようだ。 ・ 教科書とノーテーションは違うが、学生が混乱するほどではない
まとめ	<p>次回への動機づけ</p> <p>黒板を消す</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最後に来週やる内容のダイジェストを解説: その証明を宿題にする、ただしヒントと手順は示す、これによりちょっと考えればできる程度の問題になる、「宿題」と大きく板書、問題をやらせることよりモチベーションを高める方をねらった宿題と思われる ・ 板書を学生がノートにとるのを見てから、黒板をゆっくり消す。この時間が学生に質問などを受ける時間になっていると思われる。

教員へのインタビュー項目

<p>講師の情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 名古屋大学に赴任して10年目。 ・ それまでは、塾講師などの経験はあり。 ・ 専門は物理学(理論) <p>授業の特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 木曜は1、2限にも授業がありこれが3つ目の授業。 <p>説明の仕方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ チョークについて、「赤はコメント、黄は重要な点と使い分けるようにしていますが、

結果的にはいつも赤が多くなります。ただ、赤は光の具合によっては読みにくいことがあるようです。」

- ・ 「数年前まで「板書が早い」といつもアンケートに書かれて、意識して遅めのテンポで書くようにしています。」

授業設計

- ・ 何年かかけて現在の講義計画が固まってきたと話している（学生像を把握して一回の授業で説明できる分量を適切に設定している）
- ・ 講義ノートはA4、3枚、一枚30分で授業。

オフィスアワー

- ・ オフィスアワーに学生が来るのは学期中に数人程度らしい。

2.3 抽出されたティップス

授業デザインのティップス

- ・ 授業計画に予備日を作り、柔軟な授業設計をする

導入のティップス

- ・ 授業の内容を始めに大きく板書する
- ・ 前期（前回）の内容も板書し、簡単にレビューする
- ・ これからやる内容に期待を持たせる：知らない専門用語を使いながらも、「おもちゃにする」「遊べそう」と期待を持てる説明をして不安がなくなる、難しいと思わない

学生を参加させるティップス

- ・ 学生の生活空間に近い場所で（非常勤講師控室）オフィスアワーを設ける
- ・ 意欲のある学生にさりげなく学問の深さなどを説明することによって知的刺激を与える

プレゼンテーションのティップス

- ・ 黒板や下を見ず、説明をする時は学生の目を見て話す
- ・ 重要なもの、難しいものがどこかということ明確に説明する
- ・ わかりやすい例を提示して理解させる
- ・ 簡単なものから複雑なものへ段階的に説明する
- ・ 他の科目との関連を意識させる
- ・ 次回以降との授業内容との関連を意識させる説明をする
- ・ 板書は大きく読みやすい字で書く：最後列からもはっきり見える
- ・ 黒板は隅から隅まで使う：話に集中していても後からノートが取れる
- ・ 板書は急がずゆっくり書く
- ・ 図は丁寧に書く：図は定義を直感的に理解するために重要、解説に使う図は丁寧に書

いておく、事前の講義ノートでどんな図を書くかはあらかじめ決めておく

- ・ 大事な定義を書いたら少し黙る
- ・ 例題に使う関数はできるだけ毎回同じものを用いる
- ・ 視覚化など多様な表現で理解を促す
- ・ 全体における位置づけを明確に示して板書する

まとめのティップス

- ・ 今日の授業のまとめを大きく板書する・図示する
- ・ まとめ書き方は、色分けを工夫しながら授業の内容を構造的に書く
- ・ まとめは授業が終わってからもしばらく消さない
- ・ 授業終了後にしばらく教室に残る
- ・ 次回の授業内容のダイジェスト版を説明する
- ・ 次回までの宿題を課す

見学者の印象と改善へのコメント

- ・ 授業内容に関する圧倒的な知識のもとに、学生の視点にたって論理的にデザインされている。
- ・ 黒板を使った内容提示の方法が明確で学生にとって理解しやすい授業を心がけている。
- ・ 授業全体は非常にきれいにわかりやすく構造化されている
- ・ それを簡単な講義ノートとして事前にまとめてある
- ・ 授業中も全体の構造と現在の位置を意識できるような解説が頻繁にある
- ・ これは授業の内容に関して精通しているからこそ（9年間の授業経験も大きい）
- ・ 教師が若く、またTシャツという服装で親近感を与えていると思われる
- ・ 板書と説明の授業であるが、寝る学生が少ない。
- ・ 授業の内容で学生を十分に巻き込んでいるが、学生をより巻き込み参加させるための教授法の余地はあるのではないかと感じた。たとえば、解説する前に質問を投げかけたり、手を挙げさせて反応をみるなど、学生に刺激を与えることも学習効果を高めるために有効かもしれない。

3 . 開放科目

3.1 基本情報

対象授業 美術史特殊研究（火曜4限、文学部237教室 文学部以外の学部対象）

対象期間 2004年度後期

担当教員 木俣元一（名古屋大学大学院文学研究科）

授業見学者 夏目達也・中島英博・青山佳代

授業の特徴と形態

美術史特殊研究は、全学教養科目の開放科目であり、前期開講の同名科目の後に位置づけられる授業である。従って本授業は前期の続きという形になるが、前期から引き続き受講している学生は全体の1/3から1/4程度にとどまっている。開放科目であるために文学

部以外の学部の学生が専門的内容を教養として身につけることが期待される科目である。

この授業は、実際の美術作品の提示とその解説を中心とした講義形態の授業である。授業内容の提示はすべてパワーポイントによるプレゼンテーションによって行われ、その印刷資料が配布教材として学生に渡される。受講者数は約 80 人である。

授業の概要（名古屋大学『全学教育科目要覧 上巻』より抜粋）

本授業の目的およびねらい

ヨーロッパ忠誠のキリスト教世界で制作され、受容された聖画像（イコン）を取り上げる。聖画像をめぐる理論や実践について、歴史的・文化的背景とともにさまざまな作品にもとづいて論じる。その後のルネッサンスや近代ヨーロッパにおいて発展するヴィジュアル文化が形成された状況を明らかにする。

履修条件あるいは関連する科目等

ヨーロッパの歴史や文化、芸術に関心があること。芸術と人間、歴史学、など。

成績評価の方法

レポート試験

講義予定

- 1 . はじめに
- 2 . 巡礼とイコン
- 3 . イコンをめぐる伝説
- 4 . イコンと典礼
- 5 . イコンと聖遺物
- 6 . ヨーロッパに輸入されたイコン
- 7 . ルネッサンスとイコン
- 8 . イコンとの対話
- 9 . イコンと近代性
- 10 . まとめ

教科書

ありません

参考書

講義のときに必要な参考文献を挙げます

3.2 授業見学の記録

第一回授業（2004年10月12日、夏目・中島）

	カテゴリー	記録
導入	学習環境 目標の提示 その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員は授業 5 分前にはマイク・PC のセットアップ完了、タイトル画面があらかじめ出ている状態で待機 ・ 冒頭に「教室が暗くなるので眠くなる点が学生から不評」と説明。注意を喚起する。 ・ はじめに前期から一貫して問いかけている問題意識を解説する。ただ後期の授業目標や第一回の授業での学習目標の提示は特になし。シラバスの説明、後期の授業計画の説明なども特になし ・ 遅刻する学生はほとんどなし。私語ははじめの 5 分ほどあったが以後ほとんどなし
授業本体	説明の仕方 教材 学生の参加	<ul style="list-style-type: none"> ・ PPT スライドに沿って講義、理論的な説明、絵の解説・意味付け・具体例の説明を講義する。ツールにレーザーポインタを使用 ・ 教師は常に前方上手に立ち、さほど動かない ・ 抽象的な説明はスライドの方を向いて話す、具体例の説明は学生の方を見て話す ・ 若干の身振りを交える（実際は教室が暗いために見えにくい） ・ 学生にとって身近な例を使うことを意識する（遺影、テレビ電話など） ・ PPT は黒地に白文字、配布資料は B4 で 3 ページ、PPT のスライド印刷 ・ 中盤で寝てしまう学生は多い、開始 30 分後で 7,8 人、35 分後で 12,3 人、45 分後でクラスの 1/3、50 分後で約半数 ・ 60 分たったところで、話の切れ目、多くの学生の顔があがる ・ 刻印のところでは教員が「大事なところ」という、数人がノートを取る
まとめ	説明の仕方 その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業内で特にまとめなどはしない ・ スライドの途中で授業が終わってしまう ・ 次回の授業のテーマをスライドで提示 ・ 終了後に数人が質問、うち一人の質問に熱心に回答

第二回授業（2004 年 10 月 26 日、夏目・青山）

	カテゴリー	記録
導入	目標の提示 その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前回は、前期のまとめ。前回の続きから進むことを説明。「前期の授業が前提。初めての人とはとまどうかもしれない。前期履修者もはじめの数回はわからなかったと思う。だから、復習の意味で聞いてほしい。」 ・ 授業を後期からはじめて受講する人もいる。 ・ 学生数 77 人、遅刻 4 人。

		<ul style="list-style-type: none"> ・ ハンドアウトの配布が授業に入ってからになったが、学生は騒がず。
授業本体	目標の提示 説明の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今回の講義の全体としての主張については特に言及をしない ・ 口頭による説明が中心。 ・ スライドの見せ方は、絵を見せる 解説を見せる 絵に戻る(往復が解説の内容が定着しやすい) ・ スライド、ピンマイクの整備がしっかりしている(声が切れることはない) ・ 学生の方を向いて説明している ・ 教員の顔が見えにくい。プロジェクター使用で室内灯が暗くしているため。学生はスライドを見てメモをとっているが、教員の姿は見えにくい。 ・ 説明の内容がもつ現代的意義までは説明していない(アイコンに関する詳細な説明はあるが、それがいかなる意味があるのかについての説明はない)
	教材	<ul style="list-style-type: none"> ・ 毎回スライドを印刷して配られるのは学生にとって授業内容が手元に残るのでうれしいはず ・ 前回と比べてスライドの色使いが明るくなり、見やすい ・ スライドの文章の意味が学生にとっては不明瞭と思われる。 ・ 一枚あたり9枚の印刷だが、(配布枚数が増えるものの)6枚にする方が絵が見やすい
	学生の参加	<ul style="list-style-type: none"> ・ 周囲が暗くなってきたこともあり、次第に居眠りする学生が現われる。 ・ 本日分の分量を超えてしまったようだ。「まだ15分ありますので、次のセクションに行きます。」
	その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前期履修者と未履修者の知識水準の差をカバーすることは難しいが、重要な課題である(未履修者の受講を認めるからには、そのフォローが必要なため)
まとめ	次回への動機づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・ まとめは特になし

第三回授業(2004年11月2日、夏目・中島)

	カテゴリー	記録
授業前	その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 受講生の多くは時間前に教室におり遅刻者はなし。 ・ 教員がスライド(パソコン)をセットアップ。 ・ 授業開始とともにカーテンを閉める、授業開始の合図として機能、学生が私語をやめる

導入	目標の提示 学生の参加	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前回の続きであることをイントロで示す。 ・ アイスプレイングなどは特になし。すぐに解説に入る。
授業本体	説明の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイントに写真（美術画）と解説が書かれた教材 ・ 全スライドは資料としても配布（モノクロ印刷） ・ 写真をみせてそこから読み取れる事実と意味の解釈についてを講義する形態 ・ 「ここ、微妙にずれていますよね」「異なる表現の同居はどういう意味なのか？」「これはどういう風に考えたらいいでしょうか？」：ときどき学生にも呼びかけて注意を喚起する ・ 「次回以降もこの特徴を扱います」：ときどき前後の授業との関連を意識させる ・ 絵を複数の視点（部分拡大など）でみせたり、解説のスライドと絵のスライドを何度も往復させるなど、説明に動きがある ・ 途中でサブタイトルスライドがあり、講義の切れ目・固まりは以前よりわかりやすいように思える ・ 教員は授業内容に関して圧倒的な知識を持っていて解説の内容が手際よく明確 ・ 絵を見せるときレーザーポインタで「この部分ですが・・・」：言葉での説明では正確に書き留めなるとしなないと消えてしまうので、教材化して資料として残せないか ・ 本物の絵画を示す迫力・臨場感がある、授業が本物に触れる機会になる ・ 解説部分は、事実（絵画に見られる特徴など）と解釈（絵画の特徴と宗教的・政治的背景との関連など）が明確に分けて書いてあるわけではない ・ 途中「この授業は言葉を覚えないと単位が出ないわけではないですし・・・」：学生の顔が上がる。 ・ 授業中、学生は静かにノートをとる。
	教材	
	目標の提示	
	その他	
まとめ	次回への動機づけ オフィスアワー	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「残りは来週やります。今日は終わります」：特にはない ・ 1人が講師のところへ質問

教員へのインタビュー項目

学生が獲得すべき目標について

- ・ 知識の獲得ですか、美術鑑賞の教養ですか？
例えば、

- ・ マリアのぼんやりして生気のない表情とイエスの生気に満ちた表情の対比、イエス・天使の「浮動性」 時代の永遠性を示す、異なった意味を込める
これについて、「意味論的に固定した規範に従っているのではない。」：しっかりした規範があるかどうかは明確ではない。 この説明によって学生に理解させることは何になるのですか？
- ・ 「「デメトリオス」「テオドロス」の名前は覚える必要はありません。」、「授業で話している内容を全部覚えてもらう必要はない。年号、作品なども。」
学生が獲得すべきことは何になるのですか？

学生の参加について

- ・ 学生を見ていると、何割かは単位を取得すること自体が目的になっている。この授業を楽しもう、教養を身につけよう、という姿勢ができていないように思われるが教員はどのように考えているでしょうか？
- ・ 学生の疑問を喚起する or 学生の質問に答えるような説明
例：「偶像崇拜というが、聖地、聖遺物であれば、偶像崇拜にならないか？」
専門外の学生が抱くであろう素朴な（幼稚な？）疑問を用意した方がよいとおもいますがいかがですか？
- ・ 授業中に学生の理解度を確認する活動を取り入れる予定はありますか？

学生の基礎知識について

- ・ 基礎知識があることを前提とした話でよいですか？ 例：「ゴルゴダの丘」
- ・ 今後事前に予習を課す予定はありますか？

授業デザインについて

- ・ 後期初めて受講した学生がかなりいるので、オリエンテーションは必要ではありませんか？
- ・ 授業の終わりに、本日の授業のまとめをすると学生の理解が深まるかと思いましたが、いかがでしょうか？
- ・ 専門的内容を専門外の学生に対して、抽象的な内容（アイコンの解釈）を教える点で難しい点はありますか？

3.3 抽出されたティップス

授業全体に関するティップス

- ・ 毎時の授業において、目標を明示する。
- ・ 授業の冒頭に本時の目標・内容を提示する。
- ・ 学生の知識水準を事前に把握する。
- ・ 受講にあたって必要となる基礎知識の内容・程度を提示する。授業開始後も、必要に応じて、具体的な形で予習・事前学習を指示する。
- ・ 前期から継続の授業で、後期からの履修を認める場合には、後期の学生が不利にならない

いようは配慮を行う。

- ・学生の素朴な質問・疑問を丁寧にすくい上げ、それを授業の内容や説明等に適切に活用する。
- ・授業の最後に「まとめ」を行う。

プレゼンテーションに関するティップス

- ・美術関係の資料はパワーポイントの利用はきわめて有効。
- ・スライドにはたんに素材だけではなく、解説文等も加える。
- ・パワーポイントを使用する場合には、スライドの背景を明るくする。
- ・パワーポイントを使用し、スライドの資料（ハンドアウト）を配布する場合にも、ノートを取らせる必要がある場合や、ノートを取ろうとする学生がいる場合には、つねに一定程度の明るさの照明を確保するか、適当な間隔で照明を付けてノートを取る時間を確保する。

資料4 『成長するティップス先生』に関するアンケート

平成 16 年 11 月 25 日

FD 企画・実施ご担当者様

名古屋大学高等教育研究センター
夏目達也

『成長するティップス先生』に関するアンケートのご協力をお願い

謹啓

時下ますますご清祥の段、お慶び申し上げます。

さて、私ども名古屋大学高等教育研究センターが開発した『成長するティップス先生』は、大学関係者をはじめ広範な方々にご利用いただいております。この度、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されたことを契機に改訂作業に着手することになり、利用者の皆様から率直なご意見を伺うことにしました。このアンケートは、改訂のための資料とする目的で実施するものです。

つきましては、ご多忙中たいへん恐縮ではありますが、アンケートにご協力いただきたく存じます。ご記入がお済みになりましたら同封の返信封筒に記入済みアンケート用紙を入れ、平成 16 年 12 月 20 日(月)までにご投函くだされば幸いに存じます。

謹白

送付先および問い合わせ先：

〒464 8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学高等教育研究センター
夏目達也

問い合わせ先：staff@cshe.nagoya-u.ac.jp

電 話：052-789-5384

3. 『成長するティップス先生』をお読みいただいた感想はいかがでしたか。以下の1から4のうちあてはまるものに をつけてください。

- | | |
|--------------------|------------------|
| 1. あてはまる | 2. どちらかと言えばあてはまる |
| 3. どちらかと言えばあてはまらない | 4. あてはまらない |

・自分の授業改善に役立ちそうだ	1	2	3	4
・TAや大学院生に勧めてみたい	1	2	3	4
・新任教員に勧めてみたい	1	2	3	4
・同僚に勧めてみたい	1	2	3	4
・FD活動などで活用してみたい	1	2	3	4

自由記述欄

4. 『成長するティップス先生』の「授業の基本編」の各章をお読みいただいた感想はいかがでしたか。以下の1から4のうちあてはまるものに をつけてください。

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1. 授業改善に役立つ | 2. ある程度授業改善に役立つ |
| 3. あまり授業改善に役立たない | 4. 授業改善に役立たない |

・コースをデザインする	1	2	3	4
・授業が始まるまでに	1	2	3	4
・第1回目の授業	1	2	3	4
・日々の授業を組み立てる	1	2	3	4
・魅力ある授業を演出する	1	2	3	4
・学生を授業に巻き込む	1	2	3	4
・授業時間外の学習を促す	1	2	3	4
・成績を評価する	1	2	3	4
・自己診断から授業改善へ	1	2	3	4
・学生の多様性に配慮する	1	2	3	4

5. 『成長するティップス先生』をお読みいただき、どのような方向で改訂するべきだと感じられますか。以下の1から4のうちあてはまるものにつけてください。

1. あてはまる
 2. どちらかと言えばあてはまる
 3. どちらかと言えばあてはまらない
 4. あてはまらない

・教授法の理論的背景を充実させる	1	2	3	4
・すぐ使える実践ノウハウを充実させる	1	2	3	4
・学生の学習という視点を充実させる	1	2	3	4
・さまざまな学問分野の事例を充実させる	1	2	3	4
・さまざまな種類の授業日誌を追加する	1	2	3	4
・シラバスなどの実例を増やす	1	2	3	4
・大人数講義におけるノウハウを増やす	1	2	3	4
・実験・実習におけるノウハウを増やす	1	2	3	4
・eラーニングにおけるノウハウを増やす	1	2	3	4
・社会人学生向け授業のノウハウを増やす	1	2	3	4
・ベテラン教員向けの上級編を開発する	1	2	3	4
・読みやすくするための工夫をする	1	2	3	4

自由記述欄

6. 名古屋大学高等教育研究センターでは、『成長するティップス先生』を活用した授業改善支援ツールとして、ウェブ上でシラバスを作成する『ゴーイングシラバス』を開発しています。これについてお伺います。

- ・『ゴーイングシラバス』を知っている
 1. はい 2. いいえ
 ・『ゴーイングシラバス』についてもっと知りたい
 1. はい 2. いいえ

参考：ゴーイングシラバスへのアクセス：<http://gs.cshe.nagoya-u.ac.jp/>

7. 『成長するティップス先生』についてご意見等ありましたら、ご自由に記入してください。

[]

8. 私どもは、『成長するティップス先生』の改訂および大学の授業改善に関して、皆様から直接ご意見を伺いたいと考えております。インタビューの時期は後日調整させていただきますが、時間は1時間程度を予定しています。インタビューにご協力いただける方は、ご連絡先をご記入くださるようお願いいたします。

お名前 ()
電話番号 ()
メールアドレス ()

ご協力どうもありがとうございました。

資料5 アンケート自由記述の一覧

自由記述項目

1. 『成長するティップス先生』をお読みいただいた感想はいかがでしたか？
2. 『成長するティップス先生』をお読みいただいて、どのような方向で改訂すべきだと感じられますか？
3. 『成長するティップス先生』についてご意見等ありましたら、ご自由に記入してください。

1. 『成長するティップス先生』をお読みいただいた感想はいかがでしたか？

1.1 積極的評価

- ・ 地道で先進的な取り組みだと思う。(No.4)
- ・ FDを進める上で教員の創意工夫と進め方やどの程度行うかなど、ある程度の枠組みが必要だが、その面で大変参考になった。(No.6)
- ・ 我流で試みていた実践と重なる部分があり、自分の考え方が孤立したものではないことに勇気付けられた。学生の多様性に対する配慮には共感できることが多く、非常に参考になった。(No.8)
- ・ 40年余りの短大時代を経て平成15年から大学へ改組した。その際に全教員の共通認識形成の手立てとして、着任者全員に1冊ずつ配布している。(No.12)
- ・ 授業日誌編と授業の基本編に分かれた記述が、大変読みやすいものになっていると感じた。コラムの配置も絶妙だと思う。(No.16)
- ・ 大学の教員は必ずしも教員養成の課程を経ているものとは限らず、教育の基本的な概論、方法等を身につけないまま教壇に立つ先生も少なくないのが現状であることから、大学教員向けの教育書として活用したい。(No.20)
- ・ コラムが充実してよいと思う。(No.21)
- ・ 柔軟性受容性がある初任教員には本書は参考になる。内容が特定の思想や視点からのものでなく、ヒューマニティのあふれる視点からなっているので、初任教員への良品な贈り物にもなる。(No.29)
- ・ 教員から見て、内容は当たり前なことであるが、自己の授業を振り返る上でよい参考書だと思う。(No.33)
- ・ 内容は極めて基本的なことではあるが、それを意識するか否かで授業は変わるものだと思う。教師がよりよい授業を目指すことは当然で、その一助となる本だと思った。(No.45)
- ・ 小・中・高の教員とは異なり、大学教員は教職に関する訓練を受けていないので、新任教員やFD活動に役立つと思う。(No.47)
- ・ 目からうろこのガイドブックだと感心した。(No.48)
- ・ FD研修で活用したいと思っている。(No.58)

- ・ 学年編成の変更が予定されているので、現在カリキュラム改革を行っている。自分は研究者であるが、教育者でもあり、悩みも多いので大変参考になった。(No.61)
- ・ 自分の授業の意識的構築に役立つと思う。(No.62)
- ・ 「魅力ある授業の演出」や「学生を授業に巻き込む」などは自分の授業改善にぜひ役立てたい。(No.64)
- ・ 入門編としてよいテキストである。(No.70)
- ・ 自分の授業改善に役立つと思う。また学生や新任教員・TAに勧めたい。(No.78)
- ・ コースデザインから実際の事業、学生とのかかわり、成績評価に至るまでの間に直面するであろう課題が多面的に整理されておる。特に経験の少ない新任教員に有益であると思う。(No.79)
- ・ 何10年も教案を再考していない先生方やFD委員をしている方に勧めたい。ヒントを得られると思った。(No.80)
- ・ 読みやすい記述と構成になっていると思う。内容について、自分自身、反省すべきと思いついた箇所があり、今後の授業方法や展開について再検討するうえで参考になりました。(No.82)
- ・ 読みやすく役に立つ本だと思う。(No.85)
- ・ 大変参考になる。(No.90)
- ・ 全編を通して「痒いところに手が届く」書き方がされており、大変ありがたい。(たとえば、本書56頁の「言葉を尽くして・・・」、同じく57頁のアメリカ大学で見られる講義要綱の例、さらに69頁のシラバスの一例内の「授業内容」など。)双方向授業、学生からの発言を促す面で悩んでいたが、昨年、リアクション・ペーパーの使い方を授業で活用し、受講者全員にペーパーを発表してもらった。授業の復習、導入になり、教室が活気付いた。(No.96)
- ・ 内容に刺激を受けた。自分の授業に実際にどう取り込むか考えている。またすでに自分でも実践している内容もあり、本書はそれを体系化して展開している点が良いと思う。(No.103)
- ・ シラバス、ポートフォリオ、コースパッケージ、オフィスアワー等の本旨を理解して授業をデザインし、その改善を図る上で、特に若い教員には役立つと思う。自分自身にとっては授業に活用し、教務実務では本書を索引にして知識・理論の確認、企画・運営・評価などの実際を行っている。(No.105)
- ・ 各所に「そういえば・・・」など思うことがあり参考になった。(No.109)
- ・ 学内のFD委員会で紹介をしたいと思います。教育により、FDや授業のあり方に関する考え方、押さえ方が異なり、その状況でいかに授業改善を進めるかを考えるうえで、本書は有意義である。(No.115)
- ・ 授業の仕方について整理されているので、理解しやすく利用しやすいと思う。(No.117)
- ・ FD活動の一環として本書を紹介したい。(No.119)
- ・ コラムが面白い。(No.121)
- ・ 授業方法について細かな点で気を配った内容だと思う。(No.124)
- ・ 系統立てた授業計画や準備のノウハウがわかりやすく、新任・ベテラン問わず全教員に役立つと思う。大学の教員は授業法に関する訓練を受けるわけではないので、多様

な講義スタイルがあり、その中で起こりうる問題に答える例が多く盛り込まれた点が優れている。(No.126)

- ・ 授業中のマナーについてルールを決めるが、定着が難しいのが現状である。授業についてのルールは学科全体で取り組もうとしている。本書の授業展開にかかわる項目は、FD 活動において教員相互の授業参観においてチェック項目作成に有効だと思う。(No.129)
- ・ 大変わかりやすく自らの授業の問題点を大いに考えさせられた。(No.131)
- ・ アメリカ留学の経験があり、ティップス先生のアドバイスは当然と感じた。内容は自分自身、日ごろ気をつけていたことが大半であったので新鮮味はないが、言葉での表現がうまくなされており、後輩に勧められる。(No.133)
- ・ 授業改善に努め成果を得ている、得ていない、また改善に必要性を感じながら実行できていないなど、授業改善のさまざまなレベルの教員にとって、手がかりやヒントを与えてくれるバイブルのような役割を持っている。(No.134)
- ・ 特に教育歴の浅い教員には必読だと思う。(No.137)
- ・ 授業改善に関する翻訳本はこれまでに読んだが、日本の学生の実情とは離れたところを対象にしているため、活用するには難しく感じていたが、本書はその点について安心して活用できる。他の教員にも勧めている。(No.142)
- ・ シラバス作成について教員の間でよく話題になるのでこの本を勧めたいと思う。(No.144)
- ・ 授業改善のノウハウをやさしく記述されていて驚いた。大学の教員も中・高等学校教員に近い授業デザインを身につける必要を痛感している。(No.145)
- ・ 感銘した。教員1年生で、授業は欲張って盛りだくさんの内容になりがちだ。もっと早く本書に出会いたかった。多くの教員にも読んでもらいたいと思う。(No. 146)
- ・ 小規模大学のため、TA や院生がいないが、周りの教員へ勧めたい。(No. 150)
- ・ 内容は日ごろ実践していることと重なっており、間違っていないという確信がもてた。多くの関係者に勧めている。(No. 152)
- ・ 扱った問題点が整理されており、「授業への基本編」に対応させていることがよい。日記形式はよいアイデアだと思う。親しみやすい会話口調だった。内容が読みやすくなっている。(No. 164)
- ・ 全体として内容は役立つと思う。(No.165)
- ・ 最近学習環境・教育環境の整備に力を入れてきたので、授業内容・運営を見直す余裕と気力が低下していた。本書を通読し、刺激と元気をいただいた。(No. 168)
- ・ 学生に授業内容を能率的にインプットするのに役立つと思う。また教養科目の授業には大いに有効だと思う。(No.171)
- ・ 授業で実践していることがよいことだと確認でき、さらに工夫が必要であるという提示を受けた。面白く読むことができた。(No. 173)
- ・ 新人教員には有効なノウハウ集だと思う。特に巻末の“FAQ”がまとめてあるところが便利だ。(No. 175)
- ・ 最初に「授業日誌編」をおいたところが工夫されていると思う。計画・実践・総括の流れで教員が共感できる本音が記され、また対応する課題について、どこを開けば

- わかるかが示されていてよいイントロダクションになっていると思う。気楽に読めて必要な部分だけ拾い読みもでき、秘訣集というコンセプトが貫かれている。(No.176)
- ・ 読みやすいところがよい。(No.182)
 - ・ シラバスおよびFDで参考にした。(No.186)
 - ・ 「授業日誌編」は教員の成長物語の感があり感動した。「授業の基本編」は説教のような口調が気になるが、述べられている事柄については傾聴に値すると思う。(No.188)
 - ・ 大学教員が教育者として成長するという、タイトルに魅かれた。自分が見逃していたことや同感だと思う点があり、楽しんで読むことができた。(No.192)
 - ・ 今求められているテーマによく沿っているものであらうと感じた。良書をいただき、感謝している。(No.194)
 - ・ 最近の新任教員は講義能力の高い方が多いので、本書のアンケート項目のうち「どちらかという役立つ」に該当すると思う。(No.196)
 - ・ 直接授業をしていないが、授業改善と現学生への対応、教材研究に役立つと思う。(No.199)
 - ・ 読み物として適当なサイズ。続編として刊行するのもいいと思う。(No.202)
 - ・ 公開授業後「授業改善会議」に学生の参加が効果的と聞き来年度試みようと思う。「学生とともに作る授業」という意味から、会議に参加する学生に本書を勧めるのもよいと思う。(No.204)
 - ・ 自分と同じ文系教員のティップス先生に共感した。本の構成が2部立てでわかりやすいと思う。大人数講義からゼミ形式と幅広く対象にしているのもよいと思う。(No.205)
 - ・ すぐに講義に応用できる多くのヒントがあり、大変参考になった。本書の「授業の基本編」については、すでに自分の講義で同等の内容のことを実践しているが、授業改善に役立つと思う。(No.211)
 - ・ 教員が講義をしていて陥りやすい点を上手に取り上げている。(No.212)
 - ・ 内容はわかりやすく、説得力のあるものだった。数年前に本書の一部を他の教員から紹介してもらったが、今回初めて通読した。もっと早く本書の存在を知りたかった。FD委員としての任期が残りわずかではあるが、多くの先生にも紹介したいと思う。(No.215)
 - ・ 授業をもち始めた方には参考のなる点が多いと思う。(No.216)
 - ・ 考えるものが心得ておくべきことを広く網羅しているように思われる。知らないことも多々あり、今後、大いに役立つと思う。数冊かって同僚や友人に送ろうと思う。(No.220)
 - ・ 「授業日誌編」と「授業基本編」に分けて構成競れている点は、大変読みやすく感じた。日誌編の問題に対して強い共感を持ち、その対応についてじっくりと基本編で考えることができた。(No.223)

1.2 消極的見解

- ・ 授業の技術とFDは少し違う気がする。(No.5)
- ・ 年配の教員ほど自分の「授業アイデンティティ」を保守しているので、活用しにくいと思う。(No.13)

- ・ 経験年数のある教員には後悔や課題ばかりとなり、毒気を感じるかもしれない。しかし、初心に帰る気持ちを持てば活用できると思う。(No. 29)
- ・ 教員各自が判断すればよいと思うので、紹介するのみにとどめておきたい。(No.54)
- ・ 個々が理解するということと、組織で実施するということは別問題で、アメリカ直輸入の言葉が独り歩きをし、各自の都合で解釈している感がある。真摯に教育改革に取り組む人、そうでない人といった差があるため、教員・職員に向けては『成長するティップス先生』のウェブ版にリンクを張って紹介する、FD 研修会の資料として提示する程度にとどめている。(No.105)
- ・ 年間を通して魅力ある講義を複数回行うことは、最近少なくなっている。チュートリアルを含めて短期間集中型になり、ティップス先生の内容では少し古いように思われる。(No. 110)
- ・ 教育はスキルよりもいかに人生の大切さを語るか、学問の厳しさを伝えるか等、精神的な側面も重要であるが、その点の記述が不足している。(No.124)
- ・ 「授業の基本編」では、実行する上でやや難点に思われる箇所もあった。(No.165)
- ・ 知識の理解・応用・創造といった創造的人材育成には少し問題点があると思う。(No.171)
- ・ 本書を勧めたい中堅職員もいるが、受け付けないと思う。(No.175)
- ・ 同僚や年配の先生に参考にしてほしいと思うが、無理だと感じている。(No.196)
- ・ ベテランの先生にはこういった本を手取ることは難しいのかもしれない。(No.216)

1.3 要望

- ・ 教師としての経験が浅いので特色のある授業を行ううえで参考になった。シラバスや授業展開の実例をつけていただけるとよいと思う。(No.9)
- ・ 授業評価のページが多いといいと思う。(No.49)
- ・ 大学院生の TA を採用しているが、うまく使いこなせない、指導できない現状がある。教員・TA 双方の立場から読める内容の指導書を望む。(No.50)
- ・ B.G.デビス他『授業をどうする：カリフォルニア大学バークレ校の授業改善のためのアイデア集』(東海大学出版会 1995年)などと組み合わせると効果的である。(No.70)
- ・ 年配の教員には、ウェブ版より活字媒体が読みやすい。(No. 103)
- ・ 全体的にはどの授業にも当てはまる内容だと思うが、各教科における特色がある。各分野(教科)の先生方の意見を聞いて参考にしたいと思う。(No.125)
- ・ 『倫理学』の授業が例に挙げられていたが、理工系の授業と比較するとシラバスの作り方、授業の進め方、演習指導など異なる面があると思う。(No.135)
- ・ 学生の質の問題(学力面での多様性、関心の格差など)を個別に考える必要がある。(No.187)
- ・ 構成・記述法が学生向けの導入教育本かと思わせる。教員相手のため、もう少し硬くてもよいと思う。(No.210)

1.4 その他

- ・ 授業に関する研修会において本書を紹介した。FD 委員会メンバーにも本書の内容を参考することを提唱した。(No. 43)
- ・ 国家資格に直結する学科が多いため現場期間での実習が多く、大学と社会・教員と学生間の疎遠間はなかったが、自立した学生が減少する中、授業の改善に必要を感じている。本学の FD は始まったばかりだが、1、2 年内に成果を出したいと考えている。(No.52)
- ・ 大学の講義のアウトラインをあらかじめ学生に開示することは、大切なことだと思う。また講義は「ライブ」のように即興性に基づいた予定外の話の提供や学生のレスポンスに端を発する「脱線」も生き活きた時間にするには必要だと思う。(No. 89)
- ・ このような教授ノウハウがまとめられているとは知らなかった。(No.97)
- ・ 参考になる点が多く、著者を FD に招いて講演をしていただいた。(No.108)
- ・ 年間を通して魅力ある講義を複数回行うことは、最近少なくなっている。チュートリアルを含めて短期集中型になり、ティップス先生の内容では少し古いように思われる。(No. 110)
- ・ 学部での授業改善の試みを行っているが、教授法の知識や訓練など、経験の少ない教員が多く、難しいのが現状である。学生の視点を取り入れた授業改善の必要性と学際的アプローチへの関心を喚起しているところである。(No. 111)
- ・ シラバスはかなり入念に作っていたが、学生が知りたい情報という点では、完全に「勘違い」をしていたことが判明した。(No. 114)
- ・ 図書館に FD コーナーを設け、『成長するティップス先生』も揃えました。学内でも読んでもらえるように会議で提案した。(No.140)
- ・ 内容は当たり前のことが書かれているが自分の授業を振り返って反省することが多かった。(No. 149)
- ・ 本書の内容についてすでに本学で実践している人が多いので、改めて「役立つ」「勧めたい」などのレベルでは感想がない。(否定的な意味ではなく)(No. 155)
- ・ 内容は思い当たることは多々あるが、実践をするには時間が足りない。現実に授業改善したいと思う教員がどれくらいいるかが問題だと思う。(No.178)
- ・ 学内のメーリングリストで全教員に紹介した。(No.180)

2. 『成長するティップス先生』をお読みいただいて、どのような方向で改訂すべきだと感じられますか？

2.1 高等教育全般を取り巻く意見

- ・ 大学教育界に新たな刺激になりうる、という意味で大学院教育の改善にも一石を投じる方向で改訂していただきたい。(No.7)
- ・ 高等教育における質の多様性といった観点からも論じてほしい。(No.13)
- ・ 15 週ないし 30 週に「コース」という概念を導入したことは新知見だった。ただそれが最適か要検討に思う。(あまり一般化していない、専攻・コースの類を混同する、という理由から最初はよく理解できなかった。)(No.29)
- ・ 大学設置基準による単位の説明と関連するが、15 週の講義の場合、最低 12 週は開講

- しなければならないといった「俗説」、「定説」について解明してほしい。(No.29)
- ・ 本書 84 頁の講義内容の精選について、初・中等教育の教員では「10 調べて 2、3 教える」というのが常識であるが、こういう言説との関連が見えない。初・中等教育の教授法との関連を(高等教育の固有性も考慮しながら)考えていくことが課題だと思う。(No.29)
 - ・ 本書のあとがきに同感である。特に中小規模の私立大学では、学習・教育改善の問題が現場の教員個々の力量・努力の問題に摩り替えられがちだ。また、経営者サイドからの一方的な指令による取り組みも内実を伴うとは思えず、やはり現場の教員・職員が思いを共有した上で、自主的に企画・実行していかなければ、学生に真剣さが伝わらないと思う。経営者に求められるのはそういった取り組みを掬いあげる、誘導する能力ではないか。関心の低い同僚・経営者を巻き込んで、自主的な学習・教育改善活動を組織化していく際の戦略、戦術などの視点が加わるとよい。(No. 168)
 - ・ 学生は過去・現在・将来を含めた 10 年間に価値観や中高教育の内容・レベルが相当変わると予想される。教員も変わる中で講義を成立させる工夫は日々変わると思われ、それらへの対応や心積もりも教示することになるであろう。(No.212)

2.2 学問領域ならびに読者層に関する意見

- ・ さまざまな学問分野の事例や上級者(かならずしもベテラン教員が授業の上級者とは限らないが)向けの内容を見たい。(No. 4)
- ・ 欲を言えば、文系版・理系版など分野別のものがあればなお便利だと思う。(No.16)
- ・ 「ベテラン教員」という言葉の意味には 授業運営に習熟しており、効果的に授業を行うことができるもの、旧態依然とした授業を愛好し、授業法改善に消極的なもの、の 2 つがあると思う。 に対して『成長するティップス先生』はさほど必要はないと思うが、「ベテラン教員向けの初級編」が必要だと思う。(のにあてはまるような人は読まないかもしれないが、) (No.26)
- ・ 「学問分野の事例の充実」、「シラバスなどの実例、大人数講義におけるノウハウ、実験・実習におけるノウハウを増やす」、「ベテラン教員向けの上級編を開発する」面で改訂をするとさらに面白くなると思う。他の項目については今のままでも十分だと思う。(No.37)
- ・ 本書は目的を果たしていると思う。あえて言えば、上級編などの改訂版が必要だと思う。(No.70)
- ・ 当大学を含めて、医科大学・医学部ではカリキュラム改編により臓器別統合型に変わりつつある。授業形態も、少人数によるチュートリアル+講義+実習である。講義はコマごとに教員が異なり、教員によっては 1 年に 1 回集中的に数コマ講義して終わる。学期を通しての講義は一般教養などに限られている。学期制も意味を失いつつある。こういったカリキュラムではコース責任者の役割が非常に大きいと思うがガイドなどは各大学で模索中だと思われる。医学部におけるような新たなカリキュラムに対応したティップス先生が作成されるとありがたい。(No.98)
- ・ 『成長するティップス先生』を主人公にした、物語的・説明的な工夫は若い世代には受け入れやすいと思う。若手教員向けの上級編があるといいと思う。(No.105)

- ・ ベテラン世代には響かないのではと思う。自分の研究と教育経験を自負している世代の自尊心を生かした『成長するティップス先生』や、反発をかわないような工夫、読む気になる工夫、やってみようという気になる工夫のある、ベテラン向けの『入門編』がほしい。(No.105)
- ・ 医学・歯学はすべてが必須という場合が多く、コースデザインの決定も自由度が低い。特殊なコースデザインをどうすればいいか常に自問自答である。実習のポートフォリオをどうすればよいか、良い例を知りたい。(No.108)
- ・ 特に本書の 10 章の 10.3「障害学生に対する支援」は不十分だと思う。障害学生は、障害の種類やレベルより大きく異なるので、教師がどう対処すべきかわからないと思う。熱心な教師のみが対応できる記述がなされており、残念に思う。もっと具体的な事例で示すべきだと思う。(No.109)
- ・ ベテラン教員の意識を改革し、実践していただける基礎編の充実が望まれる。(No.111)
- ・ 研究、教育の時間的・情熱的・空間的な実務配分に悩む先生方へのメッセージがあるととてもうれしい。(No.114)
- ・ 上級編を別に出版してもよいと思う。(No.121)
- ・ 本書の完成度は高いと思うので、改訂よりは上級編(「成長したティップス先生」など)や分野別などのシリーズ化を考えたほうがよいと思う。(No.133)
- ・ 「ベテラン教員向けの上級編を開発する」を特に充実させてほしい。(No.134)
- ・ これまでに FD に関する書籍をいくつか読んだが、例示されているシラバスは文型のものが多い。理工系の例が 1 件あったが、カタログ的で従来の域を出ていないものだった。ティップス先生が推奨する理工系授業科目(電磁気学や電気回路など)シラバスとはどのような形式であるのか知りたい。(No.135)
- ・ さまざまな学問分野の充実を望む。英語、日本語表現法など。(No.137)
- ・ 多くの教員にとって欠けているのは、基本・理論なので、すぐに役立つノウハウよりも、大学におけるティーチングの基本的な考え方を説明することに重点を置いたらいいと思う。具体的な事例は、それを理解するのに必要最低限の分量でいいと思う。(No.142)
- ・ 新人のためのものを望む。(No.143)
- ・ ベテランではあるが、自分の授業スタイルを頑固として変えない教員が目を通してくれるような方向での改訂を望む。(No.149)
- ・ 教養、専門基幹、専門展開などの科目の種類別の実例も扱ってほしい。(No.152)
- ・ 自然科学系科目の事例やノウハウの充実を望む。レポートの指導についても同じである。(No.156)
- ・ 本書が入門編であれば、主体を学生、新人、ベテラン教師、などのどれかにおいて上級編や各論編に改訂するとよいと思う。(No.157)
- ・ これらの背景から単に体験の寄せ集めではなく、理論化されたものを学ぶ際のガイドンスとなるような章があるとよいと思う。(No. 176)
- ・ 研究とバランスをもっと充実させてほしい。若年層と熟年層に区分する、科目別のノウハウを設ける。(No. 178)
- ・ 本書を教育の方法と内容という区分に従えば、内容のレベルではよく洗練された質の

ものだと思う。方法については、文系・理系（あるいは別の枠組み）などの際がきわめて大きいことについて、教養教育科目と専門教育科目との応用編的なものについて期待する。(No.187)

- ・ 障害のある学生の項目では今後増加すると思われる LD、アスペルガー障害の人への配慮についても加えてほしい。(No.189)
- ・ 学部により学生の人数・講義形式・カリキュラムも相当異なるため、学部別の事例を加えてほしい。(No. 202)
- ・ 分野により事情が異なると思うので、分野別の事例集があるとよい。(No.207)

2.3 教授法の充実にに関する意見

- ・ アンケートの項目の内容すべてについて、改訂すれば、もっと有用だと思う。(No.12)
- ・ 本書 106 ページのコラム「グッド・クエスチョン・・・」は似た経験があり、共感を覚えた。(No.23)
- ・ 理論的なものより、すぐに使える実践ノウハウを充実させてほしい(たとえば、「学生の授業中のマナーの悪さに対して具体的な注意の仕方を含めた対処法」)(No.33)
- ・ 大学の専門分野・授業は多様であり、事例紹介を充実させることには限界がある。むしろ学生と教員の授業における応答関係を充実させるという視点から、eラーニングのノウハウの充実を求める。FD に関する教員の組織化についての方法・事例紹介を求む。(No. 62)
- ・ 「授業デザインのための秘訣集」という趣旨から考えると、事例を増やすことが改訂の方向性として有意義だと思う。大学の授業は、教員と学生とのコミュニケーションが一方方向になりがちで、その現状を改善するための方法論についての内容をより充実させてほしい。(No.79)
- ・ eラーニングを導入したので実際に eラーニングを用いた授業でうまくいかなかった事例を増やしてほしい。(No. 80)
- ・ 他大学の先生方の取り組みを実例で知ることができるとうれしい。(No.97)
- ・ 自分の経験から、「教授法の理論的背景」は充実させると逆効果になると思う。(No.105)
- ・ eラーニングに関しては、「学生の学習という視点を充実させる」ことを強調するような工夫が望まれると思う。(No.105)
- ・ パワーポイントなど画像を多く使うようになったが、量が多くなり、学生がノートをとらずファイルのコピーを希望することが多くなった。いかに学生が目耳口を動かして短時間で有意義な勉強ができるようにするかが重要だと思う。(No.110)
- ・ 本書を読む教員の姿勢が大きな問題だと思うので大きな改訂は必要ないと思う。ただ、学部によっては授業内容(目標)が知識・技術の習得にある場合には、もう少し学生に対する対応の形が本書の例とは異なると思う。(No.119)
- ・ 大人数講義は共通する問題があると思うので加えてほしい。大学内でのインターネットの効果的な教育への利用法があるとよい。(No.121)
- ・ 学生への課題について、教員側の問題もあるが、課題に頼りすぎる点を指摘する必要がある。(No.125)
- ・ 多くの大学において避けられないのが大人数講義をいかに学生にとって有意義な授業

内容にするかが、という点である。TA等のリソースがどうしても十分でない大学もあるが、限られたリソースを用い、また教員への過度の負担なしで、学生参加型の大人数講義がいかに可能であるかを検討いただきたい。(No.126)

- ・ 本書の改訂項目について、すでに取り組んでいる内容であること、学生の実態によって当てはまる・当てはまらない場合がある、授業の特性によっても対応の仕方が変化することなどから、改訂すべきかどうかはどちらかと言うと当てはまると回答した。(No.128)
- ・ 大人数講義における問題は多く、環境整備が特に必要である。学科による学生の授業態度の違い、授業に対する学生の関心の度合い等々、多様な学生の満足感を高めるノウハウもいっそう必要である。語学授業のために、Teaching Trainingに関する、項目もほしい。(No.129)
- ・ 「大人数講義におけるノウハウを増やす」: 大教室における効果的なプレゼンの方法が重要だ。(No.134)
- ・ 私学では大人数講義で苦勞している教員が大勢いる。これまでの実践例で紹介されているものの多くは、100名前後の授業であまり参考にならないため、大人数講義の充実を期待する。(No.138)
- ・ ディスカッションやディベートなど、学生の学習への参加を促す方法について、よりいっそうの充実、総合科目に関する内容、FD活動などの本書の活用の仕方などを望む。(No.167)
- ・ 「学習者のニーズをつかむ」、「授業を修正する」といった項目があるとよい。(ニーズとは、学習者の授業に対する期待という意味)(No.170)
- ・ シラバス作成等は大いに参考になり、次年度の講義に役立てたいと思う。著者の意図とは相違し、教鞭とる人間には教授術を中心に書かれているようにもとれる。その点で、実践的な学問領域である理系の教育にとって、あまりにも教官主体の教育を指導しているようにもとれる。(No.171)
- ・ 大学教員は教育方法論などを系統的に学んではいけないので、それぞれの授業目標はどのような観点で整理されるのか、成績評価とはどのような目的で何をどう強化すべきかなどである。(No.176)
- ・ 他人の授業実践はノウハウというより、ヒントになると思う。しかし、それはヒントにすぎず、すべての人が使用できるわけではない。重要なことはシラバスと授業管理の方法、講義、ゼミ、実習など、授業タイプ別の特質を踏まえた事例だと思う。また、補習、リメディアルの方法についても充実してほしい。(No.192)
- ・ 教授法の充実。たとえば、事例研究の作成と使い方、授業評価の行い方、活かし方、ディベート(知的対決の論理)教育の行い方、ならびに学生によるフィールドサーベイ(学外調査)の進め方などである。(No.194)
- ・ 分野別の具体的事例の提示が直接的に役立つと思う。特に、数学、物理、英語学の基礎的科目および実験、実習科目の事例が挿入されたらよいと思う。(No.215)

2.4 書籍の構成ならびに形態に関する意見

- ・ たとえば、本文の記述中に具体的に矢印や吹き出しなどを加えて注意点やコメントを

書き込むとよいと思う。授業改善の工夫は企業でいえば QCC(品質管理)にも似ていて、いろいろなアイデアがあるはずだ。(例:うるさい授業では名簿順に席決めをする、必ずメディアを使い学生を引き込む、授業のはじめは規律して挨拶をする、途中で体操を取り入れるなど)(No. 9)

- やや分量が多いよう感じる。改訂する場合、当然さらに分量が増えることになると思うので、その点が悩ましい。(No.21)
- もう少し紙面にゆとりがあれば読みやすいと思う。(No.38)
- いくつかのトピックや対象別にシリーズするのもひとつの方法だと思う。また、読者が活用できるいい仕組みをあわせて紹介すると面白い。FD 活動は大学により異なるが、良い例はどんどんまねし合えばよいと思う。(No.45)
- 現版でも十分に読み易いものになっている。あえて言うならば、日記 基本編へのページ移動は少々面倒なので、日記のところに対応する基本編のページを記載したうえで、数行以内でそのエッセンスが記述されていると通読しやすかったかもしれない。(No. 82)
- 多色刷りでもっと見やすい紙面づくりも可能だと思う。(No.117)
- 本書はノウハウ中心の記述であるが、抽象的な説明が多くて具体例が少ない。倫理学のティップス先生の体験が本の冒頭にあるが、実体験なのか作文なのかよくわからない。(No.124)
- 順に読みすすめていくことはあまりないと思うので、いかに検索しやすくするか、目次を魅力的にするかが大切だと思う。(No.132)
- 枠囲みの所はそのままコピーとして使いたいものが多い。見開きで納まる分量とコピーライトの明記があると助かる。(No.133)
- 実践的技法を一般的に追求してもいずれ限界が来る。個別的学問分野の教育のあり方とドッキングしないと、一回限りの問題提起で終わってしまうのではないかと思う。(No.148)
- 授業日誌編は読みやすく、共感できる内容であった。授業の基本編は、具体的でわかりやすく、コラムも興味深いものだった。(No.150)
- 現状でもかなり読みやすいと思う。多くの事例があると参考になると思うが、自分では気づきにくい失敗事例がとくに参考になるかと思う。(No.172)
- 気軽に読め、つまみ食いのできる秘訣集というコンセプトからすると多くを盛り込んで大部なものになってしまうのはよくないと思う。以下のことを充実してほしい。テーマ別により進んだことを知りたい場合の文献案内、必要な情報を集めるガイド、参考文献(本書 P.182,183)に記載された、本の内容紹介などである。(No. 176)
- GIO、SBO や LS を知らない教員も多くいる。これらの説明がほしい。(No. 180)
- 米国を主として、引用されるようだが、英国や独、仏、伊などの例も引用してもらえるとさらに多様になるのではないか。(No.184)
- 「シラバス」を巡る理論的・実践的検討には敬服した。シラバスと講義要項との分別はもっと強調してもよいと思う。コラムなど執筆者の記名が必要かと思う。(No. 188)
- 「授業日誌編」は、特に興味深かった。この部分をさらなる充実を希望する。(No.191)
- 読み物として現行のサイズは適当と思う。これ以上詳しいものを作る場合、別に詳解

版を作成したらどうか。(No.202)

- ・ 教員の経験、科目により必要なノウハウは異なるが、本書は共通ベースラインをカバーした良書だと思う。今後、アンケート項目5の内容をカバーする改訂を行う場合は、教育、科目、eラーニングといった対象による分冊が有効だと思う。(No. 204)
- ・ 学生の学習(自習、宿題)の実例もあれば役立つ。「シラバス」については文中でも指摘されていたようにまったく誤解していたので、実例が2、3あるといいと思う。(No.215)
- ・ ティーチングポートフォリオの作成、レポートの控えを取らせる等々、具体的なノウハウは非常によいが、若干少ないように思う。すぐ使える How to が多いとよいと思う。(No. 216)
- ・ 授業の様子を mpeg ビデオとして収録した小さな CD-ROM を付録としてはどうか。たとえば、「いい」といわれる授業の様子や「悪い」授業の様子、といった形で。(No.220)

2.5 現状維持

- ・ 現状でも十分読みやすい。フランクな書き方は、若手教員や学生、大学院生には抵抗なく受け入れられるが、シニアの方は敬遠しそうな気がする。重厚さをなくした分、見た目で読まないタイプの人もいると思う。(No.8)
- ・ 最大公約数的なものとして、現在の形式がベストだと思う。(No.16)
- ・ 十分読みやすい。(No.54)
- ・ 本書はうまくまとまっており、読みやすく工夫されており、完結しているように思う。アンケート項目5を特化したテーマで別に編まれても良いと思う。(No.58)
- ・ 特に改訂が必要とは感じない。(No.85)
- ・ あと2、3年は「初版」のまま十分な感じがする。(No.145)
- ・ 本書は授業改善への第一歩を促す意味において完成されているのではないかと思う。(No.155)
- ・ 改訂の必要性をあまり感じない。強いて言えば、「上級編の開発」、「理系編の開発」を望む。(No.164)
- ・ これでひとつの完成型のように思う。(No. 182)
- ・ 現行のものはどこからでも読め、また読みやすいので、この点は維持してほしい。(No.202)
- ・ 現行でも十分読みやすいのでその点での改訂は特に必要ないと思う。現在の方向性を続けてほしい。(No.205)

2.6 その他

- ・ 大変参考になるので、続編を期待している。(No. 61)
- ・ 授業法に則った講義が果たして面白いのか、疑問に思う。また、自分の体験からの意見だが、ベテランの教員は旧来型の一方通行なマス・プロ講義をされるケースが多いことから、キャリアのある教員の自己点検的な意味合いのあるマニュアルは必要になると思う。本書のような熱意のある取り組みをうらやましく感じた。(No.89)
- ・ 一部の科目で利用することを思案中である。(No. 93)

- ・ 本書の5章の「最低5分でもいいから次の授業のために時間とりましょう」など、内容は教員が置かれている現状を十分に認識した上で書かれているので、説得力がある。また、初心に立ち返らせる力がある。教授法の理論的背景を充実させる類の本は他にたくさんあるので、実践ノウハウこそが本書の魅力だと思う。(No.96)
- ・ 自分の授業に反映させたいことばかりだった。(No.173)
- ・ これからは、学生中心で「ぜひ聞きたい」と思う授業が要求される時代になると思う。新しい指導法と内容は教授者の命であり、いつも持っている課題である。(No.199)

3. 『成長するティップス先生』についてご意見等ありましたら、ご自由に記入してください。

- ・ 非常にわかりやすく役立つ本になっているのに感服した。(No.1)
- ・ 全体として大変楽しく読ませていただいた。ゼミでの議論のさせ方は、自分の研究分野とも関連して特に参考になった。あとがきにあるように、大学全体が向かおうとしている方向や、現状が授業改善の大きな障壁になっていることなど同感である。本書の内容の多くは自分にとってはすでに実践していることだが、同じ職場の先生方の意識はまだ低いというのが現状だ。自分の職場でもこの本を多くの先生方に勧めたい。(No.4)
- ・ ディシプリン・フリーな立場の総論編とディシプリンごとの特質を踏まえた各論編が分冊構成であってもよいと思う。教育学領域からいえば教授方法については教科教育法や教育方法論、内容論等で教職志望の学生に指導する内容とも重なる。(授業計画、指導案等、教材研究等) 大学教員に対して、小中教員と同じような系統的な教授法のトレーニングが必要かと、最近特に思う。(No.8)
- ・ 授業改善についてはさまざまなノウハウがあり、ある意味その先生の専売特許として秘得または暗黙知として眠っていると思われる。これらを明示化・表示化して可能な限り盛り込んでほしいが、そうするとハンディさが失われることになる。悩ましいところだが、うまく捌いてレベルアップしてほしい。特に具体的な事例は「目からうろこ」になるように思う。(No.9)
- ・ 年齢に関係なく、柔軟な人は好意的であり、硬直している人はいやいや一部を読んだようだった。なかなか大変ではあるが、元気を出してやっていきたいと思う私(共)には、「はじめに」の精神が大いに援けになった。期待している。(No.12)
- ・ 基本的なアウトラインは満足しているが、この本は「まじめな国立大学の学生」にしか活用できないといった批判を耳にしている。高等教育進学率が50%を越える中で質の多様性といった点からも「授業改善」方法を示してほしい。(No.13)
- ・ このようなすばらしい書を世に送り出されたことに敬意を表したい。日々のFD活動を通して実感していることは、このようないい素材があっても教員側に問題意識がなければ浸透するのは難しいということだ。名古屋大学での実証済みの試みなどあれば聞かせてほしい。(そういった内容を入れていただくとよい。)自分自身、名古屋大学の文学部で非常勤をしているが、文学部ではあまり『成長するティップス先生』は浸透していないように感じる。(たとえば、シラバスは90字以内と制限つき) 全学的な広まりに至っていないということだろうか?(No.16)

- ・ 本学は 16 年度 4 月に開学した。12 月に授業アンケートを実施する予定がある。惠贈いただいた著書は教員に回覧し、本学図書館に置き活用させていただく。FD の講演など早い時期に検討したいと思っている。(No.18)
- ・ 多様な学生への授業の工夫で悩む大学教員は多いと思う。そういった声を集約して実例集(成功例、失敗例)をまとめると面白いと思う。御書は大変よくできた本だと感じているが、もう少し双方向性があるとさらに共感できると思った。(No.21)
- ・ 具体的で実践的だ。砕けたパーソナルな文体にも好感が持てた。執筆者の方々の教室で自分を飾らないあり方がしのばれた。私は学生との人間関係がよい大学教育はとても重要だと感じているので、執筆者の素直なあり方はとても貴重だと思う。貴書の一部を拙著「大学の授業を変える」(晃洋書房、2004 年)に引用させていただいた。貴書のような革新的で実践的な書物が世の中に広まっていることをうれしく思う。(No.23)
- ・ 各章や節ごとにその章の背景となる理論など、本文中に記述できるスペースが取れないようであれば、参考文献を記述していただけるとよいと思う。(No.25)
- ・ 書籍版『成長するティップス先生』になる以前の Web 公開のみの頃より時折参考にさせていただいているので、大変感謝している。(No.26)
- ・ 初めて知ったので、今後は参考にして本学の授業改善に役立てていきたいと思う。(No.29)
- ・ 具体的内容で、大変読みやすく、自分の授業にも役立ったが、読む時間という意味ではもう少しコンパクトにしてもらった方がよいのでは、と思う。少々饒舌なところが気になった。(No.32)
- ・ 自分は大学の職務として FD 担当をしている。新しい大学なので、FD 等始まったばかりである。試行錯誤の状況の中、『成長するティップス先生』を恵送いただき感謝している。貴書の存在と HP を拝見したが、自分の授業を見つめなおす契機になった。当大学の教員にも本書を勧めたいと考えている。(No.33)
- ・ 勉強の仕方や、学習の喜びがどこのあるのかを知らない学生が多くなっているの、これらの観点にあった“秘訣集”が必要ではないかと感じる。有用な本をありがとうございました。(No.36)
- ・ 本学は看護福祉学の大学なので、看護系大学からも FD および授業改善に関するような資料が届いている。『成長するティップス先生』に関しては、そのひとつとして紹介し、特に専門教養系で活用することを想定した。内容的には読みやすく、理解しやすいものとなっているが、他方、この本を軸に各先生が個性を発揮できればと考えている。現在のところ、改訂に関して積極的な意見はないが、今後一つの素材として利用していきたい。(No.43)
- ・ 本学においても「FD ハンドブック」を作成し、実践面での有効なツールとして活用されることを願っているが、現状では利用率はきわめて低い。貴大学のこうした試みが、どの程度実効性を有しているのか、ぜひ伺いたい。(No.44)
- ・ 改訂版を楽しみにしている。(No.45)
- ・ 授業日誌編を拝読したときは、見につまされる思いをした。自分も実感している。なかでも、コースデザインに興味を持った。そこで以下の 2 点について掘り下げていた

だきたい。科目が大学でコース制をとっている場合、あるコースの主要科目であると同時にほかのコースの関連科目となっている場合、どこに目標を置くべきか、そこでカリキュラム全体、コース制全体との整合性を考えなければならないが、この場合の科目のデザイン法。学生の学習履歴や学力の差が著しい場合、「この授業を受け終わった学生は、何ができるようになっているか」について。「何が」ではなく「どの程度」がむしろ問題になる。そこで、「学生の知的向上」のスタートラインとゴール(目標)について取り上げていただきたい。(No.47)

- ・ハンドブック形式で持ち運びやすく、読みやすい。難しい表現も少なく、気軽に読むことができる。(No.49)
- ・授業設計にあまり熱心でない教員に「最低これはやってください」という形で守らせるための要約版があるといいと思う。(No.51)
- ・秘訣集をありがとうございました。Web版を利用して自分なりのチェックリストを作成して取り組んでいた。学生からの授業評価の視点を取り入れての検討をされると更に成長するのではないだろうか。(No.53)
- ・授業技法に関して非常に有益な助言に満ちた示唆的な書であると思った。この種の書物の中では群を抜いていると感じた。ただ、執筆者のグループの中に女性が一人でも入っていればもっと色彩の豊かなものになったかもしれない。興味深く拝読させていただいた。(No.54)
- ・新任教員はもちろん、経験の長い教員にも読みやすく、とっつきやすく編集されていて感心した。本音で語られているところがプライドの高い教員にも受け入れられやすいのではないかと思う。ただ、自分自身、この内容に全面的に肯定的で日々実践するようにしているが、アメリカ色の濃いことに対する反発を持つ人もいることが懸念される。(どうすればよいかわからないのですが・・・)

たとえば、(ドイツのエリート教育としての大学教育の影響を強く受けた)帝大系の大学で自らが受けた教育というものを理想としておられる先生方には「学生との契約」などの概念そのものが受け入れにくいと思う。“You cannot teach an old dog a new trick.”ということわざを思い出しては、FD研修の限界を感じている。(No.58)

- ・さまざまところでベテラン教員にも役立つと思われることに触れていると思うが、このような本であっても多くのベテラン教員のうち一部が興味を持たないという大学教員の意識の低さが目立つものと考える。このような教員をも巻き込むようなTIPSについてもあるとよい。(No.59)
- ・大変工夫されて読みやすいと思う。本学でも参考にさせていただく。(No.61)
- ・東京でのポスター・セッションで名古屋大学のすばらしい実践を知った。怠慢を恥じている。今後、ご指導を賜るよう、お願い申し上げます。(No.64)
- ・多忙な先生方が本一冊の細部まで読んでくれるかどうか疑問に思う。Webのほうが有効かもしれない。多忙な人のためには、FAQを前に移して、これをベースに内容を再配置すると使いやすいかもしれない。内容は使う気になった教員にとっては、とても有効で、よく書かれていると思う。このようなことが大学教員の常識となり、われわれの活動が不要になる時代が来ることが期待される。(No.67)
- ・冊子・文献をありがとうございました。早速6冊購入し、関係教員に配布し今後の授

- 業改善に役立てるよう進めた。(No.69)
- ・ 新人教員の導入教育には非常によいテキストの一つであると思う。FDのために全教員に配布したことがあるが、全教員が一度目を通しておく必要があると思う。ありがとうございました。(No.70)
 - ・ 個人的なことだが、私は大学生の時、大変面白い授業をされる言語学者に出会った。授業でディスカッションをする楽しさを知り、言語学の道に進んだ。今、教える立場になり、やはり理想としているのはそのときの先生の授業である。本書にもあったが、いろいろな学生の意見・考えをまとめるのは大変で、まだまだうまくいかない部分も多いが、学生とともに考え抜くのは本当に楽しいと感じている。この本の内容は私にとってとても理解しやすく、教えることに慣れてきた今のタイミングで拝読させていただいたことに感謝している。ありがとうございました。(No.80)
 - ・ 原版は学部学生との対面授業を想定されて書かれているが、今後は社会人学生やe-Learningでの受講生等、学習に十分に時間を割けない学生、もしくは対面授業外を想定された別冊が出版されればぜひ拝読したいと考えている。授業形態、および学生の多様化に伴う、それに即した新しいティップスのご教授に期待する。また、本書とは直接関係ないが、近年、多くの方、場所で議論されている、インストラクショナル・デザインについて、本書と同等の読みやすさを持った解説書が出版されればと思う。多くの方の講演を何度か拝聴してきたが、勉強不足もあり、理解・納得しかねているのが現状である。本書を作成・出版されたノウハウを持つ貴センターにおいて、次期出版プロジェクトとしてご検討頂ければ望外である。(No.82)
 - ・ 教員が注意すべきポイントをうまく提示していると思う。FDのテキストとして周知しその上で教員それぞれの工夫によって多様な授業形態が生まれてくれればよいと感じた。ただ、どの大学でも同じだと思うが、読ませたい教員がこの本を読むことはないのでは、というのが悩みである。(No.84)
 - ・ 授業の基本編は興味深く有益であった。実践したいと思う例もあった。授業日誌編は、あまり評価できなかった。無益なのではなく、登場人物があまりに物わかりよすぎて、嫌味に思え、拒否感が先にたったからである。内容はよいものだと思うので、その記述法や読者向けのアレンジに工夫がほしいと思った。「あとがき」にあるような事柄を踏まえた、人物像がよいかとも考えるが、それでは本来の目的をそれたものになるのかもしれない。全体としては学ぶところの多い本で、よい機会を与えていただいた。(No.86)
 - ・ 大学の授業に関して、今まで勉強したこともなかったので、内容は非常に役に立つものだった。自分の授業にどの程度役立つかわからないが、もう少し学生の立場に立った授業へと改良したいと思う。(No.88)
 - ・ 拝読させていただき、強く感じたことは「大学の大量化」の問題だ。選択の自由裁量の度合いが高まることと、個人の学生が自ら責任を負う部分とが、表裏一体の関係にある。そういったテーゼをかつての学生は体得したものでした。あまり学生に対してメニューを丁寧に提供しすぎると自らメニューを作成できるタイプの人材が育ちにくくなります。とは言っても、自らを開発していける人材は、教育、ことに大学教育によってその個性が開くものだと決まっています。また、かつてに比べて、やや

管理が強まった感じがする空間に大学が変化したとしても、そこから時代、あるいは次代を担う人間が生まれ、出会い、育っていくでしょう。教員の講義はその一助ですらなくして単なるきっかけに過ぎない。(No.89)

- Web 版も便利だが、やはり単行本のほうが、気がついた時に、すぐ手にとって読めるので大変ありがたい。全教員に紹介したいと思う。ありがとうございました。(No.90)
- 本学では平成 13 年ごろに当時の教務委員長が Web ページへの公開がなされていることを全学 FD 委員会でアナウンスし、参考にするように勧めた。平成 15 年度の FD 委員会においては、FD 活動について系統的に審議する過程で自分 (FD 委員長) の発案で貴書を希望する教員に無料で配布することを提案し、実行に移した。貴センターの先駆的な取り組みに敬意を表したい。今後、よりよいものに発展させていただければうれしい。ありがとうございました。(No.91)
- 全体的に非常によく纏められており、参考になったが、自然科学系の授業には取り入れがたいような点もあった。私個人としては授業には神経を使っていたつもりだったが、まだまだ足りないことに気づいた。よい勉強をさせていただいた。(No.94)
- 私は教員ではなく、実際にこの本の内容を利用してという立場にはないが、FD 等の担当部局なので、検討していくための重要な参考資料とさせていただけるのではないかと感じている。ありがとうございました。(No.95)
- 新設大学である私どもとしては、諸先輩方のご指導を賜りつつ内容を充実させていきたいと考えている。今後ともよろしくお願いします。(No.97)
- 教育といえば、コツや秘訣といった俗な考えはやめたほうがいい。それらは有用で役に立つものも多いが、重要なことは大学教育の全体構想や理論的背景であろう。それが見られないところがある。更に大切なのは、コツや秘訣というクラフト的知識とセオリーの関係だと思う。(No.99)
- 私が教員ではないが、大学の教育開発スタッフとして本書を紹介し活用している。(No.102)
- 今まで本書について知らなかった。読んでみて授業を実施するうえで参考になることがまとめられていた。今後大学において教育が重要性を増すものと考え、その観点から有意義なものである。(No.104)
- 今後も名古屋大学には基幹大学として私どもの大学にとって、授業の改善のモデルやその議論の基盤になるような『成長するティップス先生』をはじめとした取り組みを続けていただきたいと思う。特に、『ゴーイングシラバス』はうまくやれば、日本の大学にジャストフィットし、便利で効果的でやがて普遍的なアイテムになると期待している。どこの大学のどの教員でも自由に使えるようにするなど、よりいっそうの公開を進めてほしい。そのことで、例えば e ラーニングはどの大学でも一種『俺が、俺が』の我田引水ばかりで、買っては見たものの誰にも使われず、陳腐化だけ進み、せっかくの予算措置がむざむざと溶けていってしまっているという現状も変えることができると期待している。(No.105)
- 教育の仕方に王道、常道はないかもしれない。けれども大学の教員は教育方法をしらなさすぎる。(自分を含めて) 医学教育学会は、先導的役目を果たしているが、それに盲従することなく、自分たちの頭で考えた教育改善が必要だと思う。残念ながら、そ

の時間と機会が少ないのが現状である。(No.108)

- ・ 本書は広く浅く、いろいろな話題が詰め込まれており、大変参考になると思う。しかし読み終えたあと、“もっと深く知りたい、本書の上級編はないのか、あるべきではないか”と考えるようになった。10章、10.3ではスタンフォード大学の例と提案がなされていたが、すでに広島大学でも同様な、全学体制で障害学生就学支援に取り組んでおり、169頁のコラム『・・・すっかりいやになってしまった私なのである。』の記述に驚いた。なお、提案されたことはできて当然のことと思うし、広島大学ではすでに行われている。これまで、障害学生の受け入れの少ない大学に対して示す意味で具体的な事例を示し、改訂して大学の裾野を広げるべきではないだろうか。(No.109)
- ・ 一般の大学で年間を通してゆっくり講義できる場合にはよいかもかもしれないが、医学部では合わないようである。(No.110)
- ・ 機会があれば、私どもの経営学部のFDの会議でご指導いただきたい。『成長するティップス先生』で教えられた部分を早速新年度の準備に活用したいと思う。お礼申し上げます。(No.111)
- ・ 貴大学でまじめに授業改善研究に取り組んでおられることに敬意を表します。弱小工業系大学では多様な質、目的の学生が混在しており、“わかる授業”に苦慮している。本学でも数年前から授業改善に取り組んでいるが、一般的に授業のやり方は教員皆上手だが、学生の科学・技術の経験不足などのためか、学習への動機付けや技術の楽しさを誘導することが大切に思う。工業系特有のものかもしれないが、基礎学力重視を意識しすぎる教員が多く、上記の動機付けなどが不足していることが本学では問題だと思う。(No.112)
- ・ 自分が日常に取り組んでいる内容もあり、少し安心した。しかし、コース・クラスの関係性はわかっているところだったので、コース全体のマネージメントを今年はもう少し考えてみようと思っているところである。前半の教員の心の動きの記述はとて「思い当たる」もので、共感を覚えた。がんばってほしい。私も少しずつ進化しようと思う。そのような気持ちを確認できた本だった。(No.114)
- ・ 今回FDフォーラムに参加して貴大学のFDプログラムを知った。その中の重要なプログラムの一貫として『成長するティップス先生』と呼ばれるツールを知り勉強になった。自分の欧米での留学経験から学部における授業においても学生が主体的に参加できる授業を自分なりに話してきたつもりだが、周りの教育や受身である学生の反応などと自分のイメージとのギャップに悩んでいたのも、本書を読んでそのギャップを埋める方法が見つかったような気がした。(No.115)
- ・ ひとつのセンテンスが短いので、拾い読みも気楽にできるので、非常に使いやすいと思う。ただ、今後もさらに事例集や多色刷りにしたりすることで、この本自体もさらに成長していける余地がありそうだ。高等教育でのこの本の存在価値は十分あると思う。なお、蛇足だが、「題名」はややインパクトがない気がするが・・・もったわりやすいタイトルでもよいように思う。本を送付していただきありがとうございました。ほかの教員たちも紹介したいと思う。(No.117)
- ・ 教員にとっても大切な基本的姿勢を考えさせるよい書物であると思う。私どもの大学における大半の授業は知識と技術を習得することが主な目標となっており、本書に述

- べられている内容をそれぞれの教員が自分の立場に置き換えて実行することが必要であると思う。(No.119)
- ・ 学生によって「よい」授業の要件とは何か。教育・研究の戦略的キャリアパスについて。などについてもコラムなどを入れていただけると役に立つと思う。改訂版を楽しみにしている。(No.121)
 - ・ 大学教員の多忙化という現実がある。自分の例で言えば、一週間に授業が大学院を含めて8コマ、これを3日間にまとめているので、水曜・金曜は1日3コマで、1日の授業が終わるとヘトヘトである。空き時間の多くは会議でつぶれ、通勤時間にも時間がかかり、肉体的にも限界である。授業は毎年大体同じことをやるので慣れているが、授業中にもあちこちから電話がかかってくるのでそのたびに中断してしまう(研究室でする授業のとき)。ティップス先生の授業方法は丁寧なものといえるが、現実にもそこまでやるのは時間的、肉体的に難しいと思われる。(No.124)
 - ・ 授業を進めていく上で学生の立場、教員の立場により捕らえ方はさまざまであると思われるが、教育の現場において、学生は質的に均一ではないと考えられる。読んでみた感じでは、捕らえ方としてかなり均一であるとして捕らえてあるような気がした。質的に異なったものとして考え方をもう少し入れてあればよかったと思う。(No.125)
 - ・ 海外の大学・大学院にて非常勤講師として勤務をしていた経験から、シラバス作成や授業計画の立て方についてはある程度の知識があるが、『成長するティップス先生』においては、日本の大学生のニーズにいかに対応するか、という点が考慮されていたので大変参考になった。(No.126)
 - ・ 本学でもFDとして授業方法改善を前向きに研究、実践しているが、著者のような組織的な取り組みには至っていない。今後の改善への過程の中で参考にさせていただきたい。(No.128)
 - ・ 教科書の利用の難しい科目が、年間3、4科目もあり、講義の準備は大変である。大学、学科などにより相違はあるだろうし、また、教員の能力にも違いがあるだろうが、1週間に6、7科目も異なった授業を担当する場合は、『成長するティップス先生』の授業方法のすべてを取り入れることは難しい。可能な部分を参考にして、見習っているのが現状である。(No.129)
 - ・ 評価に関しては、講義科目においては、小論文あるいはレポートを書いてもらうが、課題の与えかたに工夫を加え、あらかじめかなり詳しく指導しておく、結果は期待以上のものが提出されることがあり、今回本書を読んで、今まで学生のレポートに対する私自身の姿勢がきちんとできていなかったと感じた。(No.129)
 - ・ 非常に独創的な試みで、またWeb上で公開もされているので、教員にとっては大変有難い試みであると思う。FD・授業改善は、教員個人としても組織としても、重要かつ急務なことなので、今回のこの企画に接することができ、感謝している。個人的には、このような内容については、個々の教員はすでに自ら実践しているという自負があり、すぐに心を開いて接することは難しいと考える。それに対し、ある教員のキャラクターを用いて、入りやすくするという考えは十分興味をもてる内容だ。しかし私にとってはこのキャラクターは多少なじみづらく、率直かつ明快な記述があるほうが入りやすい気がする。また分野や授業の考え方がまったく異なる場合もあるためその辺りの

- 多様さも今後期待している。(No.130)
- ・ とてもよい本だと思う。執筆者御一同に敬意を表する次第だが、なぜか今ひとつ「読んでみよう」という気持ちが沸かない。なんとなく、「これは基本文献だから読まないといけません」といわれ、「はいはい」と読むようなところがある。「よんでみたい!」と思わせるような工夫というものが何かないかと思うのだが。私も思いつかないが……。 (No.132)
 - ・ アンケート回答において、久しぶりに読み返した。初心に戻った気分になれて面白かった。(No.133)
 - ・ 本学では、2003年4月に教育エクセレンス支援センターを開設し、その中にFD推進委員会を設け、全学レベルのFD活動を実施している。この委員会のメンバーには、FD活動の参考資料として本書を配布した。また、2004年4月には新任教員に本書を配り、授業改善に努めていただいている。このように本書は、本学におけるFD活動に有効に利用させていただき、感謝している。FD推進委員会は、2003年度に全学教員を対象に授業の工夫についてのアンケート調査を実施した。その結果、授業改善のためのさまざまな情報が得られたので、この内容をもとに現在、本学版のティップス集の編纂を進めている。次項のインタビューについては編纂作業が終わるまで控えさせていただきたい。(No.134)
 - ・ FDに関する情報は全教員が共有し、ベクトルを揃えて授業改善に取り組むことが基本だと考える。「『仏』先生が大学を成仏させる」には全く同感。「単位」は努力し、或るレベルに達した学生にだけ与えられるべきで、成績評価の公平性、透明性、厳密性、をすべての教員が等しく心懸ける必要がある。年々、入学生の平均学力の低下傾向が見られることから、特に初年度教育に創意工夫がより必要になっている。ティップス先生の初年度教育に対する考えを盛り込んでほしい。また、多様性として人種、国籍の多様性に言及されているが、多くの私学同様、私どもでも高校での学習科目、学力、勉強意欲の多様性への対応に苦慮している。(No.135)
 - ・ 全体的印象として、高校教育と大学教育の違いがよく分からない。唯一10章において、大学ならではの視点が現れている。私自身大学入学時に、チューターから「大学とは勉強するところだけではなく、勉強の仕方を学ぶところだ」といわれたことを思い出す。その意味で学生の学び方にも重点を置いた発想が待たれる。(No.136)
 - ・ 参考になる点が多くあり、教養教育部の先生方全員にWebアドレスを紹介したが、多くの先生方が拝見され、書籍も購入したいという声もかなり聞いている。全般的にもっと詳しいバラエティに富んだ改訂版にしてほしい。(No.137)
 - ・ コラムも面白く拝読した。とくに100頁の「トイレ教授」や、147頁の「すし屋のアンケート」の話など。しかし、網掛けにしないほうが読みやすいと思う。165頁の同じ内容のレポートや引用だけのレポートの例を、私は学生の学力の低さだと思っていたが、文化的背景の違いと教えていただき納得した。本のタイトルがもうひとつしっくりこない。どうしても『～先生、さようなら』を連想してしまう。(No.138)
 - ・ 著書をお送りいただき、教員に回覧したが、手元にまだ戻ってこない状態。関心を持っているので、今後ともご指導いただきますようお願い申し上げます。(No.139)
 - ・ 2002年4月にスタートした新設のスポーツ大学で、授業改善のための取り組みを始め

た。今は授業評価表の作成を試みている。さしあたり、講義方式の授業に限定した、授業評価、改善に取り組んでいる。『成長するティップス先生』はコースデザインから評価・改善までの全体について書かれており、「評価」だけに目を奪われていた私には大変参考になった。献本に感謝している。(No.140)

- ・ カタカナが発音どおりでない。理解しがたい。古典的先生をもじったものと思われるが、もっと日本語を大切に扱ってほしい。(No.143)
- ・ 読み物としてもよくできていて楽しい。どこの大学でも授業改善について試行錯誤しているところだが、参考になる。大学全入時代を間近に控えて、大学は教育に大きく舵を切らざる終えなくなった。そんな時期の本書の出版は、まことに時宜を得たものと敬意を評する。(No.145)
- ・ 授業日誌は新人向けには効果があるが、ベテランの教員には本を読みにくくして逆効果と考える。(No.149)
- ・ 本学は平成 17 年度より、男女共学の 4 年制大学として、開学する。大きな変革が求められている現在、本書を参考にし、全学の教員が各々にコースデザインを考え、教授法を見直していきたいと思う。また、同時に大学全体として、FD をどのように組織化し、運用していくか、構築していきたいと考える。ありがとうございました。今後ともよろしくお願いします。(No.150)
- ・ かなり初心者向けの内容だと思う。もう少し具体的かつ事例を交えた授業改善法を示すともっとよいものになると思う。例えば、教師は授業中に、いすに座って講義するより、身振り手振りを交えるなど、絶えず動いていると学際注目度は確実に上昇する。じっとしていると学生に注意力が薄れ睡魔に襲われやすくなる。(No.151)
- ・ 本書や、Web での公開はわれわれ教員にとってバイブル的な価値のあるものだと、敬意を評する。しかし、大学教育を本書のような内容で、行っていくことは大変苦勞する。一週間に 5、6 コマの授業、年・前後期で 10 から 12 科目(コース)をこなすのは体力的にも本当に大変である。学生のレベルが低いとその大変さは増すばかりで、本書を私立大学経営者が労働強化に利用しないよう祈る。(No.152)
- ・ 授業デザインのための「秘訣」というより授業をするもの誰もが心得ておくべきことだと思う。早期にこのような取り組みを始めたことに敬意を表する。(No.153)
- ・ 本書 146 頁のあたりに「何度も授業評価アンケートをとるべきではない」との記述に対して。いわゆるフルバージョンを毎回とる必要はないと思うが、自由記述と組み合わせた形でその日の授業を振り返り、また半期終了後に改めて授業の流れをチェックする意味で、ライトなバージョンを毎回とることには意義があると思う。(No.155)
- ・ 楽しく読めて参考になった。(No.156)
- ・ 教育(方法)学を専攻した人間から見れば、もの足らず、教育経験の少ない若い講師では中途半端・・・なんとなく教育(授業法)は知っているが、理論的根拠を求めなくては。となれば、特に授業用法論の具体的例のところ、理論的まとめ ここでいうのは何かを整理しておくとい。各方法論は[・・・ページへ]で示されているが、すばらしい改訂版が出来ることを期待している。FD 研修にも使いたい!!(No.157)
- ・ 非常に読みやすく、親しみを感じるうちに自分の授業改善を考えていける思いがした。活用していきたい。(No.160)

- ・ 恵送いただき、感謝している。啓発されることが多く、今後、参考にしていきたい。(No.162)
- ・ 大変参考になった。自分で思い当たる所を改善しようと思った。「授業日誌編」が、11月より始まっているところが気に入った。現場をよく見据えている証拠だと思う。(No.164)
- ・ 大学教員が抱える授業に関する諸問題がきちんとまとまっている。授業改善に参考になるものばかりだ。特に5、6、7章は試みようと思った。「あとがき」にあるように、会議や学生指導で追われている現状を変えることも授業改善につながると思う。(No.165)
- ・ 画期的試みだ。個人的には大変興味深いものだった。(No.166)
- ・ 硬い表現、アカデミックな言葉の羅列で敷居を高くしていないことに好感を持てた。初心者向けで良い講義要綱のあり方を本書で実践している。本書69頁のシラバスの一例は面白かったが、多くの先生はコース開始前のあのような完璧な企画は立てられないだろう。走りながら補っていくのが普通だと思う。そのような時のコツが示されていれば役に立つのではないか。あまり網羅的にならず、コースデザイン・実行・そのフィードバック、学生を授業に巻き込むコツ(ディスカッションの進め方)、多くの教員が見落としがちな自己の言動の抑制(学生の多様性、学生からの相談)などに内容を絞ったことはよかったと思う。自分が誰に言われることもなく日常的に行っていたことも、本書のような形でその意義を整然と説明されると、後ろ盾を得たようで勇気を得る。(No.168)
- ・ 本書は私のバイブルである。本書の最大の長所は、授業の成否がコースデザインにあると言い切って、その精神で貫かれているところである。しかし、“計画がすべて”という発想には100%同意できない。授業は生き物であり、毎年受講する学生も変わる。学生の理解度、進度は「現場」の空気を読みながら微調整が必要だ。授業を修正する必要性が出てきた場合はどうすればよいのか。その視点を加えてほしい。(No.170)
- ・ 大学教官が授業方法について系統的に研究され、貴重な提言をされていることに敬意を表す。これまでは教官一人一人の経験と見識に依存してきた面が多かっただけに拝読して勉強になった。次のステップとは思うが、理系の授業、セミナー実習にもこうした提言があれば、明日の科学技術の発展に大きな貢献ができると思う。貴大学は私が存じ上げている中でも多くの教官が千種・鶴舞キャンパスで指導的な役割をそれぞれの領域で果たしておられる。期待している。(No.171)
- ・ 自分の授業を改めて見直す良い機会となった。(No.173)
- ・ 教育の到達できるのは高々「損得」までであるという言葉がある。「真贋」、ましてや「善悪」を教えることなど、教育ではとうてい無理ということだろうか？また「本当に教育が必要なのは教育する必要がない人」という言葉もある。教育が内在するこうした本質的な難しさや、ある意味での「矛盾」をどのように伝えればよいのだろうか。伝えたからといって誰にでも分かるものではない。新人だから分からない、ベテランだから分かるというものでもなからう。本書のようなノウハウ本がこうした話題に触れるのは場違いだろうか？(No.175)
- ・ さらに大きく発展させて、種類のケースで使用できる、辞書的なものに仕上げてほし

- い。(No.178)
- ・ とても分かりやすい書籍。授業の組み立ては論理的なものの考え方が必要。この話は論文作成、研究計画すべてに関係する。前任地(東邦大医学部)では、全教員にカリキュラムの作り方を教えていた。その経験から言ってもこの本はとても分かりやすい。(No.180)
 - ・ 個人的なテイストではあると思うが、一人の教員が語るスタイルは親しみが持てる。しかし砕けた感じもする。全体の語りのトーンとしてはもう少しドライな文体での記述のほうが良いかと感じている。(No.182)
 - ・ まず、大学の全教員が通読すべきである。その理由は、「すべて分かっている。もうそのように実践している」という教師には、確認の意味で、又、自信をつけてもらう意味で。「別にこれを読まなくても・・・」というくらいの教師には、さらに良くするための方法を、又、考え方を提供する意味で。私もそうだった。特に用語について、いろいろ理解することができた。「何?これ」という教師には、学生を目の前にする意味を自覚させるために。今後も活用しようと思う。池田先生には、昨年セミナーで貴大学の点検・評価の例を話していただいたときにお目にかかることができた。今後ともよろしく願います。(No.184)
 - ・ こうした努力に敬意を払い、また継続されることを願っている。(No.185)
 - ・ いずれの頁も大変役に立った。さらなるバージョンアップを期待している。(No.186)
 - ・ 全体として感じたことは、顧客として「学生」をどう位置づけるべきかが、今ひとつあいまいな気がする。授業の主人公(授業の主体)が誰なのか明確でなく、教員の「独りよがり」を客観的に証明する道具になってしまう懸念がある。学生の要望ややる気をどうやってサポートしていくべきか、そのあたりの切り口で教員の個々のスキルアップが求められていると考えている。(No.187)
 - ・ 新入教員へのオリエンテーションというスタンスのようだが、同じ要綱でベテラン教員向け(もはや頑固の域を達している人たちを今さら・・・という感もないわけではない)がも必要だと思う。体験的な持論へ衝撃を与えるような内容がほしい。ゴーイングシラバスに関して資料を請求したが、迅速な対応を頂き感謝している。本学内部での調整が必要だが、ゴーイングシラバスのシステムを本学でも構築したいと考えている。著作権、費用などと越えるべきハードルは高いが、このシステムの先進性と機能を考慮するとこのシステムが大学教育改革に大きく寄与すると考えている。本学へのシステム導入に関して何かアドバイスをいただけると助かります。(No.188)
 - ・ アメリカでシラバスが詳細に書かれるようになったのは契約に基づく社会という背景があったのではないか。だとすれば、アメリカの真似でなく、日本独自のやり方はないのか?(オーストラリアの大学のある先生のシラバスはとても詳細で真似できるようなものではなかった、という意見も聞いている。) 遅々として進まない学内のFDをどう推進していくのか、というヒントなども入れてほしい。(貴大学でさえ全体の2割程度の先生の協力を得ている程度、と聞くと仕方がないかとも思うが) 実習の多い大学(教育大)のため、実習の成果をどう評価するか分からない。(ティップス先生とちょっと趣旨が異なるが) (No.189)
 - ・ コンパクトでとても読みやすい印刷物として楽しく読みながら、学ばせてもらった。

(No.191)

- ・ 福岡の特色 GP フォーラムで教示を頂き参考になった。当大学では社会福祉実習で特色 GP をとったが、“手作りの教育”という内容はあるものの具体的なツールやソリューションを準備できているわけではなく、ゴーイングシラバスのようなシンプルで使いやすく、効果的な方法に興味を持っている。また、全学的にどのように FD 活動を推進されているのか、どのような体制をとり、どう集団的に取り組んでいるのか、機会があれば他大学の状況も知りたい。学部・コースという単位での FD の進め方や実際もティップス先生の日誌などにあるとより興味深いのではないだろうか。(No.192)
- ・ この続編が出たら知りたい。 研究と教育のバランスのさせ方に関心がある。 ウェブ版とゴーイングシラバスは拝見したい。 大学院版はあるのだろうか?(No.194)
- ・ 気軽に読め、また内容は授業改善に大変役立つと思った。新しい大学のあり方として、不易と流行をマッチさせたデザインを持った大学が求められると思われ、そのためにも日々の教授者による授業改革の研鑽が一番重要だと感じた。(No.199)
- ・ FD 編を開発したらいいと思う、 消極的な教員に対するフィードバック法(対処法)について充実してほしい。(No.202)
- ・ シラバスについて考えさせられた。学生にとって使いやすいシラバスはどんな形のものなのかを真剣に議論する必要があると感じた。私自身、授業の進め方は試行錯誤の状態、どうやったら多くの学生に関心を持たせることができるのか悩んでいる。ほかの先生方を手本にすることは参考になるが、それをどこまで自分の授業に導入できるかは分野によるかと思う。全く異なる分野の先生の授業を参観して、それをどこまで消化・吸収でくるのか分からない。いずれにせよ、教師は常に向上心を持ち、授業の改善に尽力することがどれだけ求められているかという点について思い知らされた。(No.203)
- ・ 授業を起こすところからの書き出し、従来の概念を打ち破るシラバスの考え方 (JABEE 審査機関に教えたいほど)は、とても新鮮で役に立った。アンケート項目 5 に関して、各論、分冊が出るのを期待している。(No.204)
- ・ 内容はとても参考になった。本学の授業改善等の取り組みに活用したいと思う。今後の継続的な研究を期待している。(No.206)
- ・ 授業方法を何とかしたいと思いながらも重たい感じの本しかなく、『成長するティップス先生』は「電車の中で読んでみよう」と思えるような本だった。参考になった。(No.207)
- ・ 学部の FD、基礎教育のあり方、教授法の研究と実践等々において大変役に立つ本だった。前途多難な課題が多い中でとても勇気付けられる本を読むことができ、感謝している。(No.209)
- ・ このような努力は一人一人の教員の努力の積み上げだと思われ、多くの教員の揃い踏みも最低限必要と思われる。教員の努力とともに学生の意識も変わるようにしたい。(No.212)
- ・ 本書を拝見し、教育の現場をサポートする立場にいるものとして、非常に驚きと感動を覚えた。今まで FD 等に関する書籍は多数あったが、教育の現場を直接的に取り上げ、実践的内容が書かれているものがなかったように思うからである。本書は非常に

読みやすく、多様化する学生への対応にも通じ、若手教員にとっては良い参考になると思う。(No.214)

- ・ 組織的 FD 活動と個別の授業改善との関係(FD 活動を通して個々の教員の授業改善を促す) について何かサジェスションがあればお願いしたい。また業績評価のうち教育活動の評価について何か考えがあれば聞かせてほしい。評価の目的、方法、基準など、評価の主体について何かアドバイスがあれば教えてほしい。(No.215)
- ・ すごくいい本だと思う。ただ、『授業をどうする』(東海大学出版会)のように具体的な How to アイデアが中心の本のほうが良いところも多くあると思われる。自分の授業の仕方について、いろいろと考える機会になった。感謝します。(No.216)
- ・ 各種 FD 関係には目を通していたが、本書は見落としていた。参考にしたい。現在、FD 活動に取り組んでいるが、かなり他校よりも出遅れた感を強く持っている。感謝します。(No.217)
- ・ 先日、池田先生と e-learning シンポジウムで同席させていただいた。取り組みについても紹介いただき、大変参考になった。(No.219)
- ・ とにかく良い！ほかの教員に勧めます。学部長や学長にも話したい。(No.220)
- ・ 本書は札幌 GP フォーラムにおいて紹介をいただく前から、私の学生時代の恩師より大変良い本だと勧められ、所有していた。昨年より、講師として学生を教える立場となり、本書が良い参考書となっている。改訂において、より充実した内容になることを期待している。大変な作業だと思うが、ぜひ良い本を完成させてほしい。(No.221)
- ・ 特色ある大学教育支援プログラムに応募したいと考えており、本学での FD を模索中である。情報をいろいろと伺い、本学に適した活動を進めていきたいと考えている。(No.222)
- ・ 大学での教育法の工夫について、改善・共有化する上で大変貴重な資料だと思う。さらなる発展を期待している。(No.223)

特色 GP シリーズ1

実践的大学教授法の開発を目指して
「成長するティップス先生」の記録 2004.08 - 2005.03

2005年5月20日発行

発行 名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町1
TEL 052-789-5696
FAX 052-789-5695
E-mail staff@cshe.nagoya-u.ac.jp
